

Zen v15

Status Codes and Messages

Reference for Status Codes and Messages



Copyright © 2023 Actian Corporation. All Rights Reserved.

このドキュメントはエンドユーザーへの情報提供のみを目的としており、Actian Corporation (“Actian”) によりいつでも変更または撤回される場合があります。このドキュメントは Actian の専有情報であり、著作権に関するアメリカ合衆国国内法及び国際条約により保護されています。本ソフトウェアは、使用許諾契約書に基づいて提供されるものであり、当契約書の条件に従って使用またはコピーすることが許諾されます。いかなる目的であっても、Actian の明示的な書面による許可なしに、このドキュメントの内容の一部または全部を複製、送信することは、複写および記録を含む電子的または機械的のいかなる形式、手段を問わず禁止されています。Actian は、適用法の許す範囲内で、このドキュメントを現状有姿で提供し、如何なる保証も付しません。また、Actian は、明示的暗示的法的に関わらず、黙示的商品性の保証、特定目的使用への適合保証、第三者の有する権利への侵害等による如何なる保証及び条件から免責されます。Actian は、如何なる場合も、お客様や第三者に対して、たとえ Actian が当該損害に関してアドバイスを提供していたとしても、逸失利益、事業中断、のれん、データの喪失等による直接的間接的損害に関する如何なる責任も負いません。

このドキュメントは Actian Corporation により作成されています。

米国政府機関のお客様に対しては、このドキュメントは、48 C.F.R 第 12.212 条、48 C.F.R 第 52.227 条第 19(c)(1) 及び (2) 項、DFARS 第 252.227-7013 条または適用され得るこれらの後継的条項により限定された権利をもって提供されます。

Actian、Actian DataCloud、Actian DataConnect、Actian X、Avalanche、Versant、PSQL、Actian Zen、Actian Director、Actian Vector、DataFlow、Ingres、OpenROAD、および Vectorwise は、Actian Corporation およびその子会社の商標または登録商標です。本資料で記載される、その他すべての商標、名称、サービス マークおよびロゴは、所有各社に属します。

本製品には、Powerdog Industries により開発されたソフトウェアが含まれています。© Copyright 1994 Powerdog Industries. All rights reserved. 本製品には、KeyWorks Software により開発されたソフトウェアが含まれています。© Copyright 2002 KeyWorks Software. All rights reserved. 本製品には、DUNDAS SOFTWARE により開発されたソフトウェアが含まれています。© Copyright 1997-2000 DUNDAS SOFTWARE LTD., all rights reserved. 本製品には、Apache Software Foundation Foundation (www.apache.org) により開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品ではフリー ソフトウェアの unixODBC Driver Manager を使用しています。これは Peter Harvey (pharvey@codebydesign.com) によって作成され、Nick Gorham (nick@easysoft.com) により変更および拡張されたものに Actian Corporation が一部修正を加えたものです。Actian Corporation は、unixODBC Driver Manager プロジェクトの LGPL 使用許諾契約書に従って、このプロジェクトの現在の保守管理者にそのコード変更を提供します。unixODBC Driver Manager の Web ページは www.unixodbc.org にあります。このプロジェクトに関する詳細については、現在の保守管理者である Nick Gorham (nick@easysoft.com) にお問い合わせください。

GNU Lesser General Public License (LGPL) は本製品の配布メディアに含まれています。LGPL は www.fsf.org/licenses/licenses/lgpl.html でも見ることができます。

Status Codes and Messages

2023 年 5 月

このドキュメントについて	v
1 ステータス コード	1
Zen ステータス コードのリファレンス	
0	3
1 ～ 199	4
1000 ～ 1999	38
2000 ～ 2099	41
2200 ～ 2299	42
2300 ～ 2399	43
3000 ～ 3099	47
3100 ～ 3199	51
4000 ～ 4099	55
5000 ～ 5999	56
6000 ～ 6050	57
7000 ～ 7050	59
7064 ～ 7140	64
7200 ～ 7499	69
8000 ～ 8499	78
8500 ～ 8589	79
8590 ～ 8599	82
10000 ～ 10100	83
-1000 ～ -5300	84
-100 ～ -199	116
2 メッセージ	121
Zen メッセージのリファレンス	
(プレフィックスなし)	122
BREQUTIL	124
BUTIL	125
MKDE	133
REBUILD	153
VSS Writer	158

このドキュメントについて

このドキュメントでは、Zen 製品の使用時に表示される可能性があるステータスコードとメッセージについて説明します。これは開発者、テスト担当者、サポート担当者を対象としています。コードおよびメッセージでは、製品のインストール、データベースサーバーとクライアントの動作、ユーティリティの使用、またはアプリケーションの実行に関する情報を提供します。各コードまたはメッセージについて、説明または対処方法を示します。

コードおよびメッセージは、ある特定の製品またはプラットフォーム固有のものではありません。現在お使いの製品ディストリビューションの一部ではないユーティリティ、製品、またはプラットフォームについて言及している場合があります。

ステータス コード

1

Zen ステータス コードのリファレンス

ここで挙げるステータス コードとメッセージは、Zen のコンポーネントによって生成されます。

ステータス コードは番号付きメッセージ（「[メッセージ](#)」を参照）とは異なります。メッセージはユーティリティまたは特定のコンポーネントによりエンド ユーザーに返され、通常はプレフィックスと番号で始まります。たとえば、次のようになります。「[MKDE-16 : MicroKernel エンジン](#)をロードするにはメモリが不十分です。」

一方、ステータス コードは、Zen インターフェイスを呼び出すアプリケーションに返されます。ステータス コードをユーザーに対して表示するかどうかは、アプリケーションが決定します。多くの場合、アプリケーションは発生した問題の手がかりとなるメッセージのほかにステータス コードを表示しますが、表示するかどうかを決定するのはそのアプリケーションの開発者です。Zen に付属の各種ユーティリティは、トランザクショナル アクセス インターフェイスとリレーショナル アクセス インターフェイスを使用しているため、ユーティリティ固有のメッセージと共にステータス コードを返す場合もあります。

メッセージの中にはステータス コードへの参照を含むものもあります。

本ドキュメントでは、ステータス コードは番号順に記載されます。次の表は、コード タイプ別に番号の範囲を一覧で示したものです。

表 1 ステータス コードの番号範囲

範囲	コードのタイプ
0	「 インターフェイス正常終了ステータス コード 」
1 ～ 199	「 MicroKernel エンジン のステータス コード」
1000 ～ 1999	「 Windows および DOS ワークステーション用の MicroKernel ステータス コード」
2000 ～ 2099	「 Btrieve リクエスト のステータス コード」
2200 ～ 2299	「 XLT ステータス コード」
2300 ～ 2399	「名前付きデータベースのステータス コード」
3000 ～ 3099	「 MicroKernel ルーター のステータス コード」
3100 ～ 3199	「 ネットワーク サービス レイヤー のステータス コード」
4000 ～ 4099	「 データベース ユーティリティ のステータス コード」
5000 ～ 5999	「 暗号化 ステータス コード」
6000 ～ 6050	「 データ辞書 のステータス コード」
7000 ～ 7050	「 Distributed Tuning Interface のステータス コード」
7064 ～ 7140	「 License Administrator のステータス コード」
7200 ～ 7499	「 許可 のステータス コード」

表 1 ステータス コードの番号範囲

8000 ～ 8499	「コンポーネント管理のステータス コード」
8500 ～ 8589	「ECAS インターフェイスのステータス コード」
8590 ～ 8599	「データベース エンジン サービスのステータス コード」
10000 ～ 10100	「SQL 接続マネージャのステータス コード」
-1000 ～ -5300	「リレーショナル エンジンのステータス コード」
-100 ～ -199	「情報ステータス コード」



メモ ここで挙げるステータス コードは、現在お使いの製品ディストリビューションの一部ではないユーティリティ、製品、またはプラットフォームについて言及している場合があります。

0

インターフェイス正常終了ステータス コード

インターフェイス呼び出しは次のステータス コードを返します。

0：インターフェイスは正常に終了しました。

このステータス コードは、インターフェイス呼び出しが正常に終了した場合に返されます。オペレーションが正常に終了しなかった場合は、0 以外のステータス コードが返されます。

1 ～ 199

MicroKernel エンジンのステータス コード

このセクションでは、MicroKernel エンジンが返すステータス コードについて説明します。

1：オペレーション パラメーターが不正です。

指定されたオペレーションは存在しないか、有効ではありません。

プレリリース版の V8 データベース エンジンに対して一般リリース版の V8 クライアント ソフトウェアを実行していると、このエラーを受け取る場合があります。このような場合には、データベース エンジンをアンインストールし、一般リリース版をインストールする必要があります。

また、このステータス コードは、Workgroup エンジンをインストールせずにクライアント上のローカル ファイルにアクセス、またはローカル ファイルを作成しようとした場合や、サーバー エンジンを実行せずにサーバー上のローカル ファイルにアクセスしようとした場合に返される可能性があります。

2：アプリケーションで I/O エラーが発生しました。

このステータス コードは、通常ファイルが破損していることを示し、ディスクの読み取りまたは書き込みでエラーが起こります。発生したエラーは次のいずれかです。

- ファイルが破損しており、ファイルを修復する必要があります。破損ファイルの回復については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。
- v6.0 より前のデータ ファイルの場合、トランザクション内に大きなプリイメージ ファイルがあり、そのプリイメージ ファイルへ書き込むための十分なディスク容量がありません。
- v6.0 より前のデータ ファイルの場合、複数のデータ ファイルに対して 1 つのプリイメージ ファイルがあります。たとえば、データ ファイルに `customer.one` と `customer.two` という名前を付けた場合、2 つのファイルがそれぞれ `customer.pre` という名前のプリイメージ ファイルを持ちます。
- 768 MB を超える v6.0 より前のデータ ファイルの場合、ロック機能で矛盾が発生しています。ただし、ファイルは破損していません。アプリケーションは、矛盾が解決するまで（実行中のアプリケーションが必要とするロックを、競合するアプリケーションが解除するまで）オペレーションを再試行することができます。
- v6.0 より前の Btrieve エンジンが、v6.x 以降の MicroKernel ファイルを開こうとしました。
- Btrieve for Windows NT Server Edition v6.15.445 を使用している場合、32 ビット Windows アプリケーションでは、アプリケーションを長時間実行した後、ステータス コード 2 または「サービス特有のエラー 0 により MKDE が終了されました」というメッセージを返すことがあります。

3：ファイルが開いていません。

ファイルが開かれていないためオペレーションを実行できません。MicroKernel が何らかのオペレーションを処理する前に、アプリケーションは Open オペレーションを正常に実行しておく必要があります。また、アプリケーションがファイルの無効なポジション ブロックを渡した場合や、ファイルを開くのに使用したクライアント ID 以外のクライアント ID でアプリケーションがポジション ブロックを渡した場合にも、MicroKernel はこのステータス コードを返します。

4：アプリケーションがキー値を見つけられません。

MicroKernel は、指定されたキー値をインデックス パス内で見つけることができません。

- Update または Delete のいずれかのオペレーションでこのステータス コードを受け取った場合、通常はファイルの破損を示しているため、ファイルを作成し直す必要があります。また、破損したキーが原因でこのステータス コードが返されることもあります。この場合、キーを削除してから追加し直してください。

- MicroKernel は、アプリケーションが CHAR 型のフィールドを検索するために GetEqual オペレーションを実行したときに、このステータス コードを返します。これは、CHAR レベルで 2 つのフィールドが一致しないことによって起こります。これを解決するには、KeyBuffer にフィールドと同じ型の文字を埋め込みます。

5 : レコードのキー フィールドに重複するキー値があります。

重複値を許可しないインデックスに対して、重複したキー値を含んだキー フィールドがレコードに存在するため、MicroKernel はこのレコードの追加または更新を行うことができません。また、重複したキー値が既に存在するために、キーの重複が認められないインデックスを作成できない場合にも、MicroKernel はこのステータス コードを返します。

6 : キー番号パラメーターが不正です。

キー番号パラメーターに格納されている値は、アクセスしているファイルに対して有効ではありません。キー番号は、そのファイルに対して定義されているキーのうちのいずれか 1 つと一致する必要があります。有効なキー番号は 0 ~ 118 です。

7 : キー番号が変更されました。

Get Next、Get Next Extended、Get Previous、または Get Previous Extended オペレーションを実行する前に、キー番号パラメーターが変更されました。MicroKernel は前のキー番号のポジショニング情報を使用するため、これらのオペレーションでは前のオペレーションと同じキー番号パラメーターが必要です。

関連した状況として、アプリケーションが Get オペレーションの直後に Delete または Update オペレーションを実行した場合にも、MicroKernel はこのステータス コードを返します。アプリケーションが、Delete または Update オペレーションで、キー番号の値を直前の Get オペレーションで使用した値から別の値に変更した場合、MicroKernel はレコードの削除または変更を要求どおりに行いますが、少なくともこの時点でこのステータス コードは返しません。ただし、削除または更新の直後に実行した Get Next、Get Next Extended、Get Previous、または Get Previous Extended のいずれかのオペレーションでこのステータス コードを返します。アプリケーションが Delete オペレーションまたは Update オペレーションに渡したものと同一キー値をその Get オペレーションが使用したとしても、このステータス コードは返されます。

連続した Get Next、Get Next Extended、Get Previous、または Get Previous Extended オペレーション（あるいは、前述した Delete または Update オペレーションで）の途中でキー番号を変更する必要がある場合は、Get Position オペレーション、続いて Get Direct/Record オペレーションを使用して、新しいインデックス パスのポジショニングを再度確立します。

8 : 現在のポジションが不正です。

レコードの更新または削除を行うには、現在の位置を確立する必要があります。Get オペレーションまたは Step オペレーションを実行して現在の位置を確立してください。アプリケーションがファイルに無効なポジション ブロックを渡した場合にも、MicroKernel がこのステータス コードを返します。

9 : オペレーションが EOF (end-of-file) を検出しました。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- オペレーションがファイルの終わりを検出したか、ファイルの境界（ファイルの終わりまたはファイルの始め）を超えて読み取りを行おうとしました。
- Get Next Extended、Get Previous Extended、Step Next Extended、または Step Previous Extended のいずれかのオペレーションで、フィルター条件を満たすレコード数が、指定された取得レコード数より少なく、かつリジェクト カウントまたはフィルター制限にまだ達していません。
- インデックス パスに従って昇順でファイルを読み取る場合、MicroKernel がそのインデックス パス内の最後のレコードを既に返しています。また、インデックス パスに従って降順でファイルを読み取る場合、MicroKernel がそのインデックス パス内の最初のレコードを既に返しています。

- Get By Percentage オペレーションを使用している場合に、パーセンテージとして指定された値が大きすぎるか (10 進の 10,000 (0x2710) を超えている)、またはファイルにレコードがありません。
- ActiveX Data Control で Get オペレーションを使用している場合、このエラーはアプリケーションをコンパイルして配布した後にのみ起こります。このエラーは開発中のデザイン時には起こりません。配布先のマシンに MSDADC.DLL がないことによってこのエラーが起こります。インストール スクリプトに、このファイル (MSDADC.DLL) を必ず含めてください。このファイルは Microsoft MDAC (Microsoft Data Access Component) ファイルです。

10 : キー フィールドは変更できません。

Update オペレーション中に、変更不可として定義されているキー フィールドをアプリケーションが変更しようとした。

11 : 指定されたファイル名は不正です。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- 指定されたファイル名がファイル命名規則に従っていないか、またはパス名が無効です。ファイル名またはパス名がお使いの環境で有効であるかどうかを確認してください。
- クライアント / サーバー環境で実行中の場合 :
 - アプリケーションが「^」という拡張子を持つファイルを開こうとしました。この拡張子は、MicroKernel が Continuous オペレーション実行時に使用するために予約されています
 - Begin Continuous オペレーションまたは End Continuous オペレーション用のデータ バッファが正しく設定されていません。
 - リモート ファイルを読み込もうとしましたが、クライアント設定の「ローカル MicroKernel エンジンの使用」および「リモート MicroKernel エンジンの使用」の設定が、誤ってそれぞれオンとオフに設定されています。この状況を解決するには、クライアント ワークステーションで Zen Control Center を開きます。MicroKernel ルーター用の「アクセス」カテゴリのプロパティで、「リモート MicroKernel エンジンの使用」の設定をオンにします。詳細については、『Advanced Operations Guide』の「ZenCC でローカルクライアントのプロパティを設定するには」を参照してください。
 - ローカル ファイルを、そのファイルの指定ゲートウェイ エンジンでない Workgroup エンジンを使って開こうとしました。開こうとしたファイルが格納されているディレクトリに移動します。このディレクトリ内の ~PVSW-.LOC にリード オンリー フラグが設定されているかどうかを確認します。リード オンリー フラグが設定されている場合は、読み取り / 書き込みに変更します。
- Workgroup エンジンで動的ロケーター ファイルを使用している場合 :
 - 第 1 レベルのロケーター ファイル内で指定された第 2 レベルのロケーター ファイルの名前が、既存ディレクトリと同じ名前を持っていないことを確認します。また、これらすべてのファイルが同じドライブ上にあることを確認します。
 - 第 1 レベルのロケーター ファイル内で指定された第 2 レベルのロケーター ファイルに、エンジンがアクセスできることを確認します。
 - 動的ロケーター機能を共有するすべての Workgroup エンジンが、データ ファイルが存在するサーバーの場所に対してまったく同じドライブ マッピングを行っていることを確認します。
- DOS クライアント環境でファイルにアクセスしている場合 :
 - Windows for Workgroups ワークステーションで、DOS ブート時に NET START FULL が使用されていません。DOS クライアント モードでフルリダイレクターを得るには、NET START FULL を使用してください。BREQNT.EXE はフルリダイレクションを必要とします。DOS プロンプトで net ver と入力して Enter キーを押します。DOS ワークステーションが Windows サーバーに接続するのに必要なコンポーネントのリストが表示されます。
LSL.COM LAN Card Driver
IPXODI.COM
IFSHLP.SYS

NET START FULL

これらは emm386 を使って loadhigh (UMB メモリーヘロード) することができます。NET START FULL は上位メモリに読み込まれます。

- NSS ボリュームで長いファイル名を使ってファイルを開こうとしました。MicroKernel は OS 呼び出しを使ってボリュームに問い合わせ、それからそのボリューム用に見つかった関連する名前空間の適切なドライバーを読み込みます。この場合、MicroKernel はボリュームがマウントされる前に読み込まれているので、NSS ボリュームによる長いファイル名のサポートを見つけられません。
 - ボリュームを読み込んだ後に MGRstart または Bstart コマンドを発行します。たとえば、次のようにします。
LOAD NSS
MOUNT ALL
SYS:ETC¥INITSYS.NCF
MGRSTART または BSTART
- [スペースを含むファイル/ディレクトリ名] 設定はオンになっています。PSQL v9 ではオンがデフォルトです。お使いのアプリケーションで、スペースを含んでいるファイル名を使用できない場合は、設定をオフに変更してください。
- Microsoft リモート デスクトップ サービス (旧ターミナル サービス) 環境で実行している場合：
 - プライマリ Windows サーバーに接続している 2 つの異なるターミナル サーバー上の Windows アプリケーションで、およそ 5 人のユーザーが作業できます。この上限を超えて実行しようとした場合、ステータス 11 および 35 が返されます。この場合の回復方法については、Microsoft 技術情報の文書番号 190162 「Terminal Server and the 2048 Open File Limitation」を参照してください。

12 : MicroKernel は指定されたファイルを見つけられません。

MicroKernel は、さまざまな理由からこのステータス コードを返す可能性があり、それらには異なる解決策があります。

- ファイルが存在することと、正しいファイルを指定したかどうかを確認します。
- キー バッファー パラメーターを調べて、パス名が空白またはバイナリの 0 で終わっていることを確認します。
- サーバー上のファイルにアクセスしている場合は、そのファイルが存在するディレクトリに対してファイル スキャン権を持っているかを確認してください。また、破損したキーが原因でこのステータス コードが返されることもあります。この場合、キーを削除してから追加し直してください。
- このエラー コードは、dbnames.cfg ファイルが削除されたのに、そのファイルを参照する古いデータ ソース名 (DSN) が ODBC 設定から削除されていない場合にも返されます。
- ローカル ファイルを、そのファイルの指定ゲートウェイ エンジンでない Workgroup エンジンを使って開こうとしました。開こうとしたファイルが格納されているディレクトリに移動します。このディレクトリ内の ~PVSW~.LOC にリード オンリー フラグが設定されているかどうかを確認します。リード オンリー フラグが設定されている場合は、読み取り / 書き込みに変更します。
- ステータス 12 が返されたら、X\$FILE.DDF という名前の DDF ファイルを調べます。
 - Btrieve ユーティリティで file.ddf を調べると、辞書ファイルのロケーション名は、標準の file.ddf、field.ddf、index.ddf ではなく、x\$file.ddf、x\$field.ddf、x\$index.ddf になっています。その DDF は、サポートされていない DDL Services (ddlsrvs.dll) と呼ばれる DDF 作成ユーティリティで作成されています。DDL Services には不具合があることがわかっており、システム テーブルに不正なデータを作成します。
- Windows 32 ビット プラットフォームでファイルまたはパスに空白の埋め込まれたファイルを開くと、ステータス 12 が返されることがあります。Btrieve データ ファイルのアクセスには長いファイル名を使用することができますが、その他のファイルには使用できません。

▶ スペースを含むファイル/ディレクトリ名を有効にするには

- 1 Zen Control Center を起動します。
- 2 Zen のノードを展開します。
- 3 [ローカル クライアント] ノードを展開します。
- 4 [MicroKernel ルーター] を右クリックして [プロパティ] を選択します。ログインを指示された場合は、ログインします。
- 5 [アプリケーションの特性] をクリックします。
- 6 [スペースを含むファイル/ディレクトリ名] を有効にします。

13 : MicroKernel は拡張ファイルのエクステンション ファイルを開けませんでした。

MicroKernel は、アプリケーションが開こうとしている拡張ファイルのエクステンション ファイルを開くことができませんでした。拡張ファイルは 1 つのベース ファイルと最大 31 個のエクステンション ファイルで構成されます。エクステンション ファイルは、ベース ファイルと同じボリュームおよびディレクトリ内に存在する必要があります。MicroKernel は、エクステンション ファイルの削除、移動、または名前変更を行った場合に、このステータス コードを返します。

14 : MicroKernel はプリイメージ ファイルを作成できないか、または開けません。

MicroKernel は、バージョン 6 より前のデータ ファイルにのみプリイメージ ファイルを使用します。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- ディスクのディレクトリがいっぱいであるため、MicroKernel は新しいプリイメージ ファイルを作成できません。MicroKernel がプリイメージ ファイルを作成できるようにする必要があります。
- MicroKernel がファイル整合性を復元するためのプリイメージ ファイルを開くことができません。プリイメージ ファイルが消去されていたり破損したりしている場合は、MicroKernel はファイルの整合性を復元できません。破損ファイルの回復については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。
- MicroKernel がプリイメージ ファイルへのアクセス権を持つユーザーによって起動されていないため、ワークグループの MicroKernel はプリイメージ ファイルにハンドルを割り当てることができません。
- この MicroKernel が作成したプリイメージ ファイルのファイル構造は、v5.x の MicroKernel が作成したプリイメージ ファイルのファイル構造とは異なります。v5.x 形式の .PRE ファイルが存在する環境では、その .PRE ファイルが属するデータ ファイルを開こうとしたときに、MicroKernel はこのステータス コードを返します。

15 : アプリケーションで、プリイメージ中に I/O エラーが発生しました。

MicroKernel は、v6.0 より前のデータ ファイルにのみプリイメージ ファイルを使用します。

- プリイメージ ファイルが破損しているため、データ ファイルの整合性は保証されません。破損ファイルの回復については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。
- ディスクがいっぱいです。不要なファイルを消去してください。

16 : アプリケーションで拡張エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

MicroKernel で、拡張ファイルのパーティションを作成する前にディレクトリ構造をディスクに書き込んでいる間にエラーが発生しました。MicroKernel がファイルを閉じることができないか、もしくは新しいページはファイルに追加されたが、MicroKernel がそのファイルを閉じて再び開き、ディレクトリ構造を更新することができません。ディスクにハードウェア障害がないか調べてください。

18 : ディスクがいっぱいです。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- ディスクがいっぱいのため、MicroKernel はファイルを拡張して追加のレコードを収容することができません。不要なファイルを消去してください。
- 新しいページをデータ ファイルに追加するのに必要な空き領域がありません。
- プリイメージ ファイルが使用可能なディスク領域を使い切ってしまいました。v6.0 より前の形式のファイルを使用してトランザクションを実行している場合、プリイメージ ファイルのサイズはトランザクションの実行中に増加し続けます。このステータス コードを受け取った場合は、トランザクション内のオペレーション数を減らすか、またはディスク領域を増やしてください。
- 環境によっては、各ユーザーが使用できるディスク領域の大きさを制限することができます。このステータス コードは、ファイルのオーナーに割り当てられたディスク領域の大きさを超えてアプリケーションがデータ ファイルを拡張しようとしたことを示しています。
- ディスク領域不足エラーが発生した後に、正常に閉じられなかったファイルの読み取りや変更を行おうとしました。ディスク領域不足エラーが発生した時点でファイルを使用していた各アプリケーションがファイルを正常に閉じたかどうかを確認してください。
- Zen のサーバーに接続しているクライアントがこのステータス コードを受け取った場合は、同じディスクからリードオンリー オペレーションを実行しているその他のクライアントも 0 以外のステータス コードを受け取ります。

19 : アプリケーションで修復不能なエラーが発生しました。

ファイルの整合性を確実にするには、『Zen User's Guide』の説明に従ってファイルを修復してください。

20 : MicroKernel または Btrieve リクエスターが非アクティブです。

- アプリケーションをクライアント / サーバー環境で実行している場合：
 - Btrieve リクエスターがロードされていることを確認してください。
 - TCP/IP プロトコルがクライアント マシンに正しくインストールされ、ネットワーク上に同じネットワーク アドレスを持つマシンが存在していないことを確認してください。
 - クライアント設定オプションの、[アクセス] > [ローカル MicroKernel エンジンの使用] と [アクセス] > [リモート MicroKernel エンジンの使用] のうち、少なくとも 1 つが有効になっていることを確認してください。お使いの環境にサーバー エンジンと Workgroup エンジンの両方が入っている場合は、どちらの設定も有効にする必要があります。
- アプリケーションをワークグループ環境で実行している場合は、MicroKernel がロードされていることを確認してください。
- アプリケーションをクライアント / サーバー環境で実行しており、ローカル ドライブに格納されたファイルにアクセスする必要がある場合：
 - Btrieve リクエスターがロードされていることを確認してください。
 - クライアント設定オプションの、[アクセス] > [ローカル MicroKernel エンジンの使用] と [アクセス] > [リモート MicroKernel エンジンの使用] の両方が有効になっていることを確認してください。
 - ローカルの MicroKernel が使用でき、ロードされていることを確認してください。
- DOS サーバー環境で実行している場合：

Zen は、デフォルトで BTRBOX95 をインストールします。BTRBOX95 がインストールされている限り、その他のリクエスターは使用できません。

- BTRBOX95 を使用したい場合は、Setup ユーティリティを実行します。これによって、Windows 32 ビット オペレーション システムが動作しているクライアント用の適切なファイルが読み込まれます。インストールが終了したら、クライアントを再起動します。

- Windows 32 ビット プラットフォーム ユーザーの場合：コマンド プロンプトを開き、DOS Btrieve アプリケーションを実行します。
- Windows サーバー環境で実行している場合：
 - MicroKernel を起動してからリクエストを生成します。
 - PATH 環境変数で指定されたパスに Windows DLL があることを確認します。
 - 適切な通信モジュールがサーバーに読み込まれていることを確認します。

21：キー バッファ パラメーターが短すぎます。

キー バッファ パラメーターは、リクエストされたインデックス パスのキー フィールドを収容するのに必要な長さがありません。キー バッファ 長が、キー番号パラメーターで定義されているキーの長さと等しいことを確認してください。

22：データ バッファ パラメーターが短すぎます。

- アプリケーションによって指定されたデータ バッファ パラメーターの長さが十分でないため、Insert オペレーションまたは Update オペレーションの対象となる可変長レコードの最も短いレコードの長さ、あるいは Get オペレーションまたは Step オペレーションの対象となるレコード全体の長さを格納できません。また、データ バッファ の長さが、Create、Create Index、Stat、Get By Percentage、Find Percentage、または Version などのオペレーションに必要なデータ長を格納するのに十分ではなかった可能性もあります。
 - Get オペレーションまたは Step オペレーションの場合、MicroKernel は可能な限り多くのデータを返し、レコード全体を返せないことを示すこのステータス コードを返します。
 - Insert オペレーションの場合、データ バッファ が固定長部分より短いと、レコードは挿入されません。
 - Update オペレーションの場合、データ バッファ が短すぎて固定長部分のレコードを格納できない場合、レコードは更新されません。
 - Create、Stat、Create Index オペレーションの場合、データ バッファ はすべてのファイル仕様、キー仕様、オルタネート コーレーティング シーケンス (ACS) 定義 (指定されている場合) を格納するだけの十分な長さがありません。
 - Get by Percentage オペレーションまたは Find Percentage オペレーションの場合、データ バッファ 長が 4 バイト未満になっています。
 - Version オペレーションの場合、データ バッファ 長が 5 バイト未満になっています。
 - ActiveX を使って 60 を超えるフィールドを持つテーブルにアクセスする場合に、データ バッファ パラメーターが短すぎます。弊社 Web サイトから最新の ActiveX コントロールをダウンロードしてください。
- 可変長レコードを使用できるファイルで Get オペレーションまたは Step オペレーションを実行したときに、このステータス コードを受け取った場合、ファイルが破損している可能性があります。ファイルが破損している場合、Get オペレーションまたは Step オペレーションを使用して他のレコードを読み取ると、ステータス コード 54 が返されます。『Zen User's Guide』に記載されている手順に従ってファイルを修復してください。

23：ポジション ブロック パラメーターの長さが 128 バイトではありません。

このステータス コードは、バージョン 6.0 の Btrieve 言語インターフェイスで使用されなくなりました。

ポジション ブロック パラメーターの長さは、正確に 128 バイトである必要があります。

24：ページ サイズまたはデータ バッファ サイズが不正です。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- ファイルの作成時に指定したページ サイズが無効です。ページ サイズは 512 バイトの倍数で、4096 バイト (8.x 以前のファイル形式)、8192 バイト (9.0 ファイル形式) あるいは 16384 バイト (9.5 および 13.0 ファイル形式) 以下でなければなりません。

- ページ サイズは、MicroKernel が Create オペレーション時に最初にチェックするファイル仕様です。この時点でステータス コードを受け取った場合、データ バッファー パラメーターが無効である可能性を示しています。

25 : アプリケーションが指定されたファイルを作成できません。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションがデータ ファイルを作成しようとした場合は、ディスク ディレクトリまたはディスク自体がいっぱいである可能性があります。
- アプリケーションが既存のファイルを上書きしてファイルを作成しようとしている場合、既存のファイルが開いているか、オペレーティング システムが何らかの理由でそのオペレーションを許可しません。
- 既存の Btrieve ファイルを上書きして Btrieve ファイルを作成しようとすると、このステータス コードが返されます。既存のファイルを上書きしてファイルを作成するには、Btrieve の Create オペレーション API (op code 14) のキー バッファーを適切に設定する必要があります。
 - この問題はウイルス対策ソフトウェアによって起きることがあります。



メモ この問題はオペレーティング システムが通常返さないステータス コードをエンジンに返したときに起こります。通常、エンジンはオペレーションが成功したか、ファイルが既に存在しているかのどちらかを予測しています。状況によって、エンジンが使用していたハンドルが機能しないためにこのエラー コードが返されます。しかし、エンジンが行った OS 呼び出しはファイルハンドルが返されたと見なされます。

1 つの解決策はウイルス対策ソフトウェアを無効にすることです。特定のデータ ファイルのスキャンを省くための、ウイルス対策ソフトウェアの設定の詳細については、サード パーティ ベンダーに問い合わせてください。

26 : 指定されたキーの数が不正です。

ページ サイズに対して指定されたキーの数が無効です。キーの数は、すべてのファイル バージョンにおいて最大 119 個までです。

キー セグメントの数は、ファイル バージョンによって異なりますが、次の表に示す制限値の範囲内でなければなりません。

ページ サイズ (バイト数)	キー セグメントの最大数 (ファイル バージョン別)			
	8.x 以前	9.0	9.5	13.0
512	8	8	切り上げ ²	切り上げ ²
1024	23	23	97	切り上げ ²
1536	24	24	切り上げ ²	切り上げ ²
2048	54	54	97	切り上げ ²
2560	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²
3072	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²
3584	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²
4096	119	119	204 ³	183 ³
8192	N/A ¹	119	420 ³	378 ³

ページ サイズ (バイト数)	キー セグメントの最大数 (ファイル バージョン別)			
	8.x 以前	9.0	9.5	13.0
16384	N/A ¹	N/A ¹	420 ³	378 ³
¹ N/A は「適用外」を意味します。 ² 「切り上げ」は、ページ サイズを、ファイル バージョンでサポートされる次のサイズへ切り上げることを意味します。たとえば、512 は 1024 に切り上げられ、2560 は 4096 に切り上げるということです。 ³ 9.5 以降の形式のファイルでは 119 以上のセグメントを指定できますが、インデックスの数は 119 に制限されます。				

ステータス コード 26 が返される条件

以下の条件は Btrieve Create オペレーションに対して適用されます。『*Btrieve API Guide*』の Create (14) を参照してください。

- キーまたはセグメントの数が、指定のファイル形式およびページ サイズに対して許容される制限数を超えている。キーの最大数は、すべてのファイル形式およびページ サイズにおいて 119 個です。セグメントの数については上の表に示しています。
- キーオンリー ファイルが作成され、1 個以上のキーがデータ バッファに提供された。
- キーオンリー ファイルが作成され、[予約重複ポインター] フラグがオン、[予約する重複ポインター数] フィールドの値が 1 以上である。
- データ バッファに指定されているセグメント数が最大セグメント数の制限を超えている。
- [予約する重複ポインター数] フィールドの値が、最大キー数の制限を超えている。

以下の条件は Btrieve Create Index API オペレーションに対して適用されます。『*Btrieve API Guide*』の Create Index (31) を参照してください。

- データ バッファに指定されているセグメント数が最大セグメント数の制限を超えている。

ヌル値を許可する列

ヌル値を許可する列には考慮も必要です。たとえば、ページ サイズが 4096 バイトのデータ ファイルでは、1 ファイル当たりのインデックス セグメント数は 119 に制限されます。真のヌルがサポートされるインデックス付きのヌル値を許可する列には 2 つのセグメントから成るインデックスが必要なため、1 つのテーブルではインデックス付きのヌル値を許可する列 (Btrieve ファイルでは、インデックス付きでヌル値を許可する真のヌル フィールド) は 59 個までしか持てません。ページ サイズが小さくなると、この制限も小さくなります。

ファイル バージョンを 7.x 以降に設定し、TRUENULLCREATE をデフォルト値のオンに設定して作成されたファイルはすべて、真のヌルをサポートします。以前のファイル形式で作成されたファイル、あるいは Pervasive.SQL 7 を使用するか TRUENULLCREATE をオフに設定して作成されたファイルは、真のヌルをサポートせず、この制限を受けません。

27 : キー ポジションが不正です。

指定されたキー フィールドの位置が 1 未満であるか、またはファイルに定義されたレコード長を超えています。キー ポジションがレコード長の値より大きい、キー ポジションとキー長の合計値がレコード長を超えているかのいずれかです。

28 : レコード長が不正です。

物理レコード長 (ファイルの作成時に指定された論理レコード長に、重複キー、予約済みの重複ポインター、可変長レコード ポインターおよびブランク トランケーション情報のオーバーヘッドを加算した長さ) は、ページ サイズから 10 バイト (バージョン 5 ファイル形式でファイルが作成された場合は 8 バイト) を引いた値以下で、かつ 4 バイト以上である必要があります。

キー オンリー ファイルの場合、最大レコード長は 253 バイト（v5.0 ファイルでファイルを作成した場合は 255 バイト）です。

物理レコード長の計算に関する詳細については、『*Zen Programmer's Guide*』を参照してください。

29 : キー長が不正です。

MicroKernel は、Btrieve の Create また Create Index API オペレーションに関して、以下の条件の場合にこのステータス コードを返します。『*Btrieve API Guide*』の Create (14) および Create Index (31) を参照してください。

- キー全体の長さ（全セグメント）が 255 を超えている。
- キー全体の長さ（全セグメント）が大き過ぎて、1 キー ページ当たりに入るキーが 4 個よりも少ない。たとえば、512 バイトのページに対して 200 バイトのキーなど。
- キー セグメントの長さが 0、または 255 バイトよりも長い。キー タイプが長さを表している場合、キー セグメント長はキー タイプに一致している必要があります（たとえば、整数値のキーの長さは偶数である必要があります）。ファイルのキー ページは少なくとも 4 つのキーを保持できる大きさでなければなりません。ページ サイズが小さいため指定したキー長（オーバーヘッドを含む）を 4 つ格納できない場合は、ファイルのページ サイズを大きくするか、キー長を短くします。

列のヌル インジケータ格納用に、1 バイトの追加スペースが必要です。インデックスまたはキーが、ヌル値を許可する 255 文字の CHAR 型列（または 254 文字の VARCHAR 型列）を参照する場合に、SQL の CREATE INDEX ステートメント実行時や、SQL の PRIMARY KEY または FOREIGN KEY の実行時に、このエラーが発生します。実際のインデックス長は、この追加バイトによって 1 バイト長くなり、計 256 バイトとなります。このエラーを解消するには、列のサイズを小さくするか、列を NOT NULL として作成し、再試行してください。外部キーの場合、列のサイズを小さくする場合は、参照する列と参照される列の両方を小さくする必要があります。

- キー セグメントの長さが 2、4 または 8 以外の値で、そのデータ型が AUTOINCREMENT である。
- キー セグメントのデータ型に、その型で許可される長さとは一致しない長さが指定されている。許可されるキー長については、『*SQL Engine Reference*』の「[Btrieve キーのデータ型](#)」を参照してください。
- キー セグメントのデータ型が NUMERICSTS で、その長さが 2 未満である。
- キー セグメントのデータ型が CURRENCY、AUTOTIMESTAMP、TIMESTAMP、または TIMESTAMP2 で、その長さが 8 以外である。
- キー セグメントのデータ型が NULL INDICATOR SEGMENT で、その長さが 1 以外である。
- キー セグメントのデータ型が GUID で、その長さが 16 以外である。
- キー セグメントのデータ型が BINARY（[旧形式の BINARY データ型を使用] フラグがオン）で、その長さが奇数である。

30 : 指定されたファイルは MicroKernel ファイルではありません。

このステータス コードは次のいずれかの状況で返されます。

- データベース エンジンが有効な Btrieve ファイルにアクセスしようとしたましたが、ファイルを認識できませんでした。そのようなシナリオの 1 つとして、新しいエンジンで作成されたファイルを古いエンジンが読み取ろうとしたということがあります。下位互換性により、新しいエンジンで古いファイルの使用が可能になるのに対し、通常、古いエンジンで新しいファイルを使用することはできません。これは、より最近の機能がファイル形式を互換性のないものにするからです。
- このファイルは MicroKernel が作成したものではありません。
- ファイルの先頭ページが破損しています。この場合は、データ ファイルのバックアップ コピーを使用してください。このステータス コードを受け取ったとき、ソース ファイルのヘッダ ページが破損している可能性がある場合は、『*Advanced Operations Guide*』の説明に従ってファイルを回復してください。



メモ 以前は、v6.0 より前の Btrieve エンジンで v6.x 以降の MicroKernel ファイルを開こうとした場合には、ステータス 2「アプリケーション I/O エラーが発生しました」が返されました。

31：ファイルは既に拡張されています。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

アプリケーションは既に拡張されているファイルを拡張しようとしてしました。ファイルの拡張を行えるのは 1 回だけです。

32：ファイルを拡張できません。

MicroKernel は、オペレーティング システムのファイル サイズ制限を超えようとしているファイルを収容するための、エクステンション ファイルを作成する必要があります。しかし、新しいエクステンション ファイルを作成して開こうとすると、オペレーティング システムからエラーが出されます。このステータス コードの原因として、ディレクトリがいっぱいである、ディスクがいっぱいである、または MicroKernel がオペレーティング システムから十分な権限を与えられていない、などが考えられます。

33：MicroKernel をアンロードできません。

DOS 環境の場合、MicroKernel は、以下の原因でこのステータス コードを返します。

- MicroKernel をロードした後で別の常駐終了型 (TSR) プログラムをロードしているときに、MicroKernel をアンロードしようとしてしました。MicroKernel をアンロードする前に、他の TSR プログラムをアンロードしてください。
- DOS/4G エクステンダーと BSTUB インターフェイスを使用する 32 ビット アプリケーションから MicroKernel をアンロードしようとしてしました。

34：指定された拡張名が不正です。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

アプリケーションが拡張パーティションに無効なファイル名を指定しました。ファイル名が有効かどうか確認してください。

35：アプリケーションでディレクトリ エラーが発生しました。

Get Directory オペレーションが存在しないドライブを指定したか、Set Directory オペレーションが無効なパス名を指定したかのいずれかです。ドライブとパス名が有効かどうか確認してください。

37：別のトランザクションが実行中です。

同じユーザーまたはタスクによって別のトランザクションが実行されているときに、アプリケーションが Begin Transaction (19 または 1019) オペレーションを発行しました。アクティブなトランザクションがネストされているかどうかは問題になりません。このステータス コードは、アプリケーション内でネストされたトランザクションに問題があることを示している場合もあります。

38：MicroKernel で、トランザクション制御ファイルの I/O エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

MicroKernel がトランザクション制御ファイルに書き込みを行おうとしてしました。このステータス コードを受け取った原因として、ディスクがいっぱいである、ディスクの書き込みが禁止されている、MicroKernel のロード時に作成されるトランザクション制御ファイル (BTREVEE.TRN) が削除されている、トランザクション制御ファイ

ルに読み取り専用フラグが設定されている、トランザクション制御ファイルが破損している、などが考えられます。

39 : End Transaction または Abort Transaction オペレーションを実行する前に、Begin Transaction オペレーションを実行する必要があります。

アプリケーションは End Transaction (20) または Abort Transaction (21) オペレーションを発行しましたが、対応する Begin Transaction (19 または 1019) オペレーションが実行されていません。プログラム内の End Transaction オペレーションまたは Abort Transaction オペレーションは、Begin Transaction オペレーションの完了後に実行するようにしてください。

40 : ファイル アクセス要求が許容されるファイルの最大数を超過しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

アプリケーションは、トランザクション内で許可される最大数を超過するファイルにアクセスしようとした。MicroKernel の構成時に、論理トランザクション中にアクセスできるファイルの最大数を設定します。

41 : 実行しようとした操作は MicroKernel では許可されていません。

アプリケーションが、特定の状況では許可されていないオペレーションを実行しようとした。たとえば、次のような例です。

- アプリケーションが、キー オンリー ファイルで Step オペレーションを実行しようとした。
- サーバー エンジンを使用している場合、MicroKernel が呼び出した Continuous オペレーションのキー番号パラメーターが無効です。
- MicroKernel は、ファイルやパフォーマンスに多大な影響を与えるという理由で、いくつかのオペレーションについてトランザクション中の実行を禁止しています。この特定のオペレーションとは、Set Owner、Clear Owner、Create Index、Drop Index です。
- 9.x 以降のエンジンで実行されているアプリケーションが、6.x (0600) より前の形式のファイルを作成しようとした。
- アプリケーションが、Audit for Zen 15 または DataExchange 15 が実行されている環境で Extended Delete オペレーション (オペレーション コード 85-88) を発行しました。

42 : 以前にアクセラレイティド モードで開いたファイルが閉じられていませんでした。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- v5.x MicroKernel がアクセラレイティド モードでアクセスし、正常に閉じられていない v5.x データ ファイルをアプリケーションが開こうとしたか、v6.0 以降の MicroKernel が Set/Clear Owner オペレーション中に修復不能なエラーを検出したファイルを開こうとした。ファイルの整合性は保証されません。破損ファイルの回復については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。
- アプリケーションは、MicroKernel v5.x 形式のファイルを、v5.x MicroKernel を使用して開こうとしたが、そのファイルは以前に v6.0 以降の MicroKernel がアクセスし、その後正常に閉じられなかったため、ディスク上にブリーメージ ファイルが残っています。バージョン 5.x の MicroKernel は、v6.0 以降の形式で作成されたブリーメージ ファイルを読み取ることはできません。

43 : 指定されたレコード アドレスが不正です。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- **Get Direct** オペレーションに指定されたレコード アドレスが不正です。アドレスがファイル境界の外にあるか、アドレスがデータ ページ内またはデータ ページ上のレコード境界上にありません。あるいは、指定されたアドレスのレコードが削除されています。**Get Direct** オペレーションの場合、**Get Position** オペレーションが取得した 4 バイトのアドレスを使用してください。
- このステータス コードは、レコードのファイルが **v5.x** 形式である場合、ファイル アクセスに矛盾が発生していることを示す場合があります。たとえば、タスク 1 がファイルを排他トランザクション内でロックしているとします。タスク 2 は同じファイルからレコードを読み取って、トランザクションが挿入したレコードを更新するものとします。タスク 2 がレコードを読み取った後にタスク 1 がトランザクションを中止した場合、タスク 2 は **Update** オペレーションの発行時にこのステータス コードを受け取ります。
- レコードの物理ロケーションに基づいてパーセンテージをシークする **Find Percentage** オペレーションの場合、指定されたレコード アドレスが不正です。
- ファイルが破損している可能性があるため、ファイルを回復する必要があります。破損ファイルの回復については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

44：指定されたキー パスが不正です。

アプリケーションは、**Get Direct/Record** オペレーションを使用して、対応するレコード内で値がヌルになっているキーのインデックス パスに位置を設定しようとした。MicroKernel は、ヌル キー値に基づいて位置を設定することはできません。

45：指定されたキー フラグが不正です。

Create オペレーションでのキー フラグの指定に矛盾があります。キーに複数のセグメントがある場合、キー内の各セグメントの重複属性、変更可能属性、ヌル属性は同じである必要があります。また、キー オンリー ファイルでヌル キー属性またはマニュアル キー属性を使用することはできません。アプリケーションが、セグメント キーの 2 つ以上のセグメントに対して異なるオルタネート コーレーティング シーケンス (ACS) を指定しようとした場合も、MicroKernel はこのステータス コードを返します。

46：要求したファイルへのアクセスは拒否されました。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションがリードオンリー モードでファイルを開き、そのファイルに対して書き込み操作を実行しようとした。
- アプリケーションが、オペレーティング システムによってリードオンリーのフラグが設定されたファイルに対して書き込み操作を実行しようとした。
- アプリケーションがファイルを開くときに、更新に必要な正しいオーナー ネームを提供しませんでした。詳細については、ステータス コード「**51：オーナー ネームが不正です。**」を参照してください。
- (Workgroup エンジンのみ) あるクライアント マシンが既にサーバー MicroKernel を使って開いているファイルを、Workgroup エンジン ユーザーまたはタスクが開いた場合、Workgroup エンジン ユーザーがファイルへの書き込みを行おうとすると、このステータス コードが返されます。
- (9.x 以降のエンジンのみ) アプリケーションが 5.x 形式のファイルに対して書き込み操作を実行しようとした。9.x 以降のエンジンを使用しているとき、5.x 形式のファイルに対して **Insert** や **Delete** などの書き込み操作は実行できません。

47：開いているファイルの数が許可される最大数を超えています。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

48：オルタネート コーレーティング シーケンスの定義が不正です。

MicroKernel は、次の理由によりこのステータス コードを返します。

- オルタネート コーレーティング シーケンス (ACS) 定義の先頭バイト (識別バイト) に、16 進の AC (ユーザー定義の ACS)、AD (ロケール固有 ACS)、または AE (インターナショナル ソート規則のサポート) が含まれていません。最初のバイトには適切な値を入れてください。

49 : 拡張キー タイプが不正です。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- 不正な拡張キー タイプを持つファイルまたはインデックスを作成しようとしてしました。
- BINARY キーまたはキー セグメントにオルタネート コーレーティング シーケンス (ACS) を割り当てようとしてしました。ACS を割り当てることができるのは、STRING、LSTRING、WSTRING、WZSTRING、ZSTRING キー タイプのみです。
- ACS が必要なインデックスを定義しましたが、ファイルおよびデータ バッファ内に渡されたキー定義のいずれにも ACS 定義が存在しません。
- MicroKernel が 5.x 形式でファイルを作成するよう設定されている場合に、大小文字区別フラグと ACS フラグの両方が設定されたキー セグメントを作成しようとしてしました。この組み合わせは、5.x ファイルでは無効です。
- [作成ファイルのバージョン] を 6.x に設定して、7.x のデータ型である CURRENCY、TIMESTAMP などのいずれかを使用しようとしてしました。v7.x より前のファイルは、これらのキー タイプをサポートしていません。
- [作成ファイルのバージョン] を 9.0 以前のバージョンに設定し、新しいデータ型である AUTOTIMESTAMP、GUID、TIMESTAMP2 などを使用しようとしてしました。古いファイル バージョンはこれらのデータ型をサポートしていません。

▶▶ [作成ファイルのバージョン] の設定を変更するには

- 1 Zen Control Center を起動します。
- 2 [エンジン] ノードを展開し、目的のエンジン名を探します。
- 3 エンジン名を右クリックして [プロパティ] を選択します。
- 4 [ファイル互換性] をクリックします。
- 5 右側のフレーム内で、[作成ファイルのバージョン] を変更します。

50 : ファイルのオーナーは既に設定されています。

アプリケーションは、既にオーナーを持つファイルに Set Owner オペレーションを実行しようとしてしました。Clear Owner オペレーションを使用して、前のオーナーを削除してから新しいオーナーを指定してください。

51 : オーナー ネームが不正です。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションが Set Owner オペレーションからこのステータス コードを受け取った場合、キー バッファに指定されているオーナー ネームとデータ バッファに指定されているオーナー ネームが矛盾しています。
- Open オペレーションまたは DROP TABLE ステートメントの実行中にこのステータス コードが発生した場合、アプリケーションはオーナー ネームが割り当てられているファイルを開こうとしてしました。アプリケーションはデータ バッファにそのオーナー ネームを指定する必要があります。オーナー ネームがヌルで終了していること、およびデータ バッファ長がオーナー ネームと最後のヌルを収容するのに十分な長さに設定されていることを確認してください。
- オーナー ネーム文字列が以下の要件を満たしていません。
 - 短いオーナー ネームは半角 8 文字以下であること。
 - 長いオーナー ネームの長さ制限は、ファイル形式によって異なります。

詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[オーナー ネーム](#)」を参照してください。

52：キャッシュへの書き込み中にエラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 以降で使用されなくなりました。

キャッシュ バッファを使用可能にしようとしたときに、MicroKernel は以前にアクセラレイティド モードで開かれたファイルのデータをディスクに書き込もうとしました。書き込み中にオペレーティング システムが I/O エラーを返しました。通常、このステータス コードはハードウェア メモリの障害を示しています。Btrieve をいったんアンロードし、再ロードしてから操作を継続してください。

53：言語インターフェイスのバージョンが不正です。

アプリケーションは、Btrieve v3.15 以前の言語インターフェイスで可変長レコードを含むファイルにアクセスしようとした。

54：レコードの可変長部分が破損しています。

Get オペレーションまたは Step オペレーション中に、MicroKernel がレコードの可変長部分の全体または一部を読み取ることができませんでした。MicroKernel は可能な限り多くのデータをアプリケーションに返します。通常、このステータス コードは、可変長レコードを格納するのに使用される 1 つまたは複数のページが破損していることを示します。MicroKernel が返すデータ バッファ長を調べ、返されたレコードの量を確認してください。破損ファイルの回復については、『*Zen User's Guide*』を参照してください。

55：アプリケーションが AUTOINCREMENT キーに不正な属性を設定しました。

autoincrement キーによってインデックス設定されたデータ フィールドは、autoincrement キーのキー番号が新しいセグメント キーのキー番号より小さく、フィールドを参照している新しいデータ型フラグが AUTOINCREMENT でない場合に限り、異なるセグメントキーに属することができます。

56：インデックスが不完全です。

Create Index オペレーション (31) または Drop Index オペレーション (32) の実行が完了する前に中断された場合は、インデックスが破損している可能性があります。Drop Index オペレーションを実行して、破損したインデックスをファイルから完全に削除し、必要な場合は Create Index オペレーションでインデックスを作成し直します。

57：拡張メモリ エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

Btrieve for DOS は、拡張メモリ マネージャーからエラーを受け取った場合に、このステータス コードを返します。通常、このステータス コードは、MicroKernel がメモリ マッピング レジスタ コンテキストを保存または回復することができなかったことを示しています。これは、拡張メモリを使用する他のアプリケーションと互換性がないことを意味します。

58：圧縮バッファ長が短すぎます。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。

59：指定されたファイルは既に存在します。

Create オペレーション実行時に、アプリケーションがキー番号パラメーターに -1 を指定し、キー バッファ パラメーターに既存のファイル名を指定しました。既存のファイルを上書きする場合は、キー番号パラメーターから -1 は取り除いてください。既存のファイルをそのまま残す場合は、キー バッファ パラメーターに指定されているファイル名を変更します。

60：指定されたりジェクト カウントに達しました。

Get Next Extended、Get Previous Extended、Step Next Extended、Step Previous Extended のいずれかのオペレーションが、フィルター条件を満たすレコードを要求された数だけ検出する前に、MicroKernel がリジェクト カウントとして指定されたレコード数を拒否しました。データ バッファに返された最初の 2 バイトを調べて、取得されたレコード数を確認してください。

61：作業領域が小さすぎます。

Get Next Extended、Get Previous Extended、Step Next Extended、Step Previous Extended オペレーションは、バッファを作業領域として使用します。このステータス コードは、作業領域（デフォルト設定は 16 KB）のサイズが十分でないため、フィルターされるデータ バッファ構造と取得された最長のレコードを格納できないことを示しています。作業領域がフィルター条件または抽出指定を格納するのに十分なサイズで、選択または抽出されるすべてのフィールドを格納するのに十分なサイズであれば、ステータス コード 0 が返されます。

62：ディスクリプターが不正です。

このステータス コードは以下の状況で返されます。

- Get Next Extended、Get Previous Extended、Step Next Extended、Step Previous Extended、Delete Extended のいずれかのオペレーションで渡されるディスクリプター（データ バッファ構造）が不正です。Extended オペレーション呼び出しに使用するディスクリプターの長さ（データ バッファの最初の 2 バイト）は、ディスクリプターの長さと正確に一致していなければなりません。この条件は、必要以上の長さを宣言できるデータ バッファ長のオプションには適用されません。
- Stat Extended オペレーションで、データ バッファ内の識別バイト フィールドが 0x74537845 に設定されていないか、サブファンクション フィールドが 0x00000001 に設定されていません。または、Zen エクスプローラー フィールドが 0x00000000 に設定されていません。
- Get Direct/Chunk オペレーションまたは Update Chunk オペレーションで、データ バッファ内のディスクリプター構造が正しくないか、内部的な矛盾またはデータ バッファ長の矛盾により、ディスクリプター構造が矛盾しています。
- ActiveX コントロールのバッファが、クリアも再割り当てもされていません。コードで Extended オペレーションを使用する前に、Init メソッドを使ってコントロールのバッファをクリアおよび再割り当てしてください。さらに、AutoMode を使用している場合は、Init を呼び出す前に論理位置を確立しておく（GetLast、GetFirst、GetEqual など）必要があります。

63：Insert Extended オペレーションで指定されたデータ バッファ パラメーターが不正です。

Insert Extended オペレーションで不正なバッファが指定されました。バッファ長が 5 バイト未満であるか、指定されたレコード数が 0 であるかのいずれかです。バッファ長またはレコード数を修正してください。

64：フィルター制限に達しました。

MicroKernel エンジンでは、Extended Get または Step オペレーション中、拒否レコードに到達し、オペレーションで指定された方向にはこれ以上フィルター移動を満たすレコードがない場合に、このステータス コードを返します。このステータス コードは、キー番号によって指定されるキーの最初のセグメントが、フィルター フィールドの最初の条件としても使用されている場合にのみ適用されます。

65：フィールド オフセットが不正です。

Extended Get または Step オペレーションのエクストラクタのフィールド オフセットが、取得されたレコード長に対して無効です。フィールド オフセットが 0 から「レコード長 - 1」までの有効な値であることを確認してください。

66 : オープンできるデータベースの最大数を超過しました。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。

MicroKernel が開こうとしたファイルにバインドされている MicroKernel データベースが多すぎます。このステータス コードを受け取らないようにするには、MicroKernel がオープンできるデータベース数により大きな値を設定する必要があります。

バウンド ファイルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

67 : MicroKernel が、SQL データ辞書ファイルを開けません。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションが MicroKernel データベースにバインドされているデータ ファイルを使用しようとしたが、MicroKernel はいずれかの MicroKernel データ辞書ファイル (FILE.DDF、あるいはファイルに RI 定義がある場合は RELATE.DDF)、または設定ファイル (DBNAMES.CFG) を開けませんでした。
- [置換] オプションを使用してファイルを作成しようとしたが、ファイル名とロケーションが同じバウンド MicroKernel データ ファイルが既に存在します。ただし、MicroKernel は MicroKernel データ辞書ファイル (FILE.DDF) または設定ファイル (DBNAMES.CFG) を開けませんでした。

データ ファイルに RI 定義がある場合は、FILE.DDF および RELATE.DDF が、データベースに対して設定されたロケーション (サーバー設定の [ディレクトリ] にある [辞書のロケーション] プロパティで指定) にあることを確認してください。

68 : MicroKernel は、RI のカスケード削除オペレーションを実行できません。

アプリケーションが削除しようとしたレコードは 16 を超える階層レベルを持つため、MicroKernel は参照整合性 (RI) 制御が実行されているファイルに対してカスケードの削除規則を実施することができません。下位レベルからレコードを削除し、それからアプリケーションが最初に削除しようとしたレコードをもう一度削除してください。RI の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

69 : Delete オペレーションが、破損したファイルに対して指定されました。

MicroKernel が Delete オペレーションに応答してカスケードの削除規則を実施しようとしたときに、アプリケーションでエラーが発生しました。このステータス コードは、関連ファイルが破損しており、そのファイルを再作成する必要があることを示しています。RI およびカスケードの削除規則については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

71 : RI 定義に違反があります。

- 参照整合性 (RI) 制御下のファイルに Insert オペレーションを実行しようとした場合は、挿入するレコード内の外部キー値に対応する主キーが参照ファイル内にありません。
- Update オペレーションを実行している場合、このステータス コードの原因として次の 2 つが考えられます。
 - 主キーの値を変更しようとした。
 - 外部キーの値を、定義されている主キーには存在しない値に変更しようとした。
- Delete オペレーションを実行しようとした場合は、制限規則が実施されていて、削除しようとしているレコードに含まれる主キー値が参照ファイルの外部キーを参照しています。RI の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

72 : MicroKernel は、RI 参照ファイルを開けません。

FILE.DDF および DBNAMES.CFG が指定するロケーションに参照ファイルがありません。DBNAMES.CFG ファイルが名前付きデータベースに対して指定しているデータ ファイルのロケーションのうちのいずれかに参照ファイルがあることを確認してください。

- DBNAMES.CFG ファイルがサーバー上に定義されている場合は、ファイルのロケーションがドライブ名を含んでいないことを確認してください。
- DBNAMES.CFG ファイルが Workgroup エンジン用に定義されている場合は、ドライブ名が DBNAMES.CFG で指定されているものと同じである（そして同じロケーションにマップされている）ことを確認してください。

RI の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

73 : RI 定義は同期が取れていません。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- MicroKernel データベースにバインドされているデータ ファイルを開こうとしましたが、そのファイルがバインドされているデータベースが DBNAMES.CFG ファイル内にありません。
- MicroKernel データベースにバインドされている RI 定義を持つデータ ファイルを開こうとしましたが、そのファイルのバインド先のテーブルがデータベースの FILE.DDF ファイルに見つかりません。あるいは、テーブルのロケーションおよびファイル名が、DBNAMES.CFG ファイルまたは FILE.DDF ファイルに設定されているファイルのロケーションおよびファイル名と矛盾しています。
- バウンド ファイルを変更しようとしたのですが、そのファイルの RI 定義が RELATE.DDF ファイルの定義と矛盾しています。
- このファイルに関連付けられたファイルが同期していない場合に、Insert オペレーション、Delete オペレーション、または外部キーを変更する Update オペレーションを実行しようとした（関連ファイルを開こうとした場合や変更しようとした場合も、このステータス コードが返されます）。
- [置換] オプションを使用してファイルを作成しようとしたのですが、ファイル名とロケーションが同じバウンド MicroKernel データ ファイルが既に存在します。ただし、MicroKernel はその既存バウンド ファイルが同期していないことを検出しました（つまり、既存のファイルを開こうとしたときにも、このステータス コードが返されます）。



メモ 同一ネットワーク上の 2 つのサーバーに同一の名前付きデータベースは存在できません。したがって、同一ネットワークの別のサーバーへ辞書を移動することが目的の場合、1 つの方法は、新しいサーバーで名前付きデータベースを作成する前に、元のサーバーの名前付きデータベースを削除することです。

データベースの RI 制約を調べてください。この方法についての情報は、『*Zen User's Guide*』を参照してください。

75 : Betrieve オペレーションはキャンセルされました。

Btrieve オペレーションは、さまざまな理由からキャンセルされることがあります。たとえば、ユーザーが意図的にキャンセルすることを選択した、システム リソースが不足している、より優先度の高い別のオペレーションが実行された、エンジンまたはオペレーティング システムがシャットダウンされたなどが考えられます。

76 : 参照ファイルに矛盾があります。

アプリケーションは、他のファイルを参照する参照整合性 (RI) 制御のファイルに対して Update、Insert、Delete のいずれかのオペレーションを実行しようとした。この参照ファイルは既にエクスクルーシブ モードでオープンされているため、アプリケーションでは RI チェックのためにこのファイルを開くことができません。参照ファイルが閉じられるか、エクスクルーシブ以外のモードで開かれてから、もう一度オペレーションを実行してください。RI の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

77 : アプリケーションでウェイト エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

これは、情報を提供するステータス コードです。オペレーションをもう一度実行してください。MicroKernel はオペレーションを自動的に再試行しません。クライアント - サーバー MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションがオペレーションにウェイト ロック バイアスを指定しましたが、要求されたリソースは他のユーザーによってロックされています。
- アプリケーションは現在ウェイト トランザクションを処理中で、他のユーザーによってロックされているファイルにアクセスしようとしてしました。

Btrieve リクエスターを使用して MicroKernel にアクセスしている場合は、リクエストしたリソースがロックされていると、Btrieve リクエスターはしばらく待機した後、オペレーションを再試行します。サーバー ベースのアプリケーションが MicroKernel にアクセスして、リクエストしたリソースがロックされている場合は、ウェイトが必要です。この場合、MicroKernel がウェイトを実行することになります。しかし、このウェイトは MicroKernel を占有し、要求したリソースを解放しようとする他のユーザーを排除するため、MicroKernel はウェイトを実行しません。代わりに、MicroKernel はこのステータス コードを返します。サーバーベース アプリケーションは後で再試行する必要があります。

78 : MicroKernel がデッドロック状態を検出しました。

アプリケーションは処理を継続する前に、トランザクションを中止または終了したり、すべてのレコード ロックを解除したりすることによって、すべてのリソースをクリアする必要があります。これによりデッドロックが解消され、他のアプリケーションでは待機しているリソースへのアクセスが可能になります。

79 : プログラミング エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

MicroKernel が明確に特定できない誤動作または MicroKernel が回復できない誤動作が発生しました。操作を再試行してもエラーが再現する場合は、システムの破損が考えられます。再起動してシステムをクリアしてから、もう一度オペレーションを実行してください。

80 : MicroKernel でレコード レベルの矛盾が発生しました。

レコード レベルの矛盾があるため、MicroKernel は Update オペレーションまたは Delete オペレーションを実行しませんでした。たとえば、ステーション A がレコードを読み取っているときに、ステーション B が同じレコードを読み取ってそれを更新し、その後にステーション A がそのレコードを更新しようとしています。アプリケーションは、Update オペレーションまたは Delete オペレーションを再実行する前に、レコードを再度読み取る必要があります。また、矛盾を防止するため、アプリケーションはレコード ロックを使用することができます。

キー オンリー ファイルでは、レコードの読み取りの後、あるいは更新または削除を行う前に、レコードがファイルの B ツリー内で移動されると、このステータス コードが返されます。他のレコードを挿入、更新、または削除した結果、レコードが移動することもあります。

81 : MicroKernel でロック エラーが発生しました。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションが複数のレコード ロック状態にあるレコードをアンロックしようとしてしましたが、データバッファに格納されているレコードの位置が、関連するファイル内でロックされているレコードと対応しなくなりました。
- アプリケーションが複数レコード ロック (単一レコード ロック) を使って単一レコード ロック (複数レコード ロック) を解除しようとしてしました。

82 : MicroKernel がポジショニングを失いました。

重複属性のキーで Get Next オペレーションまたは Get Previous オペレーションを実行しているときに、アプリケーションが、削除されたレコードまたは他のアプリケーションによってキー値が変更されたレコードを取得しよう

としました。Get Equal オペレーション、または Get Direct/Record オペレーションを使用して位置を再確立してください。関連するポジション エラーについては、ステータス コード「44: 指定されたキー パスが不正です。」を参照してください。

83 : MicroKernel は、トランザクション外で読み込まれたレコードを更新または削除しようとしてしました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

アプリケーションが、トランザクション内で読み込んでいないレコードを更新または削除しようとしてしました。アプリケーションは、データを変更する前にトランザクション内でそのレコードを読み込んでおく必要があります。

84 : レコードまたはページはロックされています。

- Insert、Update、または Delete のいずれかのオペレーションで、インデックス ページをロックして、キー値を挿入または削除しようとしてしました。アプリケーションを使って確認を行い、このステータス コードが返されていたらオペレーションをもう一度実行してください。
- アプリケーションは次のいずれかの操作を行おうとしてしました。
 - ・ 現在他のアプリケーションがロックしているレコードにノーウェイト ロックを適用しようとした。
 - ・ 他のアプリケーションが 1 つ以上のアクティブなレコード ロックをファイル内に保持している場合に、ノーウェイト トランザクションでそのファイルにアクセスしようとした。
 - ・ 他のアプリケーションによってロックされているレコードを更新または削除しようとした。

アプリケーションでは、次のいずれかの対策をとることができます。

- ・ 正常に終了するまでオペレーションを再試行します。これは、ネットワークのトラフィックが比較的低い場合には最も単純かつ迅速な解決方法といえます。



メモ 並行トランザクション内でステータス 84 を受け取った場合、アプリケーションで再試行する回数を制限するようにしてください。再試行の回数を制限しないと、アプリケーションが別のトランザクションでデッドロック状態に陥ります。再試行を何回か行った後にまだステータス 84 が返される場合は、トランザクションを一旦中止し、再度そのトランザクションを試行してください。

- ・ ウェイト オプションをサポートしているバージョンの場合、ノーウェイト オプションの代わりにウェイト オプション (+100/+300) を使用します。

85 : ファイルはロックされています。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- あるユーザーが排他トランザクションでファイルをロックしている場合に、他のユーザーがそのファイルの全体または一部をロックしようとしています。
- ワークグループ MicroKernel が既にファイルを開いているときに、リクエスターがロードされているクライアント マシンがサーバー MicroKernel を介して同じファイルを開こうとしてしました。サーバー MicroKernel は、排他アクセスが実行できないため、そのファイルを開くことができません。リクエスターがロードされているクライアント マシンはこのステータス コードを受け取ります。
- MicroKernel でファイルを開いている場合に、ファイル名が同じで拡張子が異なる 2 つのファイルが存在します (たとえば、INVOICE.HDR と INVOICE.DET)。一方のファイルが Continuous オペレーション モードで開かれると、その結果、MicroKernel がデルタ ファイル (INVOICE.^^^ など) を生成します。そして、もう一方のファイルを開こうとしたときに、MicroKernel はこのステータス コードを返します。この理由により、ファイルに名前を付けるときは、拡張子を変えるだけでなく、まったく異なる名前を付けることをお勧めします。

- 出現のパターンはありませんが、ウイルス対策ソフトウェアがファイルをスキャンするためにファイルを開いてロックすることが原因で、ファイルを閉じるときにステータス 85 を受け取り、次のデータベース オペレーションが失敗することがあります。これを解決するには、ウイルス対策ソフトウェアがデータ ファイルをスキャンしないように設定します。ファイルを除外する方法については、ウイルス対策ソフトウェアのドキュメントを参照してください。
- Continuous オペレーションが設定されているデータ ファイルに対して削除操作を試行しました。Continuous オペレーションが設定されているデータ ファイルは、リレーショナルエンジンおよび MicroKernel エンジンから削除が行えません。さらに、このファイルはキーの変更などファイル構造の変更も受け付けません。

86 : ファイル テーブルがいっぱいです。

データベース エンジンが Btrieve データ ファイルを示すメモリを割り当てられなかった場合、アプリケーションでこのステータス コードを受け取る可能性があります。また、このデータベース エンジンは、同時に処理できるファイル数が 65,535 個までという制限もあります。その制限に達した場合にもこのステータス コードが返ります。

このステータス コードが返る 1 つの要因として考えられるのは、既に関いたデータ ファイルを閉じないまま、ファイルをさらに開き続けるアプリケーションです。Monitor ユーティリティでアクティブなファイルを見て、この現象が発生していないかどうかを調べてください。『*Advanced Operations Guide*』の「[アクティブ ファイルの監視](#)」を参照してください。

また、ステータス コード「[87 : ハンドル テーブルがいっぱいです。](#)」についても考慮してください。ステータス コード 86 はファイル用で、ステータス コード 87 はハンドル用です。1 個の指定ファイルに対して複数のハンドルを開くことができます。データベース エンジンが Btrieve ハンドル用のメモリを割り当てることができない場合、アプリケーションはステータス 87 を受け取ります。クライアント アプリケーションに割り当てられるハンドル数はメモリによって制限されます。DOS リクエスターを使用して DOS アプリケーションへ割り当てられるような古いタイプのハンドルは、65,535 個の制限があります。

87 : ハンドル テーブルがいっぱいです。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。ハンドル テーブルはエンジンが動的に管理します。

MicroKernel に設定されている数を超えるハンドルを開こうとしたか、オペレーティング システムが許可する数を超えるファイルを MicroKernel が開こうとしたかのいずれかです。

- オペレーティング システムでハンドル数を増やす構成については、オペレーティング システムのマニュアルを参照してください。

なお、次に説明する、MicroKernel がオペレーティング システムからハンドルを取得するときのプロセスを理解しておくに役立ちます。同じファイルを何度も開いても、MicroKernel はオペレーティング システム のハンドルを 1 つしか使用しません。ただし、そのファイルが v6.x 以降の形式で、MEFS モードで共有されている場合、MicroKernel は関連する .lck ファイルのためにもう 1 つのハンドルを開きます。

ファイルが v5.x 形式の場合、MicroKernel は .PRE ファイルのためにもう 1 つハンドルを要求します。また、形式に関わらずファイルが Continuous オペレーション モードにある場合も、MicroKernel はデルタ ファイル用にもう 1 つのハンドルを要求します。ファイルが拡張されている場合、MicroKernel は各エクステンション ファイルのためにオペレーティング システム ハンドルを要求します。

88 : アプリケーションでモードの不一致エラーが発生しました。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションがエクスクルーシブ モードでファイルを開いている場合、その他のすべてのアプリケーションが同じファイルを任意のモードで開こうとしたときに、このステータス コードが返されます。
- アプリケーションがエクスクルーシブ以外のモードでファイルを開いている場合、その他のすべてのアプリケーションが同じファイルをエクスクルーシブ モードで開こうとしたときに、このステータス コードが返されます。

- アプリケーションが読み取り専用ファイルを書き込み可能モードで開こうとした場合。
- MicroKernel Continuous オペレーション モードを使用している場合：
 - Continuous オペレーションからファイルを削除しようとしたますが、そのファイルは Continuous オペレーション モードに置かれていません。
 - Continuous オペレーションからファイルを削除しようとしたますが、他のクライアントがそのファイルを Continuous オペレーションに置いていました。
 - ファイル名が同じで拡張子が異なる 2 つのファイルを Continuous オペレーションに含めようとした。
 - ファイルを Continuous オペレーションに含めようとしたますが、そのファイルは既に Continuous オペレーションに置かれています。
 - ファイルは以前 Continuous オペレーションに置かれていましたが、サーバーが応答しなくなりました。これらのファイルを Continuous オペレーションから削除しようとすると、ステータス コード 88 が返されます。

上記の最後のケースでは、サーバーが応答なくなると、データベース エンジンほどのファイルが Continuous オペレーションに置かれていたかを判断できなくなります。

ファイルを Continuous オペレーションから削除するには、Continuous オペレーション モードを終了する前にファイルを開く必要があります。ファイルが再度開かれると、Btrieve エンジンは Continuous オペレーション フラグが設定されていることを検出し、デルタ ファイルを探します。その時点で、デルタ ファイルのロール インが発生します。

既存のデルタ ファイルのロール インを開始するには、関連するデータ ファイルを開いておく必要があります。ファイルは、Function Executor などのユーティリティや、そのファイルを使用するアプリケーションによって開くことができます。ファイルを繰り返し開いたり閉じたりして使用するようなアプリケーションの場合は、Function Executor を使ってファイルを開くことをお勧めします。これをお勧めするのは、デルタのロール インは優先順位の低いタスクだからです。ロール インがこのように設計されたのは、ロール インが発生している間でもファイルを使用できるようにするためです。ロール インが完了していないのにアプリケーションがファイルを閉じた場合は、そのファイルが再オープンされたときに再度ロール インが開始されます。優先順位の低いタスクなので、ロール イン処理にはかなり時間がかかることがあります。エンジンはロール インを完了すると、デルタ ファイルを削除します。

89：名前エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 5.0 で使用されなくなりました。

デバイスのリダイレクト先のショート ネームを指定する前に BSERVER がロードされました。BSERVER を起動する前に、共有するすべてのショート ネームを NET SHARE コマンドを使って指定する必要があります。

90：リダイレクト デバイス テーブルがいっぱいです。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

91：アプリケーションでサーバー エラーが発生しました。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- リクエスターがサーバーとのセッションを確立できません。クライアントまたはサーバー MicroKernel がロードされていないか、サーバーがアクティブになっていないかのいずれかです。
- MicroKernel が同時に開くことのできるセッションの最大数に達しました。このステータス コードを受け取らないようにするには、[セッション数] 設定オプションの値を大きくします。Pervasive.SQL V8 を開始している場合は、MicroKernel がセッション数を動的に管理するため、セッション数を手動で増減させることはできません。
- アプリケーションがファイルにパスを指定しましたが、そのパスにボリューム名が含まれていません。

- MicroKernel ルーターがロードされていません。また、次の状況が発生しています。リモート呼び出しを行うために MicroKernel ルーターと MicroKernel の両方を使っているアプリケーション（したがって、Open オペレーションを実行するときにサーバー名とボリューム名を指定します）がリモート ファイルを開こうとしました。MicroKernel ルーターはサーバー名を解釈しないため、MicroKernel がサーバー名を解釈しようとしたができませんでした。
- ネットワーク環境に通信またはネットワーク アドレスの問題があるため、MicroKernel のリクエストは送信先のサーバー アドレスに到達しませんでした。クライアントとサーバーのネットワーク コンポーネントが最新のものであり、現在のネットワーク環境での動作が保証されていることを確認してください。

92：トランザクション テーブルがいっぱいです。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

アプリケーションがアクティブなトランザクションの最大数を超えました。設定プロパティを使用して、[トランザクション数] 環境設定オプションの値を増やしてください。

93：レコードのロック タイプが一致していません。

アプリケーションは、単一レコード ロック (+100/+200) と複数レコード ロック (+300/+400) を同時に同じファイル内に設定しようとしてしました。一方のタイプのロックをすべて解除しなければ、もう一方のタイプのロックは実行できません。

94：アプリケーションでアクセス権のエラーが発生しました。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- アプリケーションが、適切な権限なしでディレクトリ内のファイルを開こうとしたか、あるいは作成しようとしてしました。MicroKernel がユーザーに割り当てられているネットワーク権限を無効にすることはありません。
- 指定されたサーバーはルーティング テーブル内にありますが、クライアントはそのサーバーにログインしていません。
- サーバー上のシステム DSN（データ ソース名）で、データ ファイルへのパス名にエラーがあります。

95：セッションは既に無効になっています。

サーバー MicroKernel は次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- 既に確立されていたセッションが、クライアント マシン、サーバー、またはネットワークでのエラーが原因でアクティブではなくなりました。クライアント マシンがサーバーに接続されていることを確認してから、Btrieve リクエストをいったんアンロードし、再ロードしてください。

96：通信環境エラーが発生しました。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- サーバー上の MicroKernel に接続しようとしてしましたが、MicroKernel のクライアント テーブルがいっぱいです。このエラーを受け取らないようにするには、メモリを追加します。このリソースは、使用可能なメモリの限度まで動的に管理されます。
- DBNAMES.CFG ファイルに異なるサーバー上のデータ ロケーションを指定している名前付きデータベースの定義が含まれている場合、MicroKernel を呼び出すアプリケーションはこのステータス コードを返すことがあります。

97 : データ バッファが小さすぎます。

アプリケーションは、MicroKernel または Btrieve リクエストの現在の許容値より長いレコードを読み取りまたは書き込みしようとしました。次のような場合があります。

- Update、Insert、Create のいずれかのオペレーションの場合、アプリケーションがレコードに対して指定したデータ バッファ長がメッセージ バッファ長より長い場合にこのステータス コードが返されます。
- Get、Step、Stat のいずれかのオペレーションの場合、アプリケーションで指定されているデータ バッファ長に関係なく、MicroKernel が返すデータの長さよりメッセージ バッファが短い場合に、アプリケーションはこのステータス コードを受け取ります。
- Get Chunk オペレーションまたは Update Chunk オペレーションの場合、取得または更新されたチャンクの合計サイズがメッセージ バッファ長を超えています。
- DOS リクエストのみ : Btrieve リクエストを再ロードして、メッセージ バッファ サイズの値を大きくします。これは、/D パラメーターを使って行います。このパラメーターの説明は『*Getting Started with Zen*』に記載されています。

100 : 使用可能なキャッシュ バッファがありません。

これは、MicroKernel がロード時に割り当てたキャッシュ バッファをすべて使用してしまったことを示しています。

アプリケーションがユーザー トランザクション内で大量の書き込み操作 (Insert、Update、および Delete) を使用する場合に、このステータス コードが返されることがあります。現在実装されている MicroKernel エンジンでは、トランザクションが完了するまで、変更ページはすべてキャッシュ内に存在する必要があります。

メモ: 使用可能なメモリが制限されているマシンでは、数千もの書き込み操作を含む非常に大きなトランザクションは正常に終了できない可能性があります。

開発者の方は、もっと頻繁にトランザクションをコミットするようにアプリケーションを修正することで、キャッシュ内にとどまる変更ページを少なくすることができます。この問題を解決するもっと一般的な方法は、設定オプションの [キャッシュ割当サイズ] を増やして MicroKernel を再ロードすることです。

Windows では、データベースを初めて起動したときに、物理メモリ量の 20% をキャッシュ割当サイズとして設定し、その値を Windows レジストリに書き込みます。その後は、エンジンが起動するたびにレジストリからその値を読み取ります。この設定値は再計算されません。システムにメモリを追加したり取り除いたりした場合には、新しく使用可能になったメモリを最大限活かせるようにこのキャッシュ割当サイズの設定を変更する必要があります。

▶▶ キャッシュ割り当てを増やすには次のようにします。

- 1 Zen Control Center を起動します。
- 2 [エンジン] ノードを展開し、目的のエンジン名を探します。
- 3 エンジン名を右クリックして [プロパティ] を選択します。
- 4 [パフォーマンス チューニング] をクリックします。
- 5 右側のフレーム内で、[キャッシュ割当サイズ] にキャッシュに割り当てるメモリ量を入力して、値を調整します。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[キャッシュ割当サイズ](#)」を参照してください。
- 6 新しい設定を有効にするためエンジンを再起動します。

101 : オペレーティング システムのメモリが不十分です。

これは、使用可能なオペレーティング システム メモリが足りないため、要求されたオペレーションを実行できないことを示しています。この問題を解決するには次のいずれかを実行します。

- サーバー設定の [パフォーマンス チューニング] で [キャッシュ割当サイズ] 設定オプションの値を小さくします。

- サーバーにメモリを追加します。

102：スタック領域が不十分です。

これは、MicroKernel のスタック領域が不足していることを示しています。アプリケーションで使用できるスタック領域を大きくするには、アプリケーションをリンクし直して、スタック サイズの値を大きくします。MicroKernel は、WBTRCALL.DLL を呼び出す Windows ベースのアプリケーションか、ローカル サーバー上の MicroKernel エンジンを読み出すアプリケーションに対してのみこのステータス コードを返します。

103：チャンク オフセットが大きすぎます。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- Get Direct/Chunk オペレーションが、明示的に、またはサブファンクション値に対してネクストインレコード バイアスを使用することで、レコードの終端を超えるオフセットを指定しました。最初のチャンクを処理している間に MicroKernel からこのステータス コードが返されない限り、オペレーションは部分的に成功しています。呼び出しの直後にデータ バッファ長パラメーターを調べて、取得されたデータ量 (チャンク数) を確認してください。
- Update Chunk オペレーションが、レコードの終端を 2 バイト以上を超えるオフセットを指定しました。このステータス コードは、MicroKernel がレコードに対して変更をまったく加えていないことを示しています。
- 追加サブファンクション バイアスを使用する Update Chunk オペレーションによって、レコード長がオペレーティング システムのファイル サイズ制限を超えました。MicroKernel はレコードに対して変更を加えていません。

104：MicroKernel がロケールを認識しません。

Create オペレーションまたは Create Index オペレーションの実行中、オペレーティング システムは、指定されたカントリ ID とコード ページの照合順序テーブルを返せませんでした。アプリケーションがロケールのカントリ ID とコード ページを正しく指定していること、またオペレーティング システムがそのカントリ ID とコード ページをサポートするように設定されていることを確認してください。

105：このファイルは、可変長部割り当てテーブル (VAT) 付きで作成することはできません。

アプリケーションが、可変長部割り当てテーブル (VAT) を使用してファイルを作成しようとしたが、可変長レコード (ファイルが VAT を使用するための前提条件) が含まれていません。このステータス コードは、通常のデータ ファイルのほかに、キー オンリー ファイルにも適用されます。

106：MicroKernel は Get Next Chunk オペレーションを実行できません。

アプリケーションが Get Direct/Chunk オペレーションを読み出してレコードからチャンクを取得するとき、ディスクリプターのサブファンクションにネクストインレコード バイアスを使用しました。しかし、アプリケーションがレコード内にその位置を確立した後で (この呼び出しの前に) ターゲット レコードが削除されました。

107：アプリケーションが、v6.0 より前のファイルで Chunk オペレーションを実行しようとした。

アプリケーションが v6.0 より前の形式のファイルに対して Get Direct/Chunk または Update Chunk オペレーションを実行しようとした。

109：セマフォの作成時またはアクセス時に不明なエラーが発生しました。

Windows プラットフォームのワークグループ MicroKernel が、互換性のないバージョンの DLL を使用してオペレーションを実行しようとした。MicroKernel をシャットダウンして、最新バージョンの DLL を使用するようになしてください。

110 : アーカイブ ログ設定ファイルにアクセスできません。

アーカイブ ログ設定ファイル (BLOG.CFG) には、アーカイブ ログを実行するドライブ上のデータ ファイルのエントリが含まれています。MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- MicroKernel が BLOG.CFG を見つけられません。このファイルが、ログの対象となるデータ ファイルを含む物理ドライブの、実際のルート ディレクトリの ¥BLOG ディレクトリに格納されていることを確認してください (マップされたルート ディレクトリは使用しないでください)。ファイルが複数のボリュームに分散している場合は、それぞれのボリュームに ¥BLOG ディレクトリを作成する必要があります。
- MicroKernel が BLOG.CFG ファイルを開けません。ファイルがロックされているか、存在しないかのいずれかです。
- MicroKernel が BLOG.CFG ファイルを読み取れません。ファイルが正しい形式でないか、破損しているかのいずれかです。BLOG.CFG ファイルの形式については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

111 : 指定されたファイル名は、アーカイブ ログ設定ファイル内に見つかりませんでした。

MicroKernel は指定されたファイルを BLOG.CFG ファイル内で見つけることができません。ファイルは、同じ物理ドライブ上にある BLOG.CFG ファイル内に指定する必要があります。デフォルトでは、MicroKernel は、アーカイブ ログ ファイルに、ログ対象のファイルと同じ名前に拡張子 .log を付けた名前を付けます。ただし、BLOG.CFG ファイルで、別のファイル名をアーカイブ ログ ファイルに指定することもできます。BLOG.CFG ファイルがアーカイブ ログ ファイルの正しいファイル名を指定していることと、アーカイブ ログ ファイルが存在することを確認してください。

112 : 指定されたファイルはほかのクライアントが使用しています。

ファイルが最後にバックアップしたときと同じ状態になれば、MicroKernel はロール フォワードを実行することはできません。他のクライアントがファイルを変更した場合は、ファイルを再度復元してからロール フォワードを実行する必要があります。

113 : MicroKernel は、指定されたファイルのアーカイブ ログ ファイルを開けません。

このステータス コードはさまざまな状況が原因で返される可能性があります。一例を挙げると、データベース エンジンが、指定されたファイルに関連付けられたアーカイブ ログ ファイルを見つけることができません。デフォルトでは、MicroKernel は、アーカイブ ログ ファイルに、ログ対象のファイルと同じ名前に拡張子 .log を付けた名前を付けます。ただし、BLOG.CFG ファイルで、別のファイル名をアーカイブ ログ ファイルに指定することもできます。BLOG.CFG ファイルがアーカイブ ログ ファイルの正しいファイル名を指定していることと、アーカイブ ログ ファイルが存在することを確認してください。

もう 1 つの原因としては、ファイルに対してアーカイブ ロギングを行っている状態で、そのアーカイブ ログと同じ名前のログ ファイルをロール フォワードしようとした。データベース エンジンがログ ファイルにロギングを行っている状態であるため、それを使用してロール フォワードすることはできません。

114 : 指定されたファイルのアーカイブ ログが不正です。

指定されたファイルに関連付けられているアーカイブ ログは有効なアーカイブ ログ ファイルではありません。デフォルトでは、MicroKernel は、アーカイブ ログ ファイルに、ログ対象のファイルと同じ名前に拡張子 .log を付けた名前を付けます。ただし、BLOG.CFG ファイルで、別のファイル名をアーカイブ ログ ファイルに指定することもできます。BLOG.CFG ファイルがアーカイブ ログ ファイルの正しいファイル名を設定していることと、アーカイブ ログ ファイルが存在することを確認してください。

115 : アーカイブ ログ ダンプ ファイルにアクセスできません。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でアーカイブ ログ ダンプ ファイルにアクセスできません。

- アーカイブ ログに含まれるエントリをダンプするために指定されたファイル名が不正です。このファイル名にボリューム指定が含まれていないことを確認してください。ダンプ ファイルはログ ファイルと同じボリューム上に作成されます。
- 呼び出し元に、ダンプ ファイルへのアクセス権がありません。
- MicroKernel はファイルをオープンできません。別のユーザーがオペレーティング システムの排他ロックを使用してこのファイルを開いています。

116 : このファイルは、ゲートウェイとして機能している別の MicroKernel エンジンが所有しています。

MicroKernel は、ロケーター ファイルを読み取ることができても、ゲートウェイ コンピューター上で実行しているエンジンと通信できません。これは次のような理由が原因で起こります。

- ゲートウェイ コンピューターの名前を解決できません。この問題を解決するには、次のいずれかを試してみてください。
 - ゲートウェイ コンピューターが、DNS などの名前解決サービスを使って登録されていることを確認してください。
 - 名前解決サービスを使っていない場合は、名前解決を手動で提供する必要があります。現在のマシンに HOSTS という名前のファイルを置いてください。このファイルに、ゲートウェイ コンピューターのネットワーク名と TCP/IP アドレスを関連付ける 1 行を追加します。たとえば、ゲートウェイ コンピューターの名前が "mycomp" で IP アドレスが 125.1.4.245 の場合は、次のような行をファイルに追加します。
125.1.4.245 mycomp
- 2 台のコンピューターがサーバーを認識できるようにルーターによって分離されていますが、お互いを認識できません。次の操作を実行します。
 - Gateway Locator ユーティリティを使用して、ゲートウェイのオーナーを識別します。
 - Zen System Analyzer を使用して、そのコンピューターへのネットワーク接続をテストします。
- 異なる共有名を使ってマップされたファイルを 2 つの異なる Workgroup エンジンで開こうとしました。MicroKernel は訂正を試みますが、すべての場合に訂正できるわけではありません。各コンピューターが同じ共有名でマップするようにしてください。

117 : Continuous オペレーションのデルタ ファイルで不正な内容が検出されました。

Continuous オペレーション中に、あるオペレーションによってデルタ ファイルが読み取られたとき、そのデルタ ファイルで不正な内容が検出されました。『Advanced Operations Guide』の「[Continuous オペレーションの使用](#)」も参照してください。



メモ デルタ ファイルの内容が壊れるような状況に陥ることはまずありません。しかし、そのような状況が発生した場合は、バックアップの進行中に行われたデータ ファイルに対するオペレーションは失われる可能性があります。サーバー設定で「[トランザクション ログ](#)」または「[トランザクションー貫性保持](#)」が有効（チェックがオン）になっており、データ ファイルがアクセラレイティド モードで開いていない場合は、バックアップ中に発生したトランザクションを回復できます。複数のデータ ファイルの整合性が望まれる場合、それらのデルタ ファイルが有効であっても、バックアップ中に変更されたすべてのデータ ファイルを開いてください。

Zen エンジンの起動時にこのステータス コードが発生した場合、ユーザーが何らかの対処を行う必要はありません。これは、事故による停止が発生した際に、1 つ以上のファイルが Zen の Continuous オペレーション モードにあったことを示しています。データベース エンジン是不正なデルタ ファイルをロール インしようとしません。

前述の状況では、データベース エンジンはこのステータス コードを報告するメッセージを記録します。不正なデルタ ファイルへのアクセスを行う Open オペレーションは、そのデルタ ファイルに不正な内容が含まれていても

成功します。トランザクション ログが存在する場合、システム停止後の Open オペレーション時に、失われたトランザクションが通常どおりロール フォワードされます。

エンジンが起動し、Open オペレーションが完了し、トランザクションがロール フォワードされた後、不正な内容を含むデルタ ファイルは別のディレクトリに移動させてください。これにより、同じデータ ファイルに対して再度 Continuous オペレーションを実行することができ、また、テクニカル サポートを受けるために、不正なデルタ ファイルを保持することもできます。

Continuous オペレーションの実行中に、あるオペレーションでこのステータス コードが返された場合、そのオペレーションはデルタ ファイルに対する読み取りや書き込みに失敗している可能性があります。この場合、そのデルタ ファイルはもう Continuous オペレーション用に使用できないかもしれません。以下の操作を順序どおりに行うことが最善の方法です。

- データファイルに対する**すべての**アクティブなセッションを閉じます。
- データ ファイルに対する**その他すべての**オペレーションも停止します。
- `butil -endbu` コマンドを実行（または、Backup Agent を使用している場合は `pvbackup -off` コマンドを実行）して Continuous オペレーションを終了します。

デルタ ファイルが破損していた場合、Continuous オペレーションの終了時に、ロール インは正常に完了しないので注意してください。

- データ ファイルに対して、「[トランザクション ログ](#)」または「[トランザクション一貫性保持](#)」が設定されている場合は、そのデータ ファイルの単独の Open オペレーションを実行してトランザクション ログをロール フォワードします。
- 複数のデータ ファイルの整合性を保つ必要がある場合は、同様のアクションをバックアップ中に書き込まれたすべてのデータ ファイルに適用します。
- これらの修正作業が完了したら、不正なデルタ ファイルを別のディレクトリに移動させます。これにより、同じデータ ファイルに対して再度 Continuous オペレーションを実行することができ、また、テクニカル サポートを受けるために、不正なデルタ ファイルを保持することもできます。

120 : B-Tree インデックス レベルの最大数に達しました。

このステータス コードは、インデックスに大きなキー サイズを指定し、小さなページ サイズを使用する場合に生じます。B ツリーが完全にいっぱいでも、インデックス キーが B ツリーの許容する深さを満たしてしまうことがあります。

このステータス コードを回避するには、以下のいずれかまたは両方を試してください。

- より大きなページ サイズでデータ ファイルをリビルドし、ページごとに格納されるキー数を増やす。
- インデックス キーのよりよい配分を維持していくために、インデックス バランスの設定をオンにする（インデックス バランスをオンにするとパフォーマンスが若干落ちます）。『*Advanced Operations Guide*』の「[インデックス バランスの実行](#)」を参照してください。

121 : 競合する動作によって最適化の開始は阻止されました

ある特定の状況で、Defragmenter がデータ ファイルに対して動作しないことがあります。ファイルの最適化を実行しようとする、ファイルがこのステータス コードを返します。この問題の原因を突き止め、解決するには、以下のことを確認してください。

- ファイルの最適化は既に要求されましたか？ コマンド「`dbdefrag -status ファイル名`」を使用して確認してください。
- Backup Agent がオンになっている場合は、バックアップを完了させ、エージェントをオフにしてから、最適化を開始します。『*Advanced Operations Guide*』の「[Backup Agent](#)」も参照してください。
- 最適化するファイルを開こうとするエンジンが、アーカイブ ロギング用に設定されている場合は、そのエンジンのプロパティの「データ整合性」設定でこの機能をオフにする必要があります。

- このファイルが一時テーブル、または一時的なシステム ファイルと関連付けられている場合、そのファイルは最適化することができません。

123:最適化はキーオンリー ファイルのような、特定のタイプのファイルはサポートしません

最新のリリースでは、キーオンリー ファイルは最適化できません。

124 : 最適化はファイル アクセスをロックする要求が応答なしでタイムアウトしたため、停止しました

このエラーが発生すると、最適化を実行する前にファイルをロックできず、その要求の待ち時間が時間切れとなるため、操作が中止されます。

125 : 検証が失敗したため最適化は停止しました。ファイルに変更はありません。

ファイルの最適化は、検証を完了できなかったため停止しました。ファイルに変更は加えられておらず、システムの操作も変化していません。

検証が完了できない場合、Microsoft のボリューム シャドウ コピー サービス (VSS) の使用が原因である可能性が高いです。最適化は現在、VSS を使用してバックアップ操作を行っている環境にあるサーバー エンジンではサポートされません。ただし、エンジンを再起動すれば、VSS が再び実行されない限り、ファイルの最適化を行えるはずです。

126 : 空き領域不足により、最適化の開始がブロックされました

空きディスク容量が少なすぎたため、要求した最適化の開始はエンジンによって許可されませんでした。Defragmenter は、最適化されるファイルのサイズと同じだけの空きディスク容量を必要とするほかに、最適化操作のために少量の空き容量を必要とします。書き込みが頻繁に行われるファイルについては、さらに多くの空き容量が必要になる可能性があります。最適化をしているディスク ボリュームの空き容量が少なくなった場合には、エンジンはそのボリュームで実行しているファイルの最適化をキャンセルし、このエラーコードを返します。ファイルを最適化するのに必要な空き容量は、分析結果に表示されます。

127 : 開いているファイル ハンドルが原因で、最適化を完了できませんでした

ファイルの最適化は、検証を完了できなかったため停止しました。ファイルに変更は加えられておらず、システムの操作も変化していません。

ファイルの最適化が完了に近づくとき、エンジンは、開いているファイル ハンドルを調査し、最適化中のファイルがレコード取得エラーのリスクを引き起こすかどうかを判断します。これが原因で検証が完了できない可能性が高いです。リスクを判断した場合には、最適化の検証は失敗します。活動が少ない期間には、最適化は成功する可能性があります。

130 : 使用可能なシステム ロックがありません。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.15 で使用されなくなりました。これは、現在使用可能なシステム ロックがないという一時的な状態を表しています。たとえば、次のような場合があります。

- 1 人のクライアントが何千ものレコードを変更する非常に大きなトランザクションを実行している場合。
- 多くのクライアントが大きなトランザクションを並行して実行している場合。

クライアントはトランザクションの実行に関係なくこのコードを受け取る可能性があります。このため、場合によってはクライアントは正常に終了しなかったオペレーションを単純に再試行することができます。他のクライアントがシステム ロックを解除していれば、オペレーションが正常に実行されることもあります。トランザクション中のクライアントがこのステータス コードを受け取った場合は、トランザクションを終了または中断してください。トランザクションが大きい場合は、より小さいトランザクションに分割することも検討してください。設定ユーティリティを使用して、明示的なロックとして機能するシステム ロック数を減らすこともできます。シ

システム ロック数を減らすには、[ロック数] オプションおよび [セッション数] オプションのいずれか、または両方に割り当てられている値をより小さい値に変更します。

132：ファイルがサイズの制限に達しました。

MicroKernel は、次のいずれかの状況でこのステータス コードを返します。

- ファイルが最大サイズに達しました。この制限はファイル バージョンやページ サイズ、および 1 ページあたりのレコード数によって異なります。詳しい説明については、『*Advanced Operations Guide*』の「[ファイル サイズ](#)」を参照してください。
- オペレーションにより、許容される最大ページ数を超えるページをデータ ファイルに割り当てようとした。
- データ ファイルが長い間 Continuous オペレーション モードに置かれていることにより、そのデルタ ファイルのサイズが 4 GB を超えました。
- 1 つのデータ ファイル セグメントが、オペレーティング システムのファイル サイズ制限に達しました。

4,096 バイトより小さいページ サイズを使用しているファイルの場合は、Rebuild ユーティリティを使ってページ サイズを 4,096 バイトに設定してファイルを再構築し、より大きなファイル サイズ制限を利用するようにできます。

133：同じデータ ファイルに 6 人以上のユーザーが同時にアクセスしようとした。

Pervasive.SQL 7 以降では使用されません。

134：MicroKernel がインターナショナル ソート規則 (ISR) を読み取れません。

MicroKernel は、次のいずれかの理由でこのステータス コードを返します。

- ISR が collate.cfg ファイルにありません。
- collate.cfg ファイルが見つからないか、または破損しています。
- MicroKernel は collate.cfg ファイルから ISR を読み取れません。

135：指定されたインターナショナル ソート規則 (ISR) テーブルは破損しているか、または不正です。

MicroKernel は、読み取り可能な collate.cfg ファイルを見つけましたが、指定されたインターナショナル ソート規則 (ISR) テーブルが無効です。

136：MicroKernel は指定されたオルタネート コレーティング シーケンスをファイル内に見つけられません。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- オルタネート コレーティング シーケンス (ACS) を使用するインデックスを作成しようとしたが、MicroKernel は指定された名前の ACS をファイル内に見つけられませんでした。
- Step Next Extended、Get Next Extended、Step Previous Extended、または Get Previous Extended オペレーション を呼び出し、ACS 名を指定しましたが、MicroKernel は指定された名前の ACS をファイルに見つけられませんでした。

137：このアクセス メソッドでのオペレーションは互換性がありません。

このエラーは、以下の不一致のタイプの例のいずれかを示します。

- 13 R2 以降のクライアントから、以下のオペレーションのいずれかを使用して 13.20 以前のバージョンの Zen データベース エンジンを読み出すために、アプリケーションが BTRVEX または BTRVEXID 関数を使用しようとした。

- Create (14)
 - Stat (15)
 - Get Direct/Chunk (23)
 - Unlock (27) : 複数レコード ロックが設定されている 1 つのレコードのロックを解除するため
 - Get Next Extended (36)
 - Get Previous Extended (37)
 - Step Next Extended (38)
 - Step Previous Extended (39)
 - Insert Extended (40)
- PSQL 13 R2 以降のシステムで、データ バッファに返されるレコードの物理位置の範囲が 4 バイトのポインターを超える大きなサイズの 13.0 形式のファイルに対して、アプリケーションが BTRV 関数を使用して Get Position (22) を呼び出そうとした。

138 : ヌル インジケータの位置が不正です。

- Zen のすべてのアクセス方法によるデータ アクセスを確実にするため、ヌル インジケータ セグメント (NIS) は、NIS が示すデータ セグメントの直前にある必要があります。
- NIS は別の NIS によって示すことはできません。

139 : MicroKernel が、キー番号で受け付けられない値を検出しました。

オペレーションの中には、オペレーションに使うファイルのインデックスを指定するためではなく、サブファンクション番号としてキー番号のパラメーターを使用するものがあります。(メモ：これは Get Equal オペレーションでも行われます。) アプリケーションがこれらのオペレーションのいずれかに有効なサブファンクション番号(キー番号パラメーターを介して)を指定しない場合に、このステータス コードが返されます。

- 不正なキー番号を使って Begin Transaction オペレーションを発行しました。
- 不正なキー番号を使って End Transaction オペレーションを発行しました。
- 不正なキー番号を使って Abort Transaction オペレーションを発行しました。
- 不正なキー番号を使って Stat Extended オペレーションを発行しました。

143 : MicroKernel は、セキュリティ設定された MicroKernel データベース内のファイルに権限なしでアクセスすることを許可しません。

MicroKernel は、次の状況でこのステータス コードを返します。

- セキュリティが有効になっている MicroKernel データベースにバインドされたデータ ファイルを開こうとしました。MicroKernel は、MicroKernel を使用しない限り、このようなファイルへのアクセスは許可しません。
- MicroKernel は、MicroKernel を使用していないときに、次の条件すべてに当てはまる場合にも、このステータス コードを返します。
 - [置換] オプションを使用してファイルを作成しようとした。
 - 同じロケーションに、同じ名前のバウンド MicroKernel データ ファイルが既に存在する。
 - 既存のファイルがバインドされているデータベースのセキュリティが有効になっている。

146 : 重複システム キー。

システム キーを生成する 2 つの異なるスレッドによって同じキー番号が生成されました。

147 : ログ セグメントが見つかりません。

MicroKernel は、少なくとも 1 つのファイルをロール フォワードするのに必要なログ セグメントを見つけられません。

148 : ロール フォワード エラーが発生しました。

MicroKernel は、ファイルをロール フォワード中にエラーを検出しました。レポートされるエラー メッセージは、オペレーティング システムによって異なります。

- Btrieve エンジンがインストールされた Windows ワークステーションは、コンソール メッセージ ウィンドウにメッセージを表示し、イベント ログ zen.log に同じ内容のメッセージを書き込みます。
- Btrieve エンジンがインストールされた Windows サーバーは、メッセージの表示は行いませんが、イベント ログ zen.log にメッセージを書き込みます。

149 : SQL トリガー

Btrieve API を使用してデータベース テーブルまたはエントリを変更しているとき、SQL レイヤーによってデータベース上に設定された SQL 制約を検出しました。

151 : チャンク オフセットが小さすぎます。

レコードの固定部分に対してチャンクを挿入したり削除したりすることはできません。

160 : MicroKernel に不正なパラメーターが渡されました。

MicroKernel は、SRB (Service Reply Block) に破損しているパラメーターを検出しました。次のいずれかが原因です。

- ネットワークを介した SRB の転送中にネットワーク エラーが発生したことにより、SRB 内のパラメーターが壊れました。
- システムにある古い Scalable SQL コンポーネントと Zen コンポーネント間で不一致が見つかりました。ほとんどの場合、これがこのエラーの発生原因です。

この問題を解決するには、インストールされているコンポーネント間の矛盾を修復するために、Zen を再インストールします。再インストールして再起動した後もこの問題が発生する場合は、テクニカル サポートまでご連絡ください。

161 : キーがユーザー数、セッション数、使用データの最大制限に達したか、もしくはキーの状態が " 期限切れ " または " 無効 " に変更されました。

いくつかのシナリオによってこのステータス コードが返されます。

- このコードは、一時ライセンスの有効期限が切れた後に返されます。ライセンス管理ツールで検証されるキーの状態は " 期限切れ " になります。キーの有効期限が切れると、すべてのユーザーはこのコードを受け取り、エンジンにアクセスできなくなります。これを解決するには、期限なしキーを認証します。ベンダーまたはテクニカル サポートにお問い合わせの上、期限なしキーをご購入ください。
- ユーザー数、セッション数または使用データが、使用許諾契約書で許可された最大値に達しました。1 つ以上のセッションまたはファイルを閉じることで、ユーザー数、セッション数または使用データの値が制限値を下回るようにすることができます。「セッション」とは、MicroKernel エンジンによって使用されるクライアント ID、またはリレーショナル エンジンへの接続と定義しています。このほか、ユーザー数、セッション数または使用データに対し追加キーを認証するという解決策があります。

ユーザー数、セッション数および使用データの現在値、ピーク値および最大値の測定についての詳細は、『*Advanced Operations Guide*』の「[監視](#)」を参照してください。

- Zen 製品を認証した後でマシン構成を変更した場合にも、このステータス コードを受け取ります。製品認証はお使いのマシンのハードウェア構成と関係しています。マシン上の製品キーを認証した後に、そのマシンのある特定のハードウェア構成アイテムが変更されると、キーは無効になります。ライセンス管理ユーティリティで検証されるキーの状態は " 無効 " になります。

ハードウェア構成の変更を行う必要がある場合は、まず **License Administrator** ユーティリティを使用してキーを認証解除しておいてください。キーの認証解除は、製品キーと固有のハードウェア構成との関連付けを切り離します。ハードウェア構成の変更が完了したら、**License Administrator** ユーティリティを使用して再び製品キーを認証することができます。

162 : クライアント テーブルがいっぱいです。

このステータス コードは **Pervasive.SQL 2000i** で使用されなくなりました。関連する設定はエンジンが動的に管理します。

このステータス コードは次のいずれかの状況で返されます。

- メモリが不足しています。
- アクティブ クライアント数が **64K** を超えています。

163 : ヌル インジケータを最終セグメントにすることはできません。

ヌル インジケータ セグメント (NIS) をキー ディスクリプターの最後のセグメントにすることはできません。

169 : クライアント キャッシュとリモート エンジンのプロトコルが一致しません。

このステータス コードは、クライアント ソフトウェアが、お使いのリモート データベース エンジンに付属する最新のものではないことを示します。**V8** の一般リリース版のリモート エンジンに対して **V8** のプレリリース版のクライアント ソフトウェアを実行している場合にのみ、このステータス コードを受け取ります。

この問題を解決するには、クライアント ソフトウェアをアンインストールし、最新の **V8** クライアントをインストールします。

170 : データベース ログインが必要です。

ユーザー名が不正であるか見つからないため、データベースへの認証に失敗しました。

171 : データベース ログインに失敗しました。

パスワードが不正であるか見つからないため、データベースへの認証に失敗しました。

172 : データベース名が見つかりません。

マシンの有効なデータベース名を指定してください。

173 : 既にログインしています。

Btrieve のログイン要求は、クライアントが指定されたデータベースに既にログインしているため失敗しました。

174 : ログアウトに失敗しました。

データベースにログインしていない場合、あるいはログアウトしようとした際に開いたままのデータベースのファイルハンドルがある場合は、ログアウトが失敗することがあります。

175 : データベース URI の形式が間違っています。

URI 接続文字列が正しく構成されていませんでした。最初の 5 バイトは **"btrv:"** である必要があります。

176 : ファイルまたはテーブルが URI に指定されていません。

Open または **Create** オペレーションの発行に使用した URI 接続文字列には、ファイル名もテーブル名も含まれていませんでした。

177 : データベースに存在しないテーブルです。

Open オペレーションの発行に使用した URI 接続文字列には、ファイル名が含まれておらず、FILE.DDF に存在しないテーブル名が含まれていました。

178 : データベースに存在しないディレクトリです。

Open オペレーションの発行に使用した URI 接続文字列にはフルパス名が含まれていましたが、これは、データベースのデータディレクトリの1つとして存在していないディレクトリを参照していました。

Zen Control Center のデータベースプロパティダイアログボックス (Windows) または **dbmaint** コマンドラインユーティリティ (Linux) を使って、データベースにディレクトリを追加してください。

1000 ～ 1999

Windows および DOS ワークステーション用の MicroKernel ステータス コード

ワークステーションの MicroKernel エンジンには Windows および DOS 環境で以下のようなステータス コードを返します。

1001 : ロック パラメーターが範囲外です。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

[**ロック数**] オプションに指定された値が範囲外だった場合は、v6.x の MicroKernel からこのステータス コードが返されます。[**複数ロック**] オプションに指定された値が範囲外だった場合は、v6.0 より前の MicroKernel からこのステータス コードが返されます。

1002 : メモリ割り当てエラーが発生しました。

ワークステーションには、必要なプログラムすべてをロードできるだけの十分なメモリを確保してください。ワークグループ版の MicroKernel またはクライアント リクエストの場合、コンベンショナル メモリ、拡張メモリ、あるいはその両方に適用されるメモリが不足します。

1003 : 不正なメモリ サイズ パラメーターが指定されました。

[**キャッシュ割当サイズ**] オプションの値が不正な場合は、このステータス コードが返されます。

▶▶ キャッシュ割当サイズを調整するには

- 1 Zen Control Center を起動します。
- 2 [**エンジン**] ノードを展開し、目的のエンジン名を探します。
- 3 エンジン名を右クリックして [**プロパティ**] を選択します。
- 4 [**パフォーマンス チューニング**] をクリックします。
- 5 右側のフレーム内で、[**キャッシュ割当サイズ**] にキャッシュに割り当てるメモリ量を入力して、値を調整します。『*Advanced Operations Guide*』の「[キャッシュ割当サイズ](#)」を参照してください。
- 6 新しい設定を有効にするためエンジンを再起動します。

1006 : プリイメージ バッファ パラメーターが範囲外です。

Pervasive.SQL 2000i で、[**拡張オペレーション バッファ サイズ**] 設定は使用されなくなりました。このリソースは MicroKernel が動的に管理します。その値は、0 ～ 64,000 の範囲内で指定する必要があります。

プリイメージ バッファ サイズ設定オプションに指定できるのは 1 から 64 までの値です。プリイメージ ファイルは v6.0 より前のファイルで使用されていました。MicroKernel v6.0 以降では、[**6.x より前の形式でファイルを作成**]設定オプションを[Yes]にしてロードされた場合に使用されてきました。これらのオプションは MicroKernel v7.8 で使用されなくなりました。

1007 : ファイル パラメーターが範囲外です。

Pervasive.SQL 7 で、[**オープン ファイル数**] 設定オプションは使用されなくなりました。このリソースは MicroKernel が動的に管理します。

v6.0 より前のエンジンの場合、[**オープン ファイル数**] 設定オプションに指定できるのは 1 から 250 までの値です。v6.0 以降のエンジンでこの値の有効な範囲については、そのバージョンのドキュメントを参照してください。

1008 : 初期化パラメーターが不正です。

指定された設定オプションの値が不正または識別できません。

1009 : トランザクション ファイル名パラメーターが不正です。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

[トランザクション ファイル名] 設定オプションに指定したファイル名が不正です。正しいトランザクション ファイル名にしてください。

1010 : トランザクション制御ファイルにアクセス中、エラーが発生しました。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

MicroKernel は BTRIEVE.TRN や MicroKernel.TRN の作成、またこれらのファイルに対するオープン、読み取り、書き込みを行うことができません。BTI.INI ファイルにある TRNFILE 設定を C:¥ に設定してください。

1011 : 圧縮バッファ パラメーターが範囲外です。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

[圧縮バッファ サイズ] オプションに設定されている値が有効範囲内であること確認してください。ターゲット サーバーの設定を確認してください。有効な範囲については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

1012 : /n: オプションが不正です。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

トランザクション内の最大ファイル数設定オプションの値が不正です。有効な値は 0 から 18 で、デフォルトは 12 です。

1013 : タスク リストがいっぱいです。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 7.0 で使用されなくなりました。

Windows 環境で、タスク エントリ テーブルがいっぱいになるとこのステータス コードが返されます。Setup ユーティリティを使用してこの [タスク数] オプションの値を変更することができます。

DOS 環境では、アプリケーションで BTRVID 呼び出しがあったときに、BREQNT リクエスターが *It* パラメーターなしで使用された場合、このステータス コードが返されます。*It* パラメーターには 0 以外の値を使ってリクエスターを再ロードしてください。DOS リクエスター パラメーターの詳細については、『*Getting Started with Zen*』を参照してください。

1015 : MicroKernel に渡されたポインター パラメーターのいずれかが不正です。

MicroKernel に渡されたポインター パラメーターのいずれかが不正です。MicroKernel が無効なポインターに対するチェックを行うのは、初期化ファイル内の [BTRIEVE] ヘッダーで CHKPARMS=YES という行を指定した場合のみです。それ以外の場合、MicroKernel ではポインターのチェックを行わないので、このステータス コードが返されることはありません。

1016 : MicroKernel は既に初期化されています。

このステータス コードは MicroKernel バージョン 6.0 で使用されなくなりました。

既に初期化されている MicroKernel を初期化しようとしました。MicroKernel を再度初期化する場合は、初期化関数を呼び出す前に BTRV インターフェイスを使用して、全ファイルを閉じ、全トランザクションを終了 / 停止し、Btrieve オペレーション 25 を実行してください。

1017 : Btrieve リクエスターがリソース ファイル WBTRVRES.DLL を見つけられません。

WBTRCALL.DLL は、リソース ファイル WBTRVRES.DLL を見つけることができなかったときにこのステータスコードを返します。WBTRVRES.DLL ファイルは WBTRCALL.DLL ファイルと同じディレクトリに置くようにしてください。

1018 : アプリケーションが Btrieve コールバック関数から MicroKernel を呼び出そうとしました。

Windows MicroKernel では Btrieve コールバック関数から MicroKernel を呼び出すようなタスクを実行することはできません。Btrieve for Windows でのみコールバック関数を使用することが可能です。

1019: アプリケーションの Btrieve コールバック関数の要求で、MicroKernel が現在の Btrieve オペレーションをキャンセルしました。

アプリケーションの MicroKernel コールバック関数にゼロ以外の値が返されました。これはそのアプリケーションが現在のオペレーションを直ちに終了することを示しています。MicroKernel はこのようなキャンセル要求を受け取ると、現在実行中のオペレーションの終了を試み、そのオペレーション実行中のコールバック関数の呼び出しを中止しようとします。MicroKernel はオペレーションをキャンセルすることができないかもしれません。しかし、オペレーションのキャンセルに成功した場合 MicroKernel はこのステータスコードを返します。

1020 : Btrieve リクエスター インターフェイスの通信エラーです。

MicroKernel ロダーおよびリクエスター インターフェイスが MicroKernel にメッセージを送信することができなかった場合、このステータスコードが返されます。これは、Ctrl+Alt+Delete キーを使用して Windows をシャットダウンした、または MicroKernel を終了した場合に発生します。これは、単に情報を通知するステータスコードです。特に何らかの対処を行う必要はありません。アプリケーションはシャットダウン処理を続行します。このステータスコードは、Windows によるメッセージ処理を妨げるようなアプリケーションが実行されている場合にも返されます。

1021 : MicroKernel が初期化に失敗しました。

- MicroKernel は自身を初期化することができませんでした。MicroKernel コンソールまたはエラー ログを確認して、MicroKernel が初期化できなかった問題に言及しているメッセージが存在するかどうかを調べてください。
- Windows サーバーの MicroKernel はメッセージの表示は行いませんが、zen.log というファイル名の Zen イベント ログにメッセージを書き込みます。
- Win32 ワークステーションの MicroKernel は、メッセージをコンソール メッセージ ウィンドウに表示し、zen.log にも書き込みます。

コンソール メッセージあるいはエラー ログで示された問題を解決してから、初期化を再試行してください。

1022 : MicroKernel がシャットダウンされています。

MicroKernel がシャットダウンされているため、この操作を完了することができません。この問題を解決するには、エンジンが完全にシャットダウンされてから再起動してください。

2000 ～ 2099

Btrieve リクエスターのステータス コード

このセクションでは、Btrieve リクエスターによって生成されるステータス コードについて説明します。

2000 : 内部エラーです。

Btrieve リクエスターで内部エラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

2001 : メモリの割り当てが不十分です。

DOS 環境では、/D オプションに指定されている値を小さくしてください。

2002 : オプションが不正です。

指定されたオプションは現在のコンテキストでは不正です。たとえば、指定されたフラグがサポートされていない、あるいは、呼び出された関数やメソッドに対して、指定された整数値が範囲外です。

2003 : リクエスターは指定されたファイルへのローカル アクセスを許可していません。

アプリケーションはローカルドライブに保存されているファイルにアクセスしようとしてしました。クライアントマシンにインストールされている MicroKernel の設定では、ローカル ファイルへのアクセスは許可されていません。

2007 : ポインター パラメーターが不正です。

MicroKernel に渡されたポインター パラメーターのいずれかが不正です。プログラムをチェックして、ポインター パラメーターが正しいか確認してください。

2008 : ルーターがエンジンを見つけられません。

MicroKernel ルーターが 6.15 エンジンと通信できません。このステータス コードは MicroKernel v4.0.100 でのみ使用されます。

2009 : MicroKernel ルーター コンポーネントをロードできません。

Btrieve リクエスターが MicroKernel ルーターをロードできません。これは、DLL のロードに失敗した場合や、必要な DLL エントリ ポイントを取得できなかった場合に発生します。

2011 : Btrieve リクエスターのリソース DLL がロードされていません。

リソース DLL が見つからないか、現在のバージョンのリクエスターと互換性がありません。この問題が発生すると、MicroKernel は設定をデフォルトに戻し、実行を継続します。

2012 : Btrieve リクエスターでオペレーティング システム エラーが発生しました。

詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

2200 ～ 2299

XLT ステータス コード

このセクションでは、返される可能性のある XLT ステータス コードについて説明します。

2200 : XLT Winsock エラー。

このステータス コードは、Windows Socket 初期化エラーが発生したときに返されます。

2201 : XLT RPC エラー。

このステータス コードは、MicroKernel がリレーショナル エンジンに対してリモート プロシージャ コール (RPC) を確立できないときに返されます。

2300 ～ 2399

名前付きデータベースのステータス コード

以下のステータス コードは、Zen エンジンの名前付きデータベース機能を使用しているときに返される可能性があります。

2300：これ以上データベース名は定義されていません。

これ以上のデータベース名は定義できません。バッファが十分に長くて複数のデータベース名を格納できる場合は、このステータス コードが返されても、1 つまたは複数のデータベース名が返されることがあります。アプリケーションは iBufLen をチェックして、返された名前の数を確認してください。

2301：データベース名が不正です。

名前付きデータベースではありません。正しいデータベース名を入力したかどうか確認してください。

2302：バッファ長が不正です。

送信用バッファのサイズが小さすぎるため、サイズを増やす必要があります。

2303：データベース名は一意である必要があります。指定された名前は既に存在します。

データベースの作成時、DBNAMES.CFG ファイルに既に存在するデータベース名が指定されました。データベースに別の一意の名前を指定するか、または既に存在するデータベース名を削除してください。

2304：データベース タイプが不正です。

データベースを作成中、不正なデータベース タイプを指定しました。バウンドまたはアンバウンドのデータベース タイプを指定してください。

2305：データ辞書またはデータ ファイルのロケーションに指定されたパスが不正です。

バインドされた名前付きデータベースに指定されたパスが無効です。または、データ ファイルのロケーションに指定されたパスが無効です。入力したパスが UNC パスまたはローカル パスであることを確認して、操作を再試行してください。マップされたドライブ名を含むパスは許可されていません。

2306：DBNAMES.CFG を更新できませんでした。

バインドされた名前付きデータベースに指定されたパスが無効です。または、データ ファイルのロケーションに指定されたパスが無効です。指定したパスが UNC またはローカル パスであることを確認して、操作を再試行してください。マップされたドライブ名を含むパスは許可されていません。

このエラーが Client Reporting Engine から返された場合、そのシステム上でデータベースを作成、削除、または編集しようとしたことを示します。これらの操作が行えるのは、記憶域サーバーとして指定されたローカル システム上か、または ZenCC、bcfg、もしくはその他のツール経由でその記憶域サーバーにリモート接続している場合のみです。

2307 : DBNAMES.CFG ファイルを開けません。

- DBNAMES.CFG ファイルにアクセスして Workgroup エンジンに定義されているデータベース名のリストを取得しようとしている場合は、DBNAMES.CFG ファイルが Windows ディレクトリまたは [DBNames 設定ファイルのディレクトリ] オプションで指定されているディレクトリにあることを確認してください。このファイルは、32 ビット プラットフォームの場合は Windows システム ディレクトリにある必要があります。レジストリに指定したロケーションが正しくないかレジストリ キーが破損しています。次のいずれかの方法で対処してください。
 - ローカル マシンの次のレジストリ キーに指定されているロケーションを調べます。
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Actian¥Zen¥Database Names¥DBNamesDirectory
 - HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Actian¥Zen¥MicroKernel Router¥Local を調べます。この値が yes の場合はローカル、no の場合はサーバーです。
- このエラーが Client Reporting Engine から返された場合は、Storage Serve (記憶域サーバー) プロパティが設定されていないか、または指定された記憶域サーバーに、インストール済みで実行している Zen サーバーがないことを示します。

2308 : 指定された RI フラグが不正です。

データベースを作成中、不正な参照整合性設定を指定しました。参照整合性を使用するかどうかのみを指定してください。

2309 : データベースは使用中です。

別のユーザーが名前付きデータベースの定義を変更している場合、またはユーザーが名前付きデータベースに接続している場合、そのデータベースの定義は変更できません。別のユーザーが名前付きデータベースの定義を変更している場合は、そのデータベースに接続することもできません。

2312 : バウンド データベースはテーブル データ ファイルを共有できません。

バインドされた名前付きデータベースのテーブルによって参照されているデータ ファイルを別の名前付きデータベースにバインドしたり、同じ名前付きデータベースの別のテーブルにバインドすることはできません。バウンド データベースの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

2313 : バウンド データベースはデータ辞書ファイルを共有できません。

バインドされた名前付きデータベースのデータ辞書ファイルを、別の名前付きデータベースから参照することはできません。バウンド データベースの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

2314 : DBNAMES.CFG ファイルを作成できません。

DBNAMES.CFG を生成しようとしたときにエラーが発生しました。DBNAMES.CFG は、システム上で最初のデータベースを作成したときに一緒に作成されます。ワークステーションの DBNAMES.CFG ファイルを作成中の場合は、[DBNames 設定ファイルのディレクトリ] 設定オプションの Windows ディレクトリが有効なディレクトリであることを確認してください。

2316 : バウンド データベースの DDF ファイルを作成できません。

Zen は、バウンド データベースのデータベース ファイルを作成できません。データ辞書ファイルが指定したロケーションに既に存在しないことを確認してください。バインドされた名前付きデータベースは、既存のデータ辞書ファイルをすべて削除してから作成します。バウンド データベースの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

2324：データ辞書ファイルはバインドされていません。

指定された名前付きデータベースのデータ辞書ファイルはバインドされていませんが、バインドされている必要があります。これは通常、データベースをバインドする前に作成されたバックアップからデータ辞書ファイルを復元した状況を示しています。必ず、データベースのバインド状態が一致するバックアップからデータ辞書を復元するようにしてください。バウンド データベースの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

2325：データ辞書ファイルは既にバインドされています。

指定された名前付きデータベースのデータ辞書ファイルは、既に別のデータベースにバインドされています。ただし、この名前付きデータベースは、データベースのバインドまたはアンバインドを行おうとしているエンジンでは定義されていません。バウンド データベースのデータ辞書ファイルは、同一のエンジンからの辞書ファイルだけを参照するようにしてください。バウンド データベースの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

2326：データ辞書ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。

アンバウンドの名前付きデータベースがチェックされました。これは名前付きデータベースが無効であったり破損していることを示すものではなく、名前付きデータベースの定義と実際のデータベースの状態が矛盾していることを示しています。

このステータス コードは通常、データベースがバインドされているときに作成されたバックアップからデータ辞書ファイルを復元した状況を示しています。データベースのバインド状態が一致するバックアップからデータ辞書を復元するか、またはデータベースをバインドしてからアンバインドしてください。データベースをアンバインドすると、データ辞書ファイルからバインド情報が削除されます。

2329：テーブルのデータ ファイルはバインドされていません。

データベース テーブルのデータ ファイルはバインドされていませんが、バインドされている必要があります。このステータス コードは通常、データベースをバインドする前に作成されたバックアップからデータベースのデータ ファイルを復元した状況を示しています。必ず、データベースのバインド状態が一致するバックアップからデータを復元するようにしてください。

2330：テーブルのデータ ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。

アンバウンドの名前付きデータベースがチェックされました。これは名前付きデータベースが無効であったり破損していることを示すものではなく、名前付きデータベースの定義と実際のデータベースの状態が矛盾していることを示しています。このステータス コードは通常、データベースのデータ ファイルがバインドされていることを示します。データベースのバインド状態が一致するバックアップからデータ ファイルを復元するか、またはデータベースをバインドしてからアンバインドしてください。

データベースをアンバインドすると、バインド情報が不要な場合はデータ ファイルから削除されます。

2331：データ辞書のロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2332：データベースのバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2333：データベースのアンバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2334 : データ辞書ファイルの作成と名前の変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2335 : データのロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2336 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのバインドを同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2337 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2338 : 辞書のロケーションの変更とデータ辞書ファイルの作成を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2339 : データ辞書ファイルの作成とデータベースのバインドを同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2340 : データ辞書ファイルの作成とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2341 : データベースのバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2342 : データベースのアンバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。

これら 2 つのパラメーターは同時に変更できません。それぞれのパラメーターを個別に変更してください。

2343 : 名前付きデータベースの一般エラーです。

未確定のエラーです。

2351 : メタデータ バージョンが不一致です。

「[7049](#) : 指定された場所にある既存の DDF とメタデータ バージョンが一致しないため、DDF を作成できません」を参照してください。

3000 ～ 3099

MicroKernel ルーターのステータス コード

このセクションでは、MicroKernel ルーターから返される可能性のあるステータス コードについて説明します。MicroKernel ルーターは、Btrieve リクエストからリクエストを受け取り、適切なバージョンの MicroKernel に転送します。

3000 : MicroKernel ルーターでメモリ割り当てエラーが発生しました。

MicroKernel ルーターは内部でメモリを割り当てられませんでした。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3001 : MicroKernel ルーターへのローカル アクセスはできません。

MicroKernel への呼び出しが失敗しました。通常は、環境設定に問題があることが原因です。たとえば、環境設定に問題があるため MicroKernel が使用不可能で、開くファイルがローカルにある場合、MicroKernel ルーターからこのステータス コードが返されます。

3002 : MicroKernel ルーターのリソース DLL が使用できません。

MicroKernel リソース DLL が見つからないか、現在のバージョンのルーターと互換性がありません。この問題が発生すると、MicroKernel は設定をデフォルトに戻し、実行を継続します。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3003 : MicroKernel ルーターが互換性のないネットワーク コンポーネントを検出しました。

ネットワーク サービス コンポーネントは、このバージョンの MicroKernel ルーターと互換性がありません。通常は、ネットワーク サービス DLL が古いバージョンに置き換えられたことが原因です。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3004 : MicroKernel が MicroKernel ルーターに応答していません。

MicroKernel が MicroKernel ルーターからのリクエストに応答していません。MicroKernel が実行されているか確認してください。

3005 : MicroKernel ルーターでオペレーティング システム エラーが発生しました。

MicroKernel ルーターは、共有メモリ エラーなど、オペレーティング システムの予期しないエラーを検出しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3006 : MicroKernel ルーターが不正なセッションを検出しました。

ポジション ブロックに含まれているセッション情報が不正です。このステータス コードは、次のいずれかの理由で返されます。

- アプリケーションは、エンジンにあるファイルのポジション ブロックを使用しようとしていますが、そのファイルへの接続は B_STOP (25) または B_RESET (28) オペレーションによって切断されています。
- アプリケーションは、リモート サーバーにあるファイルのポジション ブロックを使用しようとしていますが、そのファイルに対して前のオペレーションで異常なネットワーク エラーが発生しています。

3008 : MicroKernel ルーターに対して無効な設定です。

このステータス コードは、無効な環境設定が原因で返されます。たとえば、クライアント設定オプションの [アクセス] > [ローカル MicroKernel エンジンの使用] と [アクセス] > [リモート MicroKernel エンジンの使用]

の両方の設定が**オフ**に設定されていると、ルーターが使用できる有効なパスがなくなります。この場合は、使用しているエンジンがローカル エンジンか、リモート サーバー エンジンか、それとも両方かに応じて、これらのオプションのうち少なくとも 1 つを**オン**に設定してください。

3009 : NETInterface.DLL がロードされていません。

MicroKernel ルーターは NETAPI.DLL を見つけられませんでした。

3012 : MicroKernel ルーターがローカル エンジンにアクセスできません。

ローカル エンジンがロードされていないか、または起動できないため、アクセスできません。このステータスコードは、Workgroup エンジンをインストールせずにクライアント上のローカル ファイルにアクセスしようとした場合や、サーバー エンジンを実行せずにサーバー上のローカル ファイルにアクセスしようとした場合に返される可能性があります。

サーバー エンジンのみをインストールしているときに、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) にステータス コード 3012 の警告エントリが含まれている場合は、次の手順で操作を行います。

▶ ローカル エンジン サポートをオフにするには (クライアントおよびワークグループのみ)

- 1 ZenCC で、[ローカル クライアント] ノードを展開します。
- 2 [MicroKernel ルーター] を右クリックして [プロパティ] を選択します。ログインを指示された場合は、ログインします。
- 3 [アクセス] をクリックします。
- 4 右側のフレーム内で、[ローカル MicroKernel エンジンの使用] の設定を**オフ**に変更します。
- 5 右側のフレーム内で、[リモート MicroKernel エンジンの使用] の値を**オン**に変更します。[OK] をクリックします。
- 6 新しい設定を有効にするためエンジンを再起動します。

3013 : ネットワーク コンポーネントがロードされていないため、MicroKernel ルーターはリモート エンジンにアクセスできません。

MicroKernel ルーターがネットワーク コンポーネントを初期化できないため、リモート エンジンにアクセスできません。考えられる原因は、次のとおりです。

- クライアント設定オプションの [アクセス] > [リモート MicroKernel エンジンの使用] の設定が誤って**オフ**になっています。**オン**にして、リモート サーバー エンジンにアクセスするようにします。
- 必要なネットワーク コンポーネントが見つからないか、互換性がありません。

3014 : MicroKernel ルーターがエンジンを見つけれられません。

オペレーションを処理するエンジン (ローカルまたはリモート) が見つからなかったため、MicroKernel ルーターはオペレーションを完了できませんでした。考えられる原因は、次のとおりです。

- ターゲットのネットワーク オペレーティング システムが使用できません。
- ターゲット エンジンが使用できません。
- Windows 3.x 環境で、スペースが含まれている共有ドライブ名を使用しています。この状態を解決するには、共有ドライブ名からスペースを削除します。たとえば、"D Drive" という名前のサーバーに接続する場合は、共有名を "D_Drive" に変更してください。

3015 : MicroKernel ルーターで初期化エラーが発生しました。

MicroKernel ルーターの初期化中に予期しないエラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3016 : MicroKernel ルーターで内部エラーが発生しました。

MicroKernel ルーターで内部エラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3017 : ローカル エンジンのデータ バッファが小さすぎます。

リクエスターが MicroKernel に対して送信するデータの量が、MicroKernel バッファが処理できる量を超えています。このステータス コードは、ローカルで実行されているエンジンのみに関係しています。クライアント / サーバー環境には該当しません。

このエラーを回避するには、データ バッファ サイズが 63 KB、つまり 64,512 バイト以下になるように減らしてください。

3018 : ファイルは既に閉じています。

MicroKernel ルーターがシャットダウンしているため、これ以上のリクエストを受け入れません。

3019 : MicroKernel ルーターでセマフォ エラーが発生しました。

ローカル エンジンとの接続を確立中にセマフォ エラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3020 : MicroKernel のロード中にエラーが発生しました。

MicroKernel のロード中にエラーが発生した場合、またはサーバーおよびクライアント マシンの共有メモリ オブジェクトにアクセスできない場合に、このステータス コードが返されます。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3021 : MicroKernel ルーターが不正にフォーマットされたデータ パケットを受信しました。

不正なフォーマットであるため、MicroKernel ルーターはエンジンからの応答を拒否しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) をチェックしてください。

3022 : 指定されたデータ バッファ長はデータ パケットとしては長すぎるため、MicroKernel ルーターがリモート エンジンにリクエストを送信できませんでした。

MicroKernel ルーターへの要求に指定したデータ バッファ長によって、データ パケットのサイズが最大の 64 KB を超えました。MicroKernel ルーターは、パケット オーバーヘッドを追加してデータ パケットを形成するため、リクエストに対するデータ バッファ長が 64 KB より小さい場合でも、この問題が発生することがあります。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3030 : リモート アクセスは使用できません。

このステータス コードは、パスがリモートであり、クライアント設定の [ローカル MicroKernel エンジンの使用] がオフに設定されているとき、次のいずれかの場合に返されます。

- オープン リクエストのキー番号が「ローカルのみ」を示している。または、
- [リモート MicroKernel エンジンの使用] 設定オプションがオフに設定されている。

3031 : Linux リクエスターがサーバーに接続できません。

Linux の Zen リクエスターが Pervasive.SQL 2000 サーバー (Service Pack 2a 以前)、あるいは Service Pack 1 が適用されていない Pervasive.SQL V8 サーバーに接続しようとした場合に、このステータス コードが返されます。

- Linux リクエスターを使用して Pervasive.SQL 2000 サーバーに接続するには、特別なアップデートを適用しておく必要があります。このアップデートは、弊社ダウンロードサイトから入手することができます。

- Linux リクエスターを使用して Pervasive.SQL V8 サーバーに接続するには、Service Pack 1 以上を適用しておく必要があります。

3032 : ローカル エンジンの共有メモリを初期化できませんでした。

2 番目のユーザーが MicroKernel エンジンを通じて別のユーザーのデータベース エンジンにアクセスしようとすると、このステータス コードが返されます。このアプリケーションはローカル エンジンに接続できません。マシン上の別のユーザーが管理者特権モード以外のモードでデータベースを起動している可能性があります。この場合、ほかのユーザーはそのエンジンに接続することはできません。

このステータス コードが返される可能性がある状況の 1 つは、ターミナル サービス セッションで、またはユーザーの簡易切り替えを使用したユーザー切り替えによって、ユーザーがワークグループ エンジンやキャッシュ エンジンを起動した場合です。システム上のほかのユーザーはそのエンジンにアクセスすることも、また自身のエンジンのコピーを起動することもできません。ターミナル サービス セッションで、またはユーザーの簡易切り替えを使用して、複数のユーザーがワークグループ エンジンまたはキャッシュ エンジンへアクセスできるようにするには、そのエンジンを実行ファイルではなくサービスとして開始するようにしてください。

3100 ～ 3199

ネットワーク サービス レイヤーのステータス コード

Zen ネットワーク サービス レイヤーでは以下のステータス コードが生成されます。

3103 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでサーバー名が見つかりませんでした。

ターゲット サーバー名の検索は、名前付きパイプおよび DNS を検索した後にアドレスを解決できませんでした。考えられる原因は次のとおりです。

- Windows プラットフォームの場合

- MicroKernel エンジンが実行されていません。
- **サーバーのみの場合** : 名前付きパイプは、このオペレーティング システムでサーバー名の解決に使用されます。オペレーティング システム レベルのネットワークがターゲットの名前付きパイプを見つけられませんでした。

3104 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでアクセス権のエラーが発生しました。

Windows NT プラットフォームのみ : ターゲットの名前付きパイプにアクセスする権限は拒否されました。このステータス コードを受け取った場合は、次のように対処します。

- プロセス間通信メカニズムにアクセスできるか確認してください。
- 2つのシステムで同じユーザー名を使用している場合は、パスワードが同一であるか確認してください。

3105 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで利用可能な転送プロトコルがありません。

ターゲット サーバー エンジンとクライアントの両方で使用できる共通の転送プロトコルがありません。クライアントとサーバーについて、[通信プロトコル] オプションの [サポート プロトコル] 設定を確認してください。通信プロトコルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

3106 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで接続エラーが発生しました。

Zen ネットワーク サービス レイヤーは、クライアント側ではトランスポート接続を確立できましたが、ターゲット側で接続に失敗しました。考えられる原因は次のとおりです。

- MicroKernel がサーバー上で起動していません。
- ネットワークの負荷が大きくなっています。
- 接続パスが無効です。
- 同じサーバーにマップしたドライブが複数あります。
- Windows 32 ビット サーバー上のサーバー エンジンにアクセスしようとしていますが、サーバー エンジンの [リモート リクエストの受付] 設定がオフになっています。この設定をオンにする必要があります。『*Advanced Operations Guide*』の「[ZenCC でローカル クライアントのプロパティを設定するには](#)」を参照してください。プロパティ ツリーで [アクセス] カテゴリをクリックします。

このステータス コードを受け取った場合、詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3107 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでメモリ不足になりました。

メモリ不足のため、Zen ネットワーク サービス レイヤーを続行できません。メモリが不足していないか確認してください。

3108 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが不正なセッションを検出しました。

アプリケーションは、Zen ネットワーク サービス レイヤーで認識されなかったネットワーク セッションを使用しようとしていました。エラーが続く場合は、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

3110 : ネットワーク レイヤーが接続されていません。

アプリケーションは、アクティブではないネットワーク接続を使用しようとしていました。この問題は、Zen ネットワーク サービス レイヤーを含むセッションが有効でも、そのセッションがネットワークから既に削除されている場合に発生します。アプリケーションを停止し、再起動してください。

3111 : ターゲット サーバーへの送信中にエラーが発生しました。

Zen ネットワーク サービス レイヤーは、ターゲット サーバーにアプリケーションからのリクエストを送信しようとしていましたが、ターゲット サーバー側でネットワーク固有のエラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。



メモ Auto Reconnect (自動再接続) に問題がある場合は、さらにステータス コード 3131 が発行されます。

3112 : ターゲット サーバーからの受信中にエラーが発生しました。

Zen ネットワーク サービス レイヤーは、ターゲット サーバーからデータを受信しようとしていましたが、ターゲット サーバー側でネットワーク固有のエラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。



メモ Auto Reconnect (自動再接続) に問題がある場合は、さらにステータス コード 3131 が発行されます。

3114 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのルーティング テーブルがいっぱいです。

Zen ネットワーク サービス レイヤーのサーバー ルーティング テーブルがいっぱいです。このテーブルは、通常、必要に応じて動的に拡張されます。メモリが不足していないか確認してください。

3115 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで転送エラーが発生しました。

クライアント側でローカル転送のエンドポイントを作成中に、Zen ネットワーク サービス レイヤーでソケット エラーが発生しました。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

3116 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでバッファの不一致が発生しました。

高負荷のもと Zen クライアント キャッシュ エンジンを実行していると、サーバーとクライアント リクエスターでデータ バッファが一致していないことを示すために Zen ネットワーク サービス レイヤーがこのステータス コードを返す可能性があります。現在、このエラー コードは Zen イベント ログ (zen.log ファイル) にエントリがありません。ステータス コード 100 もこの動作に関連する可能性があります。

クライアント キャッシュ エンジンの実行中にこのエラーが見られる場合は、PSQL v12 SP1 Update 2 または PSQL v13 以上のクライアント コンポーネントを使用するようにしてください。

3119 : 使用可能な認証コンテキストがありません。

NSL は、提供されたオブジェクトについて指定されたセッションのアクセス コンテキストを返せませんでした。NSL がコンテキストを取得できなかった理由はいくつかあり、転送のタイプによって異なります。

- **NamePipe - NSL** は DNS を介してサーバーの特定はできた可能性がありますが、名前付きパイプの呼び出しを行ってクライアントの認証を要求しようとしたときに、名前付きパイプ通信で障害が発生しました。名前付きパイプが、クライアントおよびサーバーのネットワーク用に正しく設定されていることを確認してください。名前付きパイプの設定については、オペレーティング システムのマニュアルを参照してください。
- **Windows** - 保管されているクライアント資格情報を使用してサーバーへの認証を行います。保管されている資格情報がなく、[クライアント資格情報の入力要求] 設定の値がオフです。
この問題を解決するには、設定プロパティを使用して [クライアント資格情報の入力要求] 設定の値をオンに変更するか、あるいは **pvnetpass** ユーティリティを使ってサーバーに対する有効なクライアント資格情報セットを登録します。セキュリティに関する詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。**pvnetpass** ユーティリティに関する詳細については、『*Zen User's Guide*』を参照してください。
- **Linux** - リモート サーバーのデータへアクセスするためのユーザー名とパスワードを設定する必要があります。この問題を解決するには、**pvnetpass** ユーティリティを使用して、特定のサーバーに対するユーザー名とパスワードを指定するか、そのサーバーのデフォルトのユーザー名とパスワードを作成してください。セキュリティに関する詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。**pvnetpass** ユーティリティに関する詳細については、『*Zen User's Guide*』を参照してください。

3124 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのタスク テーブルがいっぱいです。

ネットワーク サービス レイヤーの各ユーザーについて、タスク エントリが作成されます。タスクの最大数に既に達している場合 (512 で設定不可能)、このエラーが返されます。**Zen** を使用しているアプリケーションで不要なものを終了してください。

3126 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが、指定されたファイル名を有効なパスに変換できませんでした。

指定したファイル名が有効なファイル形式とパスであるか確認してください。

3131 : 再接続中に Zen ネットワーク サービス レイヤーでエラーが発生しました。

このステータス コードは、自動再接続に失敗したことを示します。**zen.log** に次のメッセージが書き込まれます。

- "3131: 再接続は失敗しました。クライアントおよびサーバーのメッセージ ID の同期がとれていません。" - クライアントおよびサーバーは現在のコンテキストに適合しませんでした。最後のリクエストの整合性が検証できないため、接続は終了されました。
- "3131: 再接続は試行されませんでした。AutoReconnect はクライアントでもサーバーでも有効ではありません。" - この場合、クライアントとサーバーのいずれかまたは両方で自動再接続が無効になっているか、サーバーのバージョンが自動再接続をサポートしていません。再接続は試行されません。
- "3131: 再接続の試行がタイムアウトになりました。" - これは、クライアントが自動再接続のタイムアウト時間内にサーバーへの新しい接続を取得できなかったことを示します。
- 3131: ネットワーク接続の再確立後に再接続のネゴシエーションに失敗しました。" - クライアントはサーバーへの新しいネットワーク接続に成功しましたが、**Zen** 自動再接続ネゴシエーション中に通信に失敗したことを示します。



メモ **zen log** のエントリ "0:送信 / 受信障害後の再接続に成功しました。" は、接続に成功したことを示します。

3132 : サポートされていない機能です。

このエラーは、**Scalable SQL** インターフェイスが **Pervasive.SQL V8** ネットワーク サービス レイヤーと通信しようとするときに返されます。

古い Scalable SQL エンジンと Pervasive.SQL V8 コンポーネントの組み合わせは、一切サポートされていません。このエラーが返された場合は、Scalable SQL（または Pervasive.SQL V7）および、コンポーネントがある場合はそれらすべてを検索し、アンインストールしてください。

4000 ～ 4099

データベース ユーティリティのステータス コード

このセクションでは、データベース ユーティリティ (DBU) を使用しているときに返される可能性のあるステータス コードについて説明します。

4083 : コンポーネントがロードされていません。

Zen エンジン サービスを起動しようとしたときにこのステータス コードが返された場合は、キー ファイルがないことを意味します。この問題を解決するには、Zen をアンインストールし、再度インストールします。



メモ また、この状況の詳細については、環境変数を「PVSW_DISP_LOAD_ERRS=AIF」に設定し、アプリケーションを再実行して調べることもできます。この設定により、サービス DLL がモジュールのロード エラーを画面に表示できるようになります。ただし、この環境変数の設定は、モジュールのロード エラー診断にのみ使用してください。それ以外の場合に設定してはいけません。

4086 : 内部エラーが発生しました。ユーティリティ リクエスターの受信サイズが小さすぎます。正しいコンポーネントがロードされているか確認してください。

オペレーションは、要求した情報を受け取るのに十分な大きさのバッファを提供しませんでした。

5000 ～ 5999

暗号化ステータス コード

このセクションでは、ワイヤ暗号化を使用しているとき、またはデータベース セキュリティを有効にしているときに返される可能性のあるステータス コードについて説明します。それらのトピックの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[Zen セキュリティ](#)」を参照してください。

5000 : クライアントが暗号化を要求しています。

クライアント設定の「ワイヤ暗号化」設定オプションが「常時」に設定されています。また、接続しようとするサーバーの「ワイヤ暗号化」設定オプションが「しない」に設定されています。あるいはサーバーのバージョンが 8.50 より前のものでワイヤ暗号化機能がサポートされません。

この問題を解決するには、クライアントの「ワイヤ暗号化」設定を「必要な場合」に変更するか、サーバーの「ワイヤ暗号化」設定を「常時」または「必要な場合」に変更してください。

ワイヤ暗号化設定を変更するには、次のようにします。

- Zen Control Center を使用します。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[ZenCC でローカル クライアントのプロパティを設定するには](#)」を参照してください。
- また、bcfg コマンド ライン ツールも使用することができます。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[bcfg を使用した設定](#)」を参照してください。



メモ 1 台のマシンの場合、Zen サーバーとクライアントは単一の「ワイヤ暗号化」設定を共有します。

5001 : サーバーが暗号化を要求しています。

クライアント設定の「ワイヤ暗号化」設定オプションが「しない」に設定されています。また、接続しようとするサーバーの「ワイヤ暗号化」設定オプションが「常時」に設定されています。

この問題を解決するには、クライアントの「ワイヤ暗号化」設定オプションを「必要な場合」または「常時」に設定してください。

ワイヤ暗号化設定を変更するには、次のようにします。

- Zen Control Center を使用します。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[ZenCC でローカル クライアントのプロパティを設定するには](#)」を参照してください。
- また、bcfg コマンド ライン ツールも使用することができます。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[bcfg を使用した設定](#)」を参照してください。

6000 ～ 6050

データ辞書のステータス コード

このセクションでは、データ辞書ファイルに関連するステータス コードについて説明します。これらのコードは多くの場合、参照整合性に関するエラーと関係があります。

6002：列が不正です。

列名を使用できません。名前に不正な文字が含まれているか、もしくは名前が重複している可能性があります。『*Zen Programmer's Guide*』の「[名前付け規則](#)」を参照してください。

6003：外部キーが見つかりません。

外部キーと関連付けられている列が、主テーブルに存在しません。

6005：列はヌル値を許可していません。

この列をヌルにすることはできません。IDENTITY や SMALLIDENTITY などのいくつかのデータ型はヌルにできません。列のデータ型を確認してください。Zen データ型の一覧については、『*SQL Engine Reference*』の「[データ型](#)」を参照してください。

6006：データ型が不正です。

データ型の番号が有効な範囲内にありません。現在の範囲は 0 から 30 までです。Zen データ型の一覧については、『*SQL Engine Reference*』の「[データ型](#)」を参照してください。

6007：インデックス番号が不正です。

インデックス番号がゼロより小さいです。インデックス番号に負の数は使用できません。

6008：セグメントが多すぎます。

インデックス セグメントの数が許容最大数よりも多くなっています。キーの数は、すべてのファイル バージョンにおいて最大 119 個までです。キー セグメントの数は、ファイル バージョンによって異なりますが、次の表に示す制限値の範囲内でなければなりません。

使用できるインデックス セグメントの数はファイルのページ サイズによって異なります。

ページ サイズ (バイト数)	キー セグメントの最大数 (ファイル バージョン別)			
	8.x 以前	9.0	9.5	13.0
512	8	8	切り上げ ²	切り上げ ²
1024	23	23	97	切り上げ ²
1536	24	24	切り上げ ²	切り上げ ²
2048	54	54	97	切り上げ ²
2560	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²
3072	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²
3584	54	54	切り上げ ²	切り上げ ²

ページ サイズ (バイト数)	キー セグメントの最大数 (ファイル バージョン別)			
	8.x 以前	9.0	9.5	13.0
4096	119	119	204 ³	183 ³
8192	N/A ¹	119	420 ³	378 ³
16384	N/A ¹	N/A ¹	420 ³	378 ³
¹ N/A は「適用外」を意味します。 ² 「切り上げ」は、ページ サイズを、ファイル バージョンでサポートされる次のサイズへ切り上げること を意味します。たとえば、512 は 1024 に切り上げられ、2560 は 4096 に切り上げるということです。 ³ 9.5 以降の形式のファイルでは 119 以上のセグメントを指定できますが、インデックスの数は 119 に制限 されます。				

インデックス セグメントと MicroKernel エンジンに関する詳細については、ステータス コード「[26 : 指定された
キーの数が不正です。](#)」および「[29 : キー長が不正です。](#)」を参照してください。

『Zen Programmer's Guide』の「[ページ サイズの選択](#)」および「[セグメント化](#)」を参照してください。

6009 : インデックス名が重複しています。

インデックス名は列で既に使用されています。一意なインデックス名を使用してください。『Zen Programmer's Guide』の「[名前付け規則](#)」を参照してください。

7000 ～ 7050

Distributed Tuning Interface のステータス コード

このセクションでは、Distributed Tuning Interface を使用しているときに返される可能性のあるステータス コードについて説明します。このインターフェイスの詳細については、『*Distributed Tuning Interface Guide*』を参照してください。

7001：不正な接続ハンドルが指定されました。

API 呼び出しで有効な接続ハンドルを指定してください。

7002：ヌル ポインターが指定されました。

API 呼び出しで有効なポインターを指定してください。

7003：バッファが小さすぎました。

バッファ サイズを増やしてください。API によっては、必要なサイズが出力パラメーターに報告されます。

7004：一般エラーが発生しました。

このエラー コードは以下の状況で返されます。

- オペレーションを実行するのに必要な権限を持っていません。
- ターゲット マシン上でエンジンが起動されていません。
- ターゲット マシン上のエンジンがアプリケーションの場所からアクセスできません。Btrieve や DTI で使用されるポート 3351 をファイアウォールがブロックしている可能性があります。このような場合、このポートへのファイアウォール アクセスを開くことで問題が解決します。

7005：不正なデータ型が指定されました。

オペレーションに有効なデータ型を指定してください。

7006：設定値が範囲外です。

『*Advanced Operations Guide*』の「設定リファレンス」トピックで、設定値の有効範囲を確認してください。

7007：不正な選択項目が少なくとも 1 つあります。

選択項目のリストをチェックして、すべてが有効な選択であることを確認してください。有効な値は、『*Advanced Operations Guide*』の「設定リファレンス」トピックで調べることができます。

7008：シーケンス番号が不正です。

オペレーションに有効なシーケンス番号を指定してください。

7009：開いているファイルに関するデータを使用できません。

開いているファイルに関連するデータは、現在使用できません。

7010：クライアント ID が不正です。

このオペレーションに必要なクライアント ID が不正です。有効なクライアント ID を指定してください。

7011 : アクセス権が不十分です。

要求したオペレーションを実行するのに十分なアクセス権がありません。多くの DTI 関数は、サーバーの管理者権限を必要とします。DTI オペレーションに必要な権限の詳細については、『*Distributed Tuning Interface Guide*』を参照してください。

7012 : 名前付きデータベースは既に存在します。

追加しようとした名前付きデータベースは既に存在します。名前付きデータベースに一意な名前を指定してください。

7013 : 名前付きデータベースは存在しません。

要求された名前付きデータベースは存在しません。有効な名前付きデータベースを指定してください。

7014 : DTI が初期化されていません。

DTI 関数を使用するには、まず `PvStart()` 関数を呼び出して、DTI を初期化する必要があります。そうすると、DTI オペレーションを呼び出せるようになります。完了したら、`PvStop()` を使って DTI セッションを終了します。詳細については、『*Distributed Tuning Interface Guide*』を参照してください。

7015 : ファイルが開いていません。

要求されたオペレーションは開いているファイルを必要とします。

7016 : 辞書ファイルは既に存在します。

指定されたデータベースの辞書ファイルは既に存在します。

7017 : 辞書パスは使用中です。

別のプロセスが辞書ファイルを使用しています。実行中の他のアプリケーションをすべて閉じてから、オペレーションを再試行してください。

7018 : DSN 名が不正です。

作成しようとした DSN 名には不正な文字が含まれているか、もしくは長すぎます。DSN 名は 20 文字以内で、記号 `[]{}()*?*=!@,;` を含めないようにしてください。

7019 : DSN は既に存在します。

作成しようとした DSN は既に存在します。別の名前の DSN を指定してください。

7020 : 指定された DSN は存在しません。

検索しようとした DSN は存在しません。有効な DSN 名を指定してください。

7021 : DSN のオープン モードが不正です。

有効なオープン モードを指定してください。詳細については、『*ODBC Guide*』の「[DSN オープン モード](#)」を参照してください。

7022 : コンポーネントがロードされていません。

DTI に必要なコンポーネントがロードされていません。Zen エンジン再起動してみてください。

7023：ほかのデータベースと共有されているため、データベース ファイルが削除できませんでした。

ほかのデータベースと DDF ファイルを共有しているデータベースを削除しようとする、このステータス コードが返されます。

7024：無効な Btrieve セキュリティ ポリシーです。

データベースの作成時に、不正な Btrieve セキュリティ ポリシーが指定されました。次のいずれかを指定します。

- PSQL_DB_POLICY_CLASSIC
- PSQL_DB_POLICY_MIXED
- PSQL_DB_POLICY_DBSEC

7025：サーバー名が見つかりません。

指定されたサーバーが見つかりません。サーバー名を確認し、再試行してください。

7026：リクエスターがロードされていません。

クライアント リクエスターがロードされていないため、接続を確立できませんでした。

7027：サーバー テーブルがいっぱいです。

内部のサーバー名テーブルがいっぱいなので、接続を確立できませんでした。

7028：クライアント接続の制限に達しました。

DTI のクライアント接続数は 100 に制限されています。

クライアント接続の制限に達したため、接続を確立できませんでした。

7029：パーミッション エラーです。

DTI でアクセス許可エラーが発生したため、接続を確立できませんでした。ユーザー名とパスワードを確認し、再試行してください。

7030：メモリ不足です。

メモリ リソースが不足しているため、接続を確立できませんでした。

7031：使用可能なトランスポートがありません。

リモート接続を一切確立できませんでした。ネットワーク構成を確認してください。

7032：接続に失敗しました。

不明な原因により、接続を確立できませんでした。

7033：接続が失われました。

サーバーへのリモート接続が失われました。このエラーが引き続き発生する場合は、ネットワーク構成を確認してください。

7034 : データベース名が長すぎます。

データベース名の長さ制限を超える名前が指定されました。有効なデータベース名の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』の「[Zen データベース](#)」を参照してください。

7035 : データ パスの数が足りません。

データベースをコピーする際、元のデータベースに含まれているデータ パスの数よりも少ない値が指定されました。

7036 : ファイル名が重複しています。

指定されたファイル名は既に存在します。オペレーションに一意なファイル名を選択してください。

7037 : パスワードが不正です。

オペレーションに指定されたパスワードが有効ではありません。

7038 : ターゲットのデータ パスが不正です。

ターゲットとして指定されたパスが見つかりませんでした。API に提供したパスを検証してください。

7039 : 辞書パスが不正です。

辞書に対して指定されたパスが見つかりませんでした。API に提供したパスを検証してください。

Linux の場合、このエラーは Zen Control Center でデータベースを作成しようとしたときに、ディレクトリのオーナーが zen-svc でない場合に発生します。データベースを作成するディレクトリのオーナーは必ず zen-svc にしてください。chown コマンドを使用してオーナー シップを変更してください。具体的には、「chown zen-svc ディレクトリ名」と指定します。

7040 : フィルター オプションが不正です。

DTI に渡したパラメーターが不正です。有効なオプションについては、『*Distributed Tuning Interface Guide*』を参照してください。

7041 : FILE.DDF のデータベース エントリに絶対パスが格納されているため、操作を実行できません。

FILE.DDF のデータベースに絶対パスが含まれているため、要求された関数を実行できません。この問題を解決するには、データベースから絶対パスを取り除いた後に再試行します。

7042 : バウンド データベースにはデータ辞書ファイルが必要です。

バウンド データベースの作成にはデータ辞書ファイル (DDF) が必要です。バウンド データベースの場合、CREATE DATABASE ステートメントまたはデータベースの新規作成ウィザードでも必ず辞書ファイルを指定します。

7043 : 無効な文字がクライアントによって送信されました。

クライアントが DTI 関数の引数文字列で渡した 1 つまたは複数の文字が無効で、サーバーのエンコードに変換できません。関数の引数を確認してください。

7044 : 無効な文字がクライアントによって受信されました。

サーバーから DTI 関数の引数文字列で受け取った 1 つまたは複数の文字が無効で、クライアントのオペレーティングシステム エンコードに変換できません。別のクライアント マシンを使用する必要があるかもしれません。

7045：内部バッファが小さすぎます。

内部バッファが小さすぎて DTI 引数を処理できません。可能性のある 1 つの回避策は、より短い引数を使用することです。

7046：無効なエンコード変換オプションです。

DTI 関数「[PvCreateDSN2\(\)](#)」または「[PvModifyDSN2\(\)](#)」の変換オプションが無効なエンコードを指定しています。有効なオプションについては、『*Distributed Tuning Interface Guide*』で「*translate*」引数を参照してください。

7047：データベース用のコードページが無効です。

データベースに指定されたコード ページが無効です（データベース エンジンでサポートされていません）。コード ページを確認して、データベース エンジンがサポートするものを使用してください。サポートされるコード ページは、Zen Control Center の [データベースの新規作成] ダイアログで表示することができます。『*Zen User's Guide*』の「[\[データベースの新規作成\] GUI のリファレンス](#)」を参照してください。

7048：このプラットフォームではサポートされない API が使用されています

使用されている API が、このプラットフォームではサポートされません。

7049：指定された場所にある既存の DDF とメタデータ バージョンが一致しないため、DDF を作成できません

このエラーは、選択したディレクトリの場所にデータベースを新規作成しようとしたときに、そのメタデータのバージョンが既存のデータベースのメタデータ バージョンと異なる場合に発生します。これを回避するには、メタデータのバージョンを同じにするか、データベースの作成先に別の場所を選択してください。

7064 ～ 7140

License Administrator のステータス コード

このセクションでは、License Administrator を使用しているときに返される可能性のあるステータス コードについて説明します。

7064 : 製品のライセンスが取得されていません。

これは、セッションがライセンス（ユーザー数、セッション数または使用データ用）を削除しようとしたが、そのセッションはサーバーからライセンスを取得していないか、または別の製品のライセンスを取得していることを示します。

7065 : 製品が入手されていません。

アプリケーションが、製品のライセンス（ユーザー数、セッション数または使用データ用）を取得しようとしたが、認証されているライセンスがありません。ライセンス情報を取得する前に、製品に対してライセンスが認証されていることを確認してください。

7101 : ライセンス文字列に不正な文字があります。

認証しようとした製品キーに 1 つまたは複数の不正な文字が含まれています。"i" および "o" を除く、すべての英数字（大文字、小文字）を使用できます。小文字は自動的に大文字に変換されます。

製品キー内の不正な文字を修正し、キーを認証し直してください。

7102 : 不正なライセンス タイプが定義されています。

アプリケーションが認証しようとした製品キーは有効ではありません。製品タイプが不正です。許可されるタイプは、「期限なし」および「一時」、さらにユーザー数、セッション数または使用データ用の追加ライセンスです。

有効な製品キーが Actian Corporation によって発行されているか、またはデータベース エンジンがアプリケーションに組み込まれている場合はアプリケーション ベンダーによって発行されているかを確認してください。

7108 : 製品キーが長すぎます。

認証しようとした製品キーの長さは、キーに許可される最大長（30 文字）を超えています。製品キーは必ず 30 文字にしてください。

7109 : そのようなライセンスはありません。

認証解除しようとしている製品キーは存在しません。この製品キーは既に認証解除されている可能性があります。

License Administrator GUI を使ってキーを認証解除している場合は、F5 キーを押すと、認証済みのライセンスのリストが再表示されます。更新されたリストで、認証解除しようとした製品キーを調べます。製品キーがまだ存在するように表示される場合は、License Administrator を再起動してください。

7110 : システムにインストールされているのは一時ライセンスのみで、それらすべての有効期限が切れています。

インストールされているライセンスはすべて有効期限が切れている一時ライセンスです。ユーザー数、セッション数または使用データの値はもう適用されていません。有効なライセンス（一時または期限なし）をインストールして、ユーザー数、セッション数または使用データ用の新しい値を提供してください。

7111 : 一時ライセンスを認証解除することはできません。ライセンスは有効期限が切れると無効になります。

一時ライセンスを認証解除しようとした。一時ライセンスは認証解除できません。これは、有効期限が切れると無効になります。認証解除するライセンスが削除可能なタイプであることを確認してください。

7112 : ライセンスは既にインストールされています。

認証しようとした製品キーは、既に認証されています。一度認証されたライセンスは、まず認証解除してからでないと再認証することはできません。一時ライセンスを認証解除することはできません。

License Administrator GUI を使ってライセンスを認証している場合は、F5 キーを押すと、ライセンスのリストが再表示されます。更新されたリストで、認証しようとしたライセンスを調べます。ライセンスがリスト内にまだ表示されない場合は、License Administrator を再起動してください。

7113 : 製品キーが不正です。提供したキーを確認してください。

認証しようとした製品キーは有効なライセンスではありません。有効な製品キーが Actian Corporation によって発行されているか、またはデータベース エンジンがアプリケーションに組み込まれている場合はアプリケーションベンダーによって発行されているかを確認してください。

製品キーが特定のプラットフォーム用のもので、ライセンスを認証しようとしたプラットフォームと一致しない場合にもこのステータス コードが返されます。たとえば、製品キーが "Win64" 用であれば、Windows 32 ビットオペレーティングシステムまたは Linux プラットフォームでそのライセンスを認証することはできません。

License Administrator GUI を使ってキーの認証を行っている場合は、[キー] フィールドにキーを貼り付け直すか再入力してから、[認証] ボタンをクリックしてキーを認証します。

手動認証で特に考慮すべき点

認証要求コードを生成してから認証キー データ文字列を受け取るまでの間に、ご利用のマシンの構成に変更があった場合、このステータス コードは、製品キー自体が有効であっても、認証キー データ文字列がマシンと一致しなくなったことを示すことがあります。この場合、次の 2 つの選択肢があります。

- マシンを以前の構成に戻し、ライセンス キーを再度認証してください。

または

- 以下の手順に従ってください。
 - 1 手動認証ウィザードまたはコマンドライン バージョンの手動認証ユーティリティを再実行します。
 - 2 元の製品キーと新たに得た認証要求コードを用いて Actian サポートへ連絡します。
 - 3 変更したマシン構成用の新しい認証キー データ文字列を入手します。
 - 4 自分のライセンス キーで新しい認証キー データ文字列を使用します。

7115 : 製品 ID が不正です。

認証しようとした製品キーは、キー内の製品名が認識されないため、有効なライセンスではありません。これは、認証しようとしている Zen よりも新しいバージョン用のキーである可能性があります。

7116 : バッファがオーバーフローしました。

DTI 関数または DTO メソッドに割り当てられるバッファが小さすぎます。バッファのサイズを増やしてください。『Distributed Tuning Interface Guide』で該当する関数を、または『Distributed Tuning Objects Guide』で該当するメソッドを参照してください。

7117：製品キーが長すぎます。

認証しようとした製品キーの長さは、キーに許可される最大長（30 文字）を超えています。製品キーは必ず 30 文字にしてください。

7118：サーバーは動作していません。ライセンスの表示、認証、認証解除は行えません。サーバーが動作しており、ネットワーク通信が機能していることを確認してください。

License Administrator がリモート サーバーに接続できません。これは、次のことを示している可能性があります。

- データベース エンジンがインストールされていないクライアントで License Administrator を起動した可能性があります。[OK] をクリックして、サーバーへの接続を確立してください。
- サーバーは動作していません。必要に応じて、『*Getting Started with Zen*』の「[データベース エンジンが起動するかどうかのチェック](#)」に記述されている手順に従ってください。
- ネットワーク通信がサーバーへの接続を妨害しています。サーバーに対して ping コマンドを実行し、ネットワーク通信が機能していることを確認してください。

7119：ローカル サーバーは動作していません。ライセンスの表示、認証、認証解除は行えません。

License Administrator が実行されているローカル マシン上のデータベース エンジンに、License Administrator が接続できません。データベース エンジンがインストールされており、ローカル マシン上で動作していることを確認してください。『*Getting Started with Zen*』の「[データベース エンジンが起動するかどうかのチェック](#)」に記述されている手順に従ってください。

7120：ライセンスを認証解除することはできません。

認証解除しようとしているライセンスの認証解除は行えません。一時ライセンスを認証解除することはできません。これは、有効期限が切れると無効になります。

そのライセンスが認証解除可能なタイプであることを確認してください。

7122：試用ライセンスは有効期限が切れています。

認証しようとしている一時的な試用ライセンスは有効期限が切れており、さらに次のいずれかの状況にも当てはまっています。

- これ以外に認証されているライセンスがない。
- ほかのライセンスが認証されているが、もう有効ではない。たとえば、インストールされているすべての一時ライセンスの有効期限が切れている。

有効なライセンスなしで Zen 製品をインストールすることはできません。認証できる有効なライセンスがある場合は、[続行] をクリックしてください。試用期間の追加が必要な場合は、弊社に新しい試用ライセンスを要求することができます。

7124：ユーザー数、セッション数、または使用データの追加キーは、認証された期限なしキーのベンダー ID と一致するベンダー ID を持つ必要があります。

追加キーが認証される前に、認証済みの期限なしキーが存在している必要があります。追加キーのソフトウェアベンダー ID 番号が、認証済みの期限なしキーのベンダー ID 番号と一致している必要があります。弊社から入手する追加キーはユニバーサルです。つまり、それらのキーはベンダーから入手する期限なしキーと互換性があります。

追加キーを認証する前に、有効な期限なしキーが認証されていることを確認してください。また、追加キーをベンダーから入手した場合はベンダー ID 番号が一致していること確認してください。そうでなければ弊社から入手した追加キーを使用します。ベンダー ID 番号は License Administrator ツールで検証されます。『*Zen User's Guide*』の「[ライセンス管理](#)」を参照してください。

7125 : アクティブな期限なしライセンスは既に存在します。

期限なしキーを認証しようとしているマシンには、既に同じベンダーからの期限なしキーが「アクティブ」状態で含まれています。同じベンダーからのアクティブな期限なしキーを2つ以上認証することはできません。

ベンダーからの期限なしキーが既に認証済みで、それがアクティブな状態である場合、認証できるのはユーザー数、セッション数または使用データに対する追加だけです。既存の製品キーを認証解除してから、新しい期限なしキーを認証してください。

既存の期限なしキーの状態が「検証失敗」または「無効」である場合は、同じベンダーからの別の期限なしキーを同マシンで認証できます。つまり、既存の期限なしキーは**アクティブではない**ということです。既存の期限なしキーの状態が「検証失敗」の間に別の期限なしキーが認証されると、既存の期限なしキーの状態は「無効」になります。その結果、認証された方の期限なしキーはアクティブなキーになります。

7126 : ユーザー数、セッション数、または使用データの最大制限を超えて値を増やすことはできません。

認証しようとしたライセンスの追加によって、ユーザー数、セッション数または使用データの最大制限を超えてしまいます。使用許諾契約書で許可される最大制限を超える値を追加することはできません。

7127 : このキーまたは関連キーは認証解除を要求します。このバージョンのクライアントは、キーを認証解除することができません。

認証解除しようとしているキーまたは関連キーについては、PSQL v10 SP1 以上がインストールされている必要があります。PSQL v10 SP1 以上にアップグレードし、License Administrator ユーティリティを使用してキーを認証解除してください。

7130 : このキーの Zen 製品バージョンはインストールされた Zen エンジンと一致していません。

認証しようとしているキーと関連付けられている Zen 製品のバージョンは、現在インストールされている Zen 製品と一致しません。

使用しているキー、およびインストールしている Zen 製品が正しいかどうか確認してください。

7131 : このキーの OS プラットフォームはインストールされた Zen エンジンと一致していません。

認証しようとしているキーと関連付けられているオペレーティング システムは、現在インストールされている Zen 製品と一致しません。

使用しているキー、およびインストールしている Zen 製品が正しいかどうか確認してください。

7132 : このキーの Zen エンジンの種類はインストールされた Zen エンジンと一致していません。

認証に使用しているキーによって示される Zen データベース エンジンの種類は、インストールされているエンジンと一致しません。

7133 : 関連付けられているユーザー数追加 (UCI) キーが、期限なしキーの認証解除を妨げています。UCI キーは、既に「検証失敗」または「無効」の状態になっているか、あるいは、次回検証されたときに「検証失敗」状態に移行するよう設定されている可能性があります。UCI キーを修復して、期限なしキーの認証解除を実行し直してください。

認証されている期限なしキーは、関連付けられているユーザー数追加キーの問題が原因で認証解除することができません。ユーザー数追加キーの状態は、" 検証失敗 " または " 無効 " になっているか、あるいは次回の検証時に " 検証失敗 " になります。

まずは、そのユーザー数追加キーで何が問題かを特定してください。問題を修正したら、そのユーザー数追加キーを検証し、有効であることを確認します。その後、認証されている期限なしキーの認証解除をもう一度試してください。

7140：この操作は、このバージョンのエンジンではサポートされません。

Zen のエディションによっては、ライセンス供与などの特定の機能に対する制限があります。詳細については、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7200 ～ 7499

許可のステータス コード

このセクションでは、製品の認証を行っているときに返される可能性のあるステータス コードについて説明します。

7201：認証ライブラリの1つで発生したエラーによって処理を続行できません。

認証ライブラリのうちの1つで、処理の続行を妨げるエラーが発生しました。

サービスを再開するか、Zen を再インストールしてから、認証を実行し直してください。このエラーが引き続き発生する場合は、ログ ファイルに報告されているライブラリ名を確認して、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7212：認証を行うための製品キーが無効です。

指定された製品キーは無効です。有効な製品キーを入力するか貼り付けてから、キーの認証を実行し直してください。

7213：製品キーが認証のチェックサム検証に合格しません。

製品キーは有効なキーのようですが、チェックサム検証に合格できません。この原因の多くは、キーの入力ミスによるものです。これ以外には、転送エラーがチェックサム検証を妨げている可能性もあります。

有効な製品キーが指定されているか確認してから、キーの認証を実行し直してください。

7215：マシン ID を決定できません。管理者権限でログオンしているかどうかを確認し、再試行してください。

現在のセッションのマシン ID を判断している間に、システムでエラーが発生しました。

フル アクセス権を持つ管理者としてログオンしているか確認してから、キーの認証または認証解除を再試行してください。Windows Vista 以降のオペレーティング システムを使用している場合は、UAC をオフにしてください。キーの認証または認証解除をリモートで行っている場合は、ローカルで操作してみてください。

7218：マシン構成の取得に関するデバッグ エントリが記録されました。

マシン構成を取得するときにシステムで問題が発生し、Zen ログ リポジトリに情報が記録されました。

フル アクセス権を持つ管理者としてオペレーティング システムにログオンしているか確認してから、キーの認証または認証解除を再試行してください。Windows Vista 以上のオペレーティング システムを使用している場合は、UAC をオフにしてください。キーの認証または認証解除をリモートで行っている場合は、ローカルで操作してみてください。

Windows オペレーティング システムでこの状況が発生する場合は、マシン構成を取得するユーティリティである WMI が適切に動作しているかどうかを確認してください。

Linux オペレーティング システムでこの状況が発生する場合は、システムに dmidecode ユーティリティがインストールされていることを確認し、Zen デーモンを再起動してください。

7221：キーの認証または認証解除を行うには、データベース エンジンが実行されている必要があります。

キーを認証または認証解除する前に、Zen データベース エンジンを起動しておく必要があります。詳細については、『Zen User's Guide』の「[データベース エンジンの起動と停止](#)」を参照してください。

7222 : DTI 呼び出しを完了できない、もしくはエンジンとの接続で問題が発生しました。

DTI への認証呼び出しを完了できなかった、もしくはエンジンとの接続で問題が発生しました。

エンジンまたはサービスを再起動してから、認証を実行し直してください。問題が解決しない場合は、Zen を再インストールしてから、もう一度認証を試行してください。

7223 : DTI が無効なライセンス文字列を返しました。

認証中に返された文字列は空かまたは無効でした。

データベース エンジンが起動されていることを確認してから、認証を実行し直してください。

7224 : ユーザーには、キーを認証または認証解除するための適切な権限がありません。

ターゲット エンジンは、キーの認証または認証解除を実行する前に、適切な権限があるかどうかを検査します。権限が不適切であれば、ターゲット エンジンのテストは失敗します。

管理者権限を持つユーザーとしてログオンしているか確認してから、キーの認証または認証解除を再試行してください。Windows Vista 以降のオペレーティング システムを使用している場合は、一時的に UAC をオフにしてください。

ターミナル サービスで認証を行う場合は、[WTS クライアントからの管理機能を制限] の設定がオフになっていることを確認してください。ZenCC で、[ローカル クライアント] の下にある [MicroKernel ルーター] のプロパティを開きます。このプロパティ ダイアログで、[WTS クライアントからの管理機能を制限] オプションが選択されていないことを確認します。

このエラーは、Zen Workgroup エンジンを Windows Vista 以降のオペレーティング システム上でアプリケーションとして実行している場合、あるいは管理者として実行していない場合にも見られることがあります。Workgroup エンジンを停止してから、[管理者として実行] オプションを使用して zenengnapp.exe を再起動してみてください。もう 1 つの方法としては、Workgroup エンジンをアンインストールして再インストールし、サービスとして実行します。

7226 : キーの認証解除を行うには、認証されているキーが必要です。

使用可能なキーがないため、認証解除を行うことができません。製品キーを認証解除するには、その前に認証されている必要があります。認証解除したい製品キーが認証されていることを確認してください。キーは、削除されずに取り除かれる可能性があります。

License Administrator を使って、認証解除するキーを検証してください。『Zen User's Guide』の「[ライセンス情報の一覧をリフレッシュするには](#)」および「[ライセンス情報を表示するには](#)」を参照してください。認証解除を再試行してから、有効なキーを指定してください。

7235 : このバージョンの Zen では、製品の認証はサポートされません。

このバージョンの Zen は認証サポートしていません。PSQL v10 SP1 以降が起動しているマシンから認証を試みてください。

7239 : インターネット接続が認証サーバーにアクセスできません。

インターネット接続が、キーの検証に必要なデータを取得するためのサーバーにアクセスできません。

考えられる原因は次のとおりですが、これら以外の原因である可能性もあります。

- ネットワークの問題が認証サーバーへの接続を妨げている。
- ローカル システムのレジストリで、認証サーバーの情報が壊れているか、または見つからない。
- ファイアウォールなどのセキュリティ問題が認証サーバーへの接続を妨げている。elspv.actian.com および bkpelspv.actian.com へのアクセスを許可するように、ファイアウォールまたはプロキシ サーバーを設定します。詳細情報は、弊社 Web サイトの「製品別 FAQ」(https://www.agtech.co.jp/actian/faq/auth_q0020/) に記載されています。

- 認証サーバーがダウンしている。確認するには、elspv.actian.com をブラウザで開きます。サーバーが動作している場合は、「ELS WEB SITE AMS11 version 1.5.3 Build 73 - 13.0.0.1」のようなメッセージを返します。これらの説明と解決策でお客様の問題が解決しない場合は、弊社テクニカル サポートまでお問い合わせください。

7241：認証サービス サポート ファイルが見つかりません。

このステータス コードは Linux にのみ適用されます。インターネットによる認証および認証解除を処理するためのサービス ファイルが見つかりませんでした。

Web サービス ファイル `elsdid` が `/usr/local/actianzen/bin` にあり、実行するためのアクセス許可を持っていることを確認してください。サービスを再開するか、Zen を再インストールしてから、認証を実行し直してください。

7252：認証キーは、ターゲット マシンには無効です。

入力された認証キー データは、ターゲット マシンには有効ではありません。オフライン認証の処理中に、キーの形式が正しくなくなった可能性があります。

認証キーを入力し直すか、またはオフライン認証を実行し直してみてください。

7254：キーに不正なライセンス データが含まれているため、認証することができません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

キーの認証時にエラーが発生しました。この問題については製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7260：オフライン データが検証に合格しません。

オフライン データが内部のチェックサム検証に合格しませんでした。転送エラーがチェックサム検証を妨げている可能性があります。オフライン認証を実行し直してください。

7261：オフラインの認証要求データ ファイルの保存中にエラーが発生しました。

オフラインの認証要求データ ファイルを保存しているときに内部エラーが発生しました。ディレクトリが適切なアクセス許可を持っており、保存先のフォルダーが存在することを確認してください。オフライン ファイルを保存し直してください。

7262：オフラインの認証キー データ ファイルの読み込み中にエラーが発生しました。

オフラインの認証キー データ ファイルを読み込んでいるときに内部エラーが発生しました。ディレクトリが適切なアクセス許可を持っており、保存先のフォルダーが存在することを確認してください。オフライン ファイルを読み込み直してください。

7264：製品キーが無効です。

入力された製品キーは無効です。有効な製品キーを入力するか貼り付けてから、実行し直してください。

7265：認証キー データは、認証要求データが生成された同じマシン上に存在している必要があります。

オフライン認証に使用されたターゲット マシンは妥当ではありません。認証要求データ ファイルを作成した同一のマシンを使用してオフライン認証を行ってください。

このステータス コードは、Vista 以降の Windows OS マシンで、管理者権限を持たずにオフライン認証ユーティリティの `licgetauth.exe` を実行した場合にも見られることがあります。この問題を回避するには、[管理者として実行] オプションを使用してコマンド プロンプト ウィンドウからこのユーティリティを実行してください。

7267：オフライン認証のステージが無効であるか、または要求したオフライン操作と矛盾しています。

オフライン ファイルは、オフライン操作と整合性が取れていません。オフライン認証を始めからやり直してください。

7268：オフライン認証はローカルで実行する必要があります。

オフライン認証をリモートで実行することはできません。ローカルでインターネットに接続されているマシンを使って、オフライン認証を実行してください。

7269：ローカル マシンでオフライン操作を処理しようとしたときに内部エラーが発生しました。

オフライン認証の実行中、内部エラーによって処理が妨げられました。オフライン認証を実行し直してください。

7300：ローカル ライセンス コンポーネントがリモート ライセンス サーバーと互換性がありません。

ローカル マシンのライセンス コンポーネントがリモート ライセンス サーバーと互換性がありません。ローカル マシンのライセンス コンポーネントのバージョンが古いと、このステータスコードが返される可能性があります。互換性のあるローカル ライセンス コンポーネントについては、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7305：製品キーが認証データベース内に見つかりません。

製品キーは有効なチェックサムがあり、有効なようですが、リモート認証サーバー上の認証データベース内に見つかりません。製品キーが有効であることを確認してください。有効であり、この問題が解決しない場合は、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7306：製品キーは有効な状態ではありません。

システムは、キーの状態が無効であるため、キーを解読できません。このエラーは、提供されたキーをシステムが解読できない場合、あるいは、キーを解読できても、キーのプロファイルと一致なくなっている場合に発生します。

使用しているキーが正しいことを確認するか、または新しいキーを使ってみてください。弊社サポート サービスへご連絡の上、この状況をご報告ください。

7310：製品キーは認証データベースで無効にされています。

指定された製品キーは、リモート ライセンス サーバー上の認証データベース内で無効にされています。さまざまな理由から、製品キーが無効にされている可能性があります。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7311：製品キーは有効な長さではありません。

入力された製品キーの長さは正しくありません。製品キーの長さは、認証する Zen のバージョンに応じて、25 または 30 文字です。有効な製品キーを入力するか貼り付けてから、実行し直してください。

7313：製品キーは既に別のマシンで使用されています。

この製品キーは既に別のマシンで認証されています。まず、古いマシンの製品キーを認証解除してから、新しいマシンで再度認証してください。

このステータス コードは、キーが存在するマシンでそのキーを認証解除しようとする場合にも返されることがあります。この原因の多くは、キーの認証後にハードウェア署名（マシン署名）が変更され、そのキーを認証解除できないことが挙げられます。そのような場合は、キーを修復してください。

7314：このキーは、異なるマシン署名を持つマシンで認証されたため、認証解除することができません。このキーは別のマシンで使用されているか、あるいは元のマシンのハードウェア署名が変更されている可能性が高いです。ある 1 台のマシンのみで使用するようライセンスされたキーを複製またはコピーしている場合は、有効なライセンス キーを別途購入してください。そうでない場合は、キーを修復して認証解除を再度試してください。

キーが認証されていたマシン署名と、そのキーを認証解除しようとするマシン署名が一致していません。これが発生する状況は、キーが別のマシンにコピーされた場合、およびハードウェアの更新によってマシン署名が変更された場合の 2 つです。1 番目の状況の場合は、期限なしキーを追加購入する必要があります。2 番目の状況の場合は、キーを修復する必要があります。適切な操作を行った後、認証解除を再度試してください。

7315：製品キーは既にこのマシンで使用されています。

製品キーは既にこのマシンで認証されています。認証は既に実行されているため、必要ありません。

キーはマシンには存在していますが、リモート ライセンス サーバー上の認証データベース内にはありません。その場合は、`clilcdm` ユーティリティの `-clear` オプションを使用してマシンに存在するキーをクリアした後、そのキーを認証してください。『*Zen User's Guide*』の「[License Administrator のコマンド ライン インターフェイス](#)」を参照してください。

7317：キーの認証解除を行うには、認証されているキーが必要です。

使用可能なキーがないため、認証解除を行うことができません。製品キーを認証解除するには、その前に認証されている必要があります。認証解除したい製品キーが認証されていることを確認してください。キーは、削除されずに取り除かれる可能性があります。

`License Administrator` を使って、認証解除するキーを検証してください。『*Zen User's Guide*』の「[ライセンス情報の一覧をリフレッシュするには](#)」および「[ライセンス情報を表示するには](#)」を参照してください。認証解除を再試行してから、有効なキーを指定してください。

7334：キーには関連付けられているマシン署名がありません。

リモート ライセンス サーバーの認証データベースに、キーと関連付けられるマシンがリストされません。この状況は、認証済みのキーが含まれる仮想マシン イメージをコピーしてから、元の仮想マシン イメージ上のキーを認証解除し、かつコピーされた仮想マシン イメージでもキーを認証解除しようとした場合に起こる可能性があります。

このステータス コードを回避するには、仮想マシン イメージをコピーする前にキーの認証解除を行ってください。コピーされた仮想マシン イメージ上のキーを削除するには、`CLI License Administrator` を使用してキーをクリアしてください。`clear` オプションによって、キーをローカル マシンで認証解除することなく削除します。キーをクリアしたら、コピーされた仮想マシン イメージでキーを認証します。

7335：マルチマシン キーでは、この操作は許可されません。

実行しようとした操作は、マルチマシンに指定されているキーでは許可されません。正しい操作で正しいキーを使用するようにしてください。

7336：認証は仮想マシンでは実行できません。

多くの場合、仮想マシン セッション内から認証を行うことができます。このエラー メッセージが表示されるのは、認証されている製品キーが初期の `PSQL v10` 製品からのものである場合のみです。このメッセージが提示される場合は、製品キーのベンダーに問い合わせるか、仮想マシン セッション外から認証を再試行してください。

7338：デバッグ モードでは認証を実行できません。

ソフトウェア デバッガー内から製品キーを認証することはできません。デバッガーを終了してから、認証を再試行してください。

7340：使用回数の制限に達しているため、製品キーを認証することはできません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

製品キーは既に、使用回数で許可されている最大回数の認証を行っています。

使用回数は、特定のマシンで予期せぬ事態になった場合に、製品キーを再度認証できるようにするものです。たとえば、記憶域ディスクを交換しなければならなかった場合には、製品を再インストールして、同じマシンで製品キーを再度認証する必要があります。

7341：認証の回数が制限に達しているため、製品キーを認証することはできません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

製品キーは既に、許可されている最大回数の認証を行っています。

製品キーを認証および認証解除できる回数は制限されています。製品キーの再認証が必要な場合は、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7342：認証解除の回数が制限に達しているため、製品キーを認証解除することはできません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

製品キーは既に、許可されている最大回数の認証解除を行っています。製品キーを認証および認証解除できる回数は制限されています。製品キーの認証解除を再度行う必要がある場合は、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7343：修復の回数が制限に達しているため、製品キーを修復することはできません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

製品キーは既に、許可されている最大回数の修復を行っています。

製品キーを修復できる回数は制限されています。製品キーの修復を再度行う必要がある場合は、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7346：製品キーは、許可される最大数のマシンで認証されています。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

認証しようとしている製品キーは、購入した製品に許可される最大数のマシンで既に認証されています。

既にキーが認証されているいずれかのマシンでキーを認証解除し、そのキーを使用して新たなマシンで製品を認証するか、あるいはベンダーから追加ライセンスを購入してください。

7347：オフライン認証の最大数に達しました。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

製品キーに許可されているオフライン認証の最大数に達しました。

製品キーをオフライン認証できる回数は制限されています。オフライン認証がさらに必要な場合は、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7348：一時製品キーを認証解除することはできません。

一時（リムーバブルでない）製品キーは1回しか認証できないので、認証解除することはできません。

7349：一時製品キーは既に認証されています。

一時ライセンスは既に認証されているため、再度認証することはできません。

一時的な製品キーの認証が認められるのは1回だけです。一時ライセンスは、既に使用されているマシンに追加することはできません。

7365：複数ユーザー アクセスによって、レコードの変更がブロックされました。

複数ユーザー アクセスが原因で、ターゲット レコードへの変更はコミットされませんでした。レコードを更新、検証してから、変更を再送信してください。

7366：認証サーバーがビジー状態です。後でもう一度試してください。

認証サーバーは現在ビジー状態です。後でもう一度認証を試してください。

7367：複数ユーザー アクセスが操作の完了を妨げています。

複数ユーザーのアクセスの競合により、要求した操作を完了できません。しばらく待ってから、操作を再試行してください。

7369：サーバーは現在使用できません。後でもう一度試してください。

要求されたサーバーは、現時点ではアクセスできません。20 ～ 30 分後に、サーバーへのアクセスを再試行してください。

7380：国または都市が輸出禁止リストに挙がっています。

システムは、取扱注意の輸出禁止リストに挙がっている国または都市からの IP アドレスを検出しました。このメッセージは誤って届いたと思われる場合は、Actian サポートまでお問い合わせください。

7422：ログインに失敗しました。ユーザー資格情報が無効です。

ユーザーの資格情報が認識されません。ユーザー資格情報を確認してから、ログインをやり直してください。

7423：要求された操作に対する権限が拒否されました。

現在のユーザーは、要求された操作に対するアクセス許可を持っていません。適切な権限を持つユーザーとしてログインするか、または適切な権限を要求してください。

7424：ユーザー アカунトはアクティブではありません。

要求されたユーザー アカウントは非アクティブです。ユーザー アカウントは認証されている必要がある、つまり、アクティブなユーザー アカウントが選択されている必要があります。

7449：キーのベンダーによる懸案事項のため、そのキーをアクティブに設定できません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

ライセンス データが原因でキーをアクティブ状態にすることができません。製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7450：OEM ID がありません。

もう存在しない OEM ID です。別の OEM ID を使用するようを選択するか、または弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7451：OEM アカウントはアクティブではありません。

OEM のアカウントはアクティブでなくなっています。アクティブな OEM アカウントを選択するか、または弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7452 : OEM ユーザーはアクティブではありません。

OEM ユーザーはアクティブでなくなっています。アクティブな OEM ユーザーを使用するように選択するか、または弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

7456 : 要求されたレコードの OEM ユーザー ID が無効です。

アクセスしようとしているレコードは、現在ログインしている OEM ユーザー ID とは異なる OEM ユーザー ID に関連付けられています。正しいレコードにアクセスしているか、またはログインしている OEM ユーザー ID が正しいかどうかを確認してください。

7457 : OEM 製品（ワークグループ / サーバー）は承認されている製品ではありません。

製品は、Actian Corporation との契約上の合意に基づいて OEM に承認されます。要求された製品は、現在の OEM では承認されていません。続行するには、ほかの製品を選択してください。

7458 : 製品キーのリセットまたは修復の最大回数に達しました。

製品キーに許可されている操作（リセットまたは修復）の最大数に達しました。製品キーをリセットおよび修復できる回数は制限されています。これらの操作のいずれかをもう一度実行する必要がある場合は、製品キーのベンダーにお問い合わせください。

7471 : この OEM のシートの最大数に達しました。

OEM のシートの最大数に達しました。

OEM アカウントのシート数は、Actian Corporation との契約に基づいて制限されています。OEM 契約にシートを追加する必要がある場合は、Actian サポートまでお問い合わせください。

7472 : この OEM のライセンスの最大数に達しました。

OEM のライセンスの最大数に達しました。

OEM アカウントのライセンス数は、Actian Corporation との契約に基づいて制限されています。OEM 契約にライセンスを追加する必要がある場合は、Actian サポートまでお問い合わせください。

7473 : この OEM アカウントのシートの最大数に達しました。

シートの合計最大数に達しました。OEM 内の各アカウントのシート数は、Actian Corporation との契約に基づいて制限されています。アカウントにシートを追加する必要がある場合は、Actian サポートまでお問い合わせください。

7474 : この OEM アカウントのライセンスの最大数に達しました。

ライセンスの合計最大数に達しました。

OEM 内の各アカウントのライセンス数は、Actian Corporation との契約に基づいて制限されています。アカウントにライセンスを追加する必要がある場合は、Actian サポートまでお問い合わせください。

7475 : ユーザー数、セッション数、または使用データの値が無効です。

要求された値は定義されていないか、または現在使用できる最大制限より大きい値です。

7477 : OS プラットフォームの種類は、このアカウントに対して無効です。

製品キーに対して要求されたオペレーティング システムは、現在のアカウントでは無効です。正しいアカウントを使用していることを確認し、有効なオペレーティング システムを選択してください。

7478 : 製品の種類は、このアカウントに対して無効です。

製品キーに対して要求された製品の種類は、現在のアカウントでは無効です。正しいアカウントを使用していることを確認し、有効な製品の種類を選択してください。

7479 : アップグレードの種類は、このアカウントに対して無効です。

製品キーに対して要求された製品の種類は、現在のアカウントでは無効です。正しいアカウントを使用していることを確認し、有効な製品の種類を選択してください。

8000 ～ 8499

コンポーネント管理のステータス コード

これらのステータス コードは、MicroKernel のコンポーネント管理インターフェイスおよびイベント ログging インターフェイスで生成されます。

8005：インターフェイスが初期化されていません。

インターフェイスが適切に初期化されない場合、このステータス コードが返されます。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

8006：指定されたコンポーネントが見つかりませんでした。

コンポーネントが見つかりません。詳細については、Zen イベント ログ (zen.log ファイル) を参照してください。

8020：コンポーネントのロード エラーです。

このステータス コードは次のいずれかの状況で返されます。

- サービス DLL がコンポーネントをロードしようとしたときに、オペレーティング システム エラーを受け取った。
- データ ソース名 (DSN) またはデータベース名 (DBN) でスペースが使用された。

Zen ファイルの保存場所については、『*Getting Started with Zen*』の「[ファイルはどこにインストールされますか？](#)」を参照してください。

8022：コンポーネントが初期化されていません。

マルチスレッドのアプリケーションを使用している場合に、あるスレッドがコンポーネントをシャットダウンしましたが、他のコンポーネントがそれを使用し続けようとしています。

8097：一般的なセキュリティ エラー

このステータス コードはデータベース セキュリティのチェック時または設定時に発生する一般的なエラーです。データベース エンジンには、より具体的なステータス コードのエラーに関連付けることができませんでした。エラーが続く場合は、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

8500 ～ 8589

ECAS インターフェイスのステータス コード

このセクションでは、ECAS (Enhanced Common Address Space) インターフェイスによって返されるステータスコードについて説明します。大部分のエラーはシステム エラーであり、Zen イベント ログ zen.log にエントリが書き込まれます。このエラーを受け取った場合は、通常、環境またはメモリ割り当てが不安定になっているため、マシンを再起動する必要があります。

8500 : コンポーネントの初期化中にエラーが発生しました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションはコンポーネント ライブラリの初期化に失敗しました。この状況の詳細については、環境変数を「PVSW_DISP_LOAD_ERRS=AIF」に設定し、アプリケーションを再実行して調べることができます。この設定により、サービス DLL がモジュールのロード エラーを画面に表示できるようになります。ただし、この環境変数の設定は、モジュールのロード エラー診断にのみ使用してください。それ以外の場合に設定してはいけません。

8502 : W3UPIXYY.DLL の検索中にエラーが発生しました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションは W3UPIXYY.DLL の検索またはロードに失敗しました。

8503 : 不正な W3UPIXYY.DLL が見つかりました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションは無効なバージョンの W3UPIXYY.DLL を見つけました。この問題は、破損したバージョンの W3UPIXYY.DLL が原因で発生した可能性があります。

8504 : システム セマフォの作成中にエラーが発生しました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションはシステム セマフォの作成に失敗しました。この問題は、オペレーティング システムのリソース不足が原因で発生した可能性があります。

8505 : Zen エンジンとのセッションを確立中に初期化エラーが発生しました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションはエンジンとのセッション確立に失敗しました。これはシステム エラーです。

お使いの環境にサーバー エンジンだけが入っているお客様によっては、1 つまたは複数のクライアント ワークステーションの zen.log ファイルにステータス 8505 と 8517 の組み合わせが頻繁に報告されます。これはほとんどの場合、ローカル Workgroup エンジンがインストールされていないのに、ワークステーション クライアントがこのエンジンに接続するように設定されていることが原因で発生します。



メモ 環境に Workgroup エンジンが入っているかどうかを確認できない場合は、アドミニストレーターを使用して確認してください。下記の手順によって、ローカル Workgroup エンジンへのアクセスが無効になります。

クライアントがこの接続を試行しないようにするには、次の手順に従います。

- 1 ZenCC で、[ローカル クライアント] ノードを展開します。
- 2 [MicroKernel ルーター] を右クリックして [プロパティ] を選択します。ログインを指示された場合は、ログインします。
- 3 [アクセス] をクリックします。
- 4 右側のフレーム内で、[ローカル MicroKernel エンジンの使用] の設定をオフに変更します。

5 新しい設定を有効にするためエンジンを再起動します。

8506 : MicroKernel のロード中に致命的なエラーが発生しました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションは MicroKernel、W3MKDE.DLL のロードに失敗しました。この問題は、W3MKDE.DLL が見つからないために発生した可能性があります。

8507 : 有効なセッションが見つかりませんでした。

アプリケーションは Workgroup エンジンとのセッションを失いました。

8508 : Btrieve アクセスを開始しようとしたときにエラーが発生しました。

アプリケーションは Workgroup エンジンで Btrieve アクセス メソッドの開始に失敗しました。

8509 : MicroKernel の初期化中にタイムアウトになりました。

アプリケーションは MicroKernel の初期化中にタイムアウトになりました。この問題は、無効な設定オプションまたは Workgroup エンジンの異常が原因で発生した可能性があります。

詳細については、Zen イベント ログ (zen.log) を参照してください。

8510 : Scalable SQL エンジンのロード中に致命的なエラーが発生しました。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

Workgroup エンジンの自動ロード中に、アプリケーションは Scalable SQL、W3SSQL.DLL のロードに失敗しました。この問題は、W3SSQL.DLL が見つからないために発生した可能性があります。

8511 : SQL アクセスを開始しようとしたときにエラーが発生しました。

アプリケーションは Workgroup エンジンで SQL アクセス メソッドの開始に失敗しました。

8512 : Scalable SQL エンジンの初期化中にタイムアウトになりました。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

アプリケーションは Scalable SQL の初期化中にタイムアウトになりました。この問題は、無効な設定オプションまたは Workgroup エンジンの異常が原因で発生した可能性があります。

8513 : Btrieve アクセスを停止しようとしたときにエラーが発生しました。

アプリケーションは Workgroup エンジンで Btrieve アクセス メソッドの停止に失敗しました。

8514 : MicroKernel のアンロード中にエラーが発生しました。

アプリケーションは MicroKernel のアンロードに失敗しました。

8515 : SQL アクセスを停止しようとしたときにエラーが発生しました。

アプリケーションは SQL アクセス メソッドの停止に失敗しました。

8516 : Scalable SQL エンジンのアンロード中にエラーが発生しました。

このステータス コードは Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

アプリケーションは Scalable SQL のアンロードに失敗しました。

8517 : Zen エンジンとのセッションを閉じる際にエラーが発生しました。

アプリケーションは Workgroup エンジンとのセッションを閉じることができませんでした。

お使いの環境にサーバー エンジンだけが入っているお客様によっては、1 つまたは複数のクライアント ワークステーションの zen.log ファイルにステータス 8505 と 8517 の組み合わせが頻繁に報告されます。これはほとんどの場合、ローカル Workgroup エンジンがインストールされていないのに、ワークステーション クライアントがこのエンジンに接続するように設定されていることが原因で発生します。



メモ 環境に Workgroup エンジンが入っているかどうか確かでない場合は、アドミニストレーターを使用して確認してください。下記の手順によって、ローカル Workgroup エンジンへのアクセスが無効になります。

クライアントがこの接続を試行しないようにするには、次の手順に従います。

- 1 ZenCC で、[ローカル クライアント] ノードを展開します。
- 2 [MicroKernel ルーター] を右クリックして [プロパティ] を選択します。ログインを指示された場合は、ログインします。
- 3 [アクセス] をクリックします。
- 4 右側のフレーム内で、[ローカル MicroKernel エンジンの使用] の設定をオフに変更します。
- 5 新しい設定を有効にするためエンジンを再起動します。

8518 : システム メモリの割り当て中にエラーが発生しました。

アプリケーションはシステムのメモリの割り当てに失敗しました。このエラーを防ぐには、他のアプリケーションをすべて閉じてからエンジンを再起動する、キャッシュのサイズを減らす、エンジンの設定を変更して開くファイルとファイル ハンドルのいずれかまたは両方の数を少なくする、などの方法があります。

8519 : SRDE のロード中に致命的なエラーが発生しました。

リレーショナル エンジンの自動ロード中に、アプリケーションは W3ODBCEI.DLL ファイルのロードに失敗しました。この問題は、W3ODBCEI.DLL が見つからないために発生した可能性があります。

8520 : SRDE モジュールの初期化中にタイムアウトになりました。

アプリケーションはリレーショナル エンジン モジュールの初期化中にタイムアウトになりました。この問題は、無効なエンジン設定オプションまたは Workgroup エンジンの異常が原因で発生した可能性があります。

8521 : SRDE モジュールのアンロード中にエラーが発生しました。

アプリケーションはリレーショナル エンジン モジュールのアンロードに失敗しました。

8590 ～ 8599

データベース エンジン サービスのステータス コード

このセクションでは、データベース エンジン サービスから返されるステータス コードについて説明します。これらのエラーは 8590 から 8599 までで、イベント ログに記録されます。このエラーを受け取った場合は、通常、環境またはメモリ割り当てが不安定になっているため、マシンを再起動する必要があります。

8590 : コンポーネント マネージャーを初期化中に、データベース マネージャーでエラーが発生しました。

このエラーは、データベース エンジン サービスがコンポーネント ライブラリの初期化に失敗した場合に発生します。また、このエラーの詳細については、環境変数を「PVSW_DISP_LOAD_ERRS=AIF」に設定し、アプリケーションを再実行して調べることもできます。この設定により、サービス DLL がモジュールのロード エラーを画面に表示できるようになります。ただし、この環境変数の設定は、モジュールのロード エラー診断にのみ使用してください。それ以外の場合に設定してはいけません。

8591 : データベース マネージャーは既にロードされています。

Workgroup エンジンの初期化中に、別の Workgroup エンジンがメモリ上で既に実行されていることが検出されました。このエラーを避けるには、次のいずれかの方法で既に実行されているプログラムをシャットダウンします。

- プログラムがアプリケーションによって自動ロードされる場合は、アプリケーションを終了します。
- アプリケーションが自動的にロードされている場合は、Windows タスクバーの通知領域にあるアイコンを使用して、そのアプリケーションをシャットダウンします。

8592 : データベース マネージャーをロードするにはメモリが不十分です。

このエラーは、システムのリソースが不足していることを示しています。アプリケーションをいくつか終了して、再試行してください。

8593 : データベース マネージャーがシステム スレッドを作成しているときにエラーが発生しました。

このエラーは、システムのリソースが不足していることを示しています。アプリケーションをいくつか終了して、再試行してください。

8594 : エンジンを再起動できません。

アクティブなアプリケーションが存在するにもかかわらず、Workgroup エンジンが停止されたため、エンジンの再起動ができません。すべてのアプリケーションを終了してから、エンジンを再起動してください。再びこのステータス コードが返された場合は、コンピューターを再起動する必要があります。

10000 ～ 10100

SQL 接続マネージャーのステータス コード

このセクションでは、SQL 接続マネージャーによって返されるステータス コードについて説明します。

10000 ～ 10064 : サーバーから予期せず切断されました。

アプリケーションを再起動し、データ ソースにもう一度アクセスしてください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

10065 : 接続しようとしてタイムアウトになりました。

SQL 接続マネージャーが非アクティブであるか、クライアントと異なる転送プロトコルを使っている可能性があります。

サービスが実行中であるかどうか確認してください。Windows の場合は、[サービス] のコントロール パネルを開き、Actian Zen サービスを調べます。また、Zen Control Center で確認することもできます。

クライアントとサーバーが同じ通信プロトコルを使用しているかどうか確認してください。クライアントで ZenCC を開き、Zen エクスプローラーで [MicroKernel ルーター] を右クリックします。次に [プロパティ]、[通信プロトコル] の順に選択します。サポート プロトコルの一覧がサーバーのものと同じになるようにします。サーバー側を調べるには、Zen エクスプローラーでサーバー名を右クリックして [プロパティ]、[通信プロトコル] の順に選択します。

-1000 ～ -5300

リレーショナル エンジンのステータス コード

このセクションでは、リレーショナル エンジンによって返されるステータス コードについて説明します。このセクションに記載されていないエラー コードが表示された場合は、そのエラーが表示される原因となった操作手順を記録し、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

-1003 : API パラメーターが不正です。

API に無効なパラメーターが渡されました。

-1011 : メモリ不足です。

このステータス コードは、エンジンがメモリを割り当てようとして失敗した場合に返されることがあります。

一部のリソースを解放して、再試行してください。[キャッシュ割当サイズ] および [MicroKernel 最大メモリ使用量] 設定オプションのいずれか、または両方の値を減らすか、コンピューター上で動作しているほかのアプリケーションを終了してください。

-1020 : これ以上ファイル ハンドルはありません。

ファイルを開こうとしたときに、ハンドルが返されませんでした。起動しているプログラムおよび開いているファイルをいくつか閉じ、再試行してください。

-1024 : ファイル共有違反です。

読み取り専用のファイルを開こうとしたか、ファイルを開くための適切な権限がユーザーにありません。このエラーが表示される原因となった操作手順を記録し、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

-1026 : レコード サイズ制限を超えました。

レコード長が、許容される最大値を超えたため、一部のデータが切り捨てられました。このエラーが表示される原因となった操作手順を記録し、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

-1032 : ファイル アクセスが拒否されました。

読み取り専用のファイルを開こうとしたか、ファイルを開くための適切な権限がユーザーにありません。このエラーが表示される原因となった操作手順を記録し、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

-1040 : 定義されている列の数が多すぎます。

SELECT ステートメントでは定義できる列の最大数は 1600 で、その他の場合は 1536 です。列数を有効な範囲内に減らして再試行してください。

-1113 : アクティブなセッションの数が多すぎます。

Pervasive.SQL 8 以降では、許可されるセッションの数は動的に割り当てられます。

- データベース エンジンがインストールされているコンピューターで、追加メモリを割り当てるかほかのアプリケーションを閉じてから、再試行してください。
- Windows 32 ビット サーバーの場合：アクティブ セッションの数がメモリの上限に達したため、これ以上増やすことができません。

-1206 : データベース ファイルでないか、またはデータベースが壊れています。

指定されたファイルは有効なデータベース名を持っていないか、データベースが破損しています。

-1207 : データベースは排他的にロックされています。

別のユーザーによって排他的にロックされているデータベースにアクセスしようとしてしました。ユーザーが排他ロックを解除するまで待ち、その後で操作を続けてください。

-1250 : Same column cannot be renamed and modified

列名の変更とその列自体の修正を同時に行うことはできません。たとえば、次のステートメントは列 c1 の名前を変更すると同時に列を修正しているためにエラーが発生します。

```
ALTER TABLE t1 (RENAME COLUMN c1 to c2, MODIFY COLUMN c1 INT)
```

しかし、次のステートメントは名前を変更する列と修正する列が異なるため許可されます。

```
ALTER TABLE t1 (RENAME COLUMN c1 to c2, MODIFY COLUMN c3 INT)
```

-1251 : Multiple columns may not be renamed to the same name

同時に複数の列名を変更する場合、各列の新しい名前は一意である必要があります。2 つの異なる列の名前を変更して同名にすることはできません。たとえば、次のステートメントでは、列 c1 と c3 の両方の名前を c2 にすることはできないため、エラーが発生します。

```
ALTER TABLE t1 (RENAME COLUMN c1 to c2, RENAME COLUMN c3 to c2)
```

-1252 : Column may not be renamed multiple times

同時に複数の列名を変更する場合、同じ列の名前は 1 度しか変更できません。たとえば、次のステートメントでは列 c1 の名前を 2 回変更しているため、エラーが発生します。

```
ALTER TABLE t1 (RENAME COLUMN c1 to c2, RENAME COLUMN column c1 to c3)
```

-1302 : テーブルは排他的にロックされています。

別のユーザーによって排他的にロックされているテーブルにアクセスしようとしてしました。ユーザーが排他ロックを解除するまで待ち、その後で操作を続けてください。

-1303 : テーブルは既に存在します。

テーブルに指定した名前は辞書に登録されています。別の名前を選択するか、現在のテーブル定義を削除してから、再試行してください。

-1304 : テーブルは使用中のため、オペレーションを実行できません。

別のユーザーがテーブルにアクセスしているか変更を行っているため、要求されたオペレーションは実行できません。操作を再試行してください。

-1305 : そのようなテーブルまたはオブジェクトはありません。

アクセスしようとしたテーブルまたはオブジェクトは存在しません。正しい名前とパスを確認し、再試行してください。

-1309 : 排他ロックのかかっていない DDL がありません。

希望のデータベースに対して排他ロックを実行してから、DDL ステートメントを使用する必要があります。

-1312 : ビューは既に存在します。

ビューに指定した名前は辞書に登録されています。別の名前を選択するか、現在のビュー定義を削除してから、操作を再試行してください。

-1313 : トリガーは既に存在します。

トリガーに指定した名前は辞書に登録されています。別の名前を選択するか、現在のビュー定義を削除してから、操作を再試行してください。

-1314 : そのようなテーブルはありません。

テーブルに指定した名前は辞書に登録されていません。既存のテーブル名を指定してから、操作を再試行してください。

-1315 : そのようなビューはありません。

ビューに指定した名前は辞書に登録されていません。既存のビュー名を指定してから、操作を再試行してください。

-1316 : そのようなトリガーはありません。

トリガーに指定した名前は辞書に登録されていません。既存のトリガー名を指定してから、操作を再試行してください。

-1317 : そのようなインデックスはありません。

インデックスに指定した名前は辞書に登録されていません。既存のインデックス名を指定してから、操作を再試行してください。

-1403 : 重複インデックスが存在します。

この定義内で同じインデックスを 2 回以上定義しようとしていました。インデックスが 1 回だけ定義されるように、ステートメントを書き直してください。

場合によっては、1 回目の Create Index ステートメントが成功したかどうか分からないという理由から、ステートメントを再発行してもかまいません。そのような状況でこのエラーコードを受け取った場合には、最初の Create Index オペレーションは成功したという想定のもとに操作を続けることができます。

-1404 : そのようなインデックスはありません。

存在しないインデックスにアクセスしようとしていました。名前とパスを確認し、再試行してください。

-1504 : ヌルは無効です。

実行されたオペレーションでは、ヌルは有効なパラメーターではありません。

-1507 : そのような列はありません。

指定された列は存在しません。正しい列名を指定してください。

-1508 : フィールドは既に定義されています。

このテーブルに指定されたフィールドは既に定義されています。

-1513 : サポートされないインデックス列の型です。

列の型 BIT、LONGVARCHAR、または LONGVARBINARY に対してはインデックスを作成できません。別の列の型を使用してインデックスを作成する必要があります。

-1520 : キー長が不正です。

254 文字より長い文字型の列をインデックスにすることはできません。

-1603 : レコード内にカレンシーがありません。

クエリで一時テーブルが要求されましたが、一時テーブルを結果セットに関連付けるための一意の行識別子（インデックス）がありませんでした。多くの場合、Order By 列または Group By 列にインデックスを追加すると、この問題が解決されます。

-1605 : 重複可能キーが不正です。

このステータス コードは以下の状況で返されます。

- リレーショナル エンジン レベルからの要求を満たすエントリがいずれか 1 つのシステム テーブル内に作成され、同じ名前のデータベース構成要素（列、テーブル、制約）が作成されました。列またはインデックスを作成したけれど、それが作成されたかどうかの確信が持てない場合に、このエラーを受け取る可能性があります。そのような状況でこのエラーを受け取った場合には、最初に試みた作成は成功したという想定のもとに操作を続けることができます。
- 重複する値を含む列に対して一意のインデックスを追加しようとしてしました。

-1809 : アクセス許可が拒否されました。

この操作を実行するための適切な権限がユーザーにありません。ユーザーのアクセス権を確認し、再試行してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-1810 : この操作の実行を許可されていません。

この操作を実行するための適切な権限がユーザーにありません。ユーザーのアクセス権を確認し、再試行してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

このステータス コードは、次のいずれかを行おうとした場合にも返されます。

- EXECUTE 権限を持たずに、最上位の信頼されるストアド プロシージャ上で信頼されるプロシージャを実行しようとする。
- 最外部の信頼されたビュー上の適切な権限を持たずに信頼されたビューに対する操作を実行しようとする。
- EXECUTE 権限を持たずに、最上位の信頼されないストアド プロシージャまたは参照オブジェクト上で信頼されないプロシージャを実行しようとする。
- ビューまたは参照オブジェクトの適切な権限を持たずに、信頼されないビュー上で任意の操作（SELECT、INSERT、UPDATE または DELETE）を実行しようとする。
- Master 以外のユーザーとして信頼されたオブジェクトを作成しようとする。
- Master 以外のユーザーとして、ビュー またはストアド プロシージャの権限を GRANT または REVOKE しようとする。
- オブジェクトの ALTER 権限を持たずにオブジェクトを削除しようとする。

-1902 : ログオンできません。無効なユーザー名またはパスワードが指定されています。

無効なユーザー名またはパスワードが指定されています。パスワードを確認し、再試行してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-1903 : 不正なアカウント名です。

指定されたユーザー名を持つユーザーまたは指定されたグループ名を持つグループが存在しません。ユーザー名またはグループ名を確認し、再試行してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-1905 : パスワードが無効です。

指定されたパスワードが不正です。パスワードを確認し、再試行してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-1907 : アクセスは拒否されました。

そのファイルにアクセスするための適切な権限がユーザーにありません。

-3001 : 同じ名前のユーザー定義関数が既に存在します。

ユーザー定義関数 (UDF) を既存のものと同じ名前で作成しようとしています。UDF の名前を変更してから、もう一度 CREATE ステートメントを実行してください。

-3002 : ユーザー定義関数の名前が不正です。ユーザー定義関数の名前は 1 ~ 30 文字で構成します。

ユーザー定義関数 (UDF) の名前の長さは、1 文字以上 30 文字以下である必要があります。UDF の名前を長さ制限の範囲内で変更してください。

-3003 : COBOL データ ファイルへの挿入は行えません。不正な操作です。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データファイルへ SQL アクセスできるようになります (このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます)。そのようなデータ ファイルに対して INSERT オペレーションは実行できません。

-3005 : COBOL Fake テーブルの変更は行えません。不正な操作です。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データファイルへ SQL アクセスできるようになります (このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます)。そのようなデータ ファイルに対して ALTER TABLE オペレーションは実行できません。

-3006 : COBOL テーブルにトリガーを作成することはできません。不正な操作です。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データファイルへ SQL アクセスできるようになります (このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます)。そのようなデータ ファイルに対して CREATE TRIGGER オペレーションは実行できません。

-3007 : OCCURS/REDEFINES フィールドのインデックスを作成することはできません。不正な操作です。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データファイルへ SQL アクセスできるようになります (このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます)。そのようなデータ ファイルに対して CREATE INDEX オペレーションは実行できません。

-3008 : 従属 OCCURS テーブルのエントリが存在します。メイン テーブルを削除するには、この OCCURS テーブルを削除してください。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。メイン テーブルに OCCURS レイアウトを含んでいる場合は、OCCURS テーブルを削除してからでなければメイン テーブルを削除できません。

-3009 : 従属 REDEFINES テーブルが存在します。メイン テーブルを削除するには、この REDEFINES テーブルを削除してください。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。メイン テーブルに REDEFINES レイアウトを含んでいる場合は、REDEFINES テーブルを削除してからでなければメイン テーブルを削除できません。

-3010 : このインデックスへのマッピング インデックスを持つ OCCURS テーブルが存在します。インデックスを削除できません。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。OCCURS テーブルは、メイン テーブルに含まれているインデックスにマップすることができます。OCCURS テーブルがメイン テーブルのインデックスにマップしている場合は、OCCURS テーブルからそのマップを削除しない限り、メイン テーブルのインデックスは削除できません。

-3011 : この列にはプッシュダウン フィルターが定義されています。この列を更新することはできません。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。テーブルには、そのテーブルと関連付けられた論理式を含むことができます。そのようなテーブル フィルターを「プッシュダウン フィルター」と呼びます。

列にプッシュダウン フィルターが定義されている場合、その列は更新できません。

-3012 : COBOL Fake のメイン テーブルおよびバリエント レコードに対して実行できるのは、CREATE INDEX IN DICTIONARY のみです。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。可変レコード レイアウトのテーブルに対する CREATE INDEX オペレーションは、IN DICTIONARY キーワードを使用しないで実行することはできません（CREATE INDEX ... IN DICTIONARY ...）。

-3014 : トリガーは既に存在します。

トリガーを作成しようとしたが、指定された名前のトリガーは既に存在します。別の名前を使用するか、もしくは既存のトリガーを削除してから新しいトリガーを作成してください。

-3015 : プロシージャは既に存在します。

ストアド プロシージャを作成しようとしたが、指定された名前のストアド プロシージャは既に存在します。別の名前を使用するか、もしくは既存のストアド プロシージャを削除してから新しいストアド プロシージャを作成してください。

-3016 : レコードの固定長部分のサイズが 65535 を超えています。

レコードの固定長部分の合計サイズが 65535 バイトを超えています。データ レコードの固定長部分の合計サイズは、65535 バイトを超えてはいけません。データ レコードの固定長部分は次の要素で構成されます。

- 固定サイズのすべての列 (LONGVARCHAR 型および LONGVARBINARY 型以外のすべての列)
- NULL 値を許可する各列について 1 バイト
- 各可変長列 (LONGVARCHAR 型または LONGVARBINARY 型の列) について 8 バイト

ステータス コード -3016 は、この制限を超えるテーブルの作成を試みるか、または、結果としてテーブルが制限を超えるような変更を試みると返されます。

新しいテーブルを作成する前にレコードの固定長部分のバイト単位のサイズを調べるには、次の計算式を使用します。

$(\text{固定長列サイズのバイト単位の合計}) + (\text{NULL 値を許可する列の数}) + (8 * \text{可変長列の数}) = \text{バイト単位のレコード サイズ}$

既存データ ファイルのレコードの固定長部分のサイズを調べたい場合は、BUTIL -STAT コマンドを使用すれば、この情報を示すレポートを表示できます。

-3017 : パス / ファイル名が無効です。

データ ファイルのパス / ファイル名が長すぎます。

-3018 : IDENTITY 列のデータ型変換が不正です。

IDENTITY 列のデータ型を変更しようとした。

-3019 : システム テーブルは削除できません。

システム テーブルを削除しようとした。

-3020 : USING パス / ファイル名が不正です。

指定したパス / ファイル名が不正です。1 から 64 文字の間で、単純な相対パスを指定してください。

-3021 : IN DICTIONARY は無効です。

バウンド データベースでは IN DICTIONARY は使用できません。

-3022 : NOTE/LVAR を含むレガシー テーブルの BLOB/CLOB データ型が不正です。

NOTE/LVAR 列は LONGVARCHAR/LONGVARBINARY と同時に存在できません。まず、NOTE/LVAR を LONGVARCHAR/LONGVARBINARY に変更する必要があります。

-3023 : データ型が一致しません。

データ型の不一致またはデータのオーバーフローのため、データ変換に失敗しました。このエラーは、たとえば、DOUBLE 型の列を FLOAT 型に変更しようとした場合に発生する可能性があります。

-3024 : 文字列またはバイナリ データの切り捨てエラーです。

CHAR/BINARY データをそれより短いバイト長の CHAR/BINARY データに変換しようとした。

-3025 : 数値演算のオーバーフロー エラーです。

数値をそれより低い精度の数値列に変換しようとした。

-3026 : 不正なヌル変換です。

ヌル値を、ヌル値を許可しない列に変換することはできません。

-3027 : 外部キーの制約名が不正です。

指定した外部キー制約名が無効です。数字と文字のみを使って、1 から 20 文字の間で名前を指定してください。名前は文字で始まる必要があります。

-3028 : パスワードが無効です。

指定したパスワードが不正です。パスワードの最大長と使用できる文字については、『*Advanced Operations Guide*』の「[識別子の種類別の制限](#)」を参照してください。

-3029 : グループ名またはユーザー名が不正です。

指定したグループ名またはユーザー名が不正です。1 から 30 文字の間でグループ名またはユーザー名を指定してください。数字と文字のみ使用できます。先頭は必ず文字にしてください。

-3030 : プロシージャ名またはトリガー名が不正です。

指定したプロシージャ名またはトリガー名が無効です。1 から 30 文字の間で名前を指定してください。数字と文字のみ使用できます。先頭は必ず文字にしてください。

-3031 : MKC ライブラリをロードできません。

MKC ライブラリのロードに失敗しました。以下のファイルが適切なディレクトリに保存されており、お使いの製品に対し正しいバージョンであることを確認してください。

Linux : libmke.* が /usr/local/actianzen/lib ディレクトリにある。

-3032 : 列は主キーによって使用されています。

列を参照しているすべてのインデックスを削除しようとした。その中に、主キーによって使用されているインデックスがあります。

-3033 : 列は外部キーによって使用されています。

列を参照しているすべてのインデックスを削除しようとした。その中に、外部キーによって使用されているインデックスがあります。

-3034 : 型はヌルであってははいけません。

ヌル値を許可する列定義タイプに対して、要求されたオペレーションは実行できません。

-3035 : 外部キーの長さに互換性がありません。

外部キーが参照する列に異なるタイプまたは属性がある場合、外部キーは定義できません。

-3036：外部キーの小数部桁数に互換性がありません。

外部キーが参照する列に異なるタイプまたは属性がある場合、外部キーは定義できません。

-3037：外部キーの精度に互換性がありません。

外部キーが参照する列に異なるタイプまたは属性がある場合、外部キーは定義できません。

-3038：外部キーのデータ型に互換性がありません。

外部キーが参照する列に異なるデータ型がある場合、外部キーは定義できません。

-3039：トリガーに依存しています。

トリガーは参照テーブルに依存しているため、そのテーブルを削除できません。

-3040：グループは既に存在します。

指定されたグループ名を持つグループが既に存在します。別のグループ名を使用してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

指定のグループを作成してみたが、実際に作成されたかどうか確信が持てないためにそのグループ作成操作を再試行した場合にこのエラーを受け取った場合は、そのグループが実際に作成されていることを示します。

-3041：ユーザーは既に存在します。

指定されたユーザー名を持つユーザーが既に存在します。別のユーザー名を使用してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

指定のユーザーを作成してみたが、実際に作成されたかどうか確信が持てないためにそのユーザー作成操作を再試行した場合にこのエラーを受け取った場合は、そのユーザーが実際に作成されていることを示します。

-3043：テーブルは外部キーによって参照されています。

外部キーによって参照されているため、そのテーブルは削除できません。

-3044：トリガーの再帰レベルが多すぎます。

トリガーを 31 回以上繰り返し呼び出すことはできません。

-3045：インデックスは外部キーによって使用されています。

外部キーによって参照されているため、そのインデックスは削除できません。

-3046：整合性制約違反です。

ヌル値を許可する列はこのオペレーションでは使用できません。

-3047：参照整合性（RI）に一致する主キーがありません。

主キーを定義する前に外部キーを作成しようとしました。主キーを定義してから操作を続けてください。

-3048：ページ サイズが不正です。

指定されたページ サイズが不正です。ページ サイズは 512 の倍数で、512 ～ 4,096 バイトの範囲で指定してください（デフォルトは 4,096 です）。

-3049：不正な空きスペース スレッシュホールドです。

指定された空きスペース スレッシュホールドが不正です。空きスペース パーセンテージを 5%、10%、20%、または 30%で指定してください。

-3050：ページ数が不正です。

指定されたページ数が不正です。1 ～ 65,535 の間でページ数を指定してください。

-3051：辞書は使用中です。

アクセスしようとしている辞書は、別のユーザーによってロックされています。辞書がアンロックされるまで待ち、その後で再試行してください。

-3052：辞書は既に存在します。

指定された名前の辞書はディレクトリ内に既に存在します。別の辞書名またはパスを使用してください。

-3053：RI テーブルが存在しません。

存在しないテーブルに対して RI（参照整合性）を定義しようとしてしました。テーブル名を確認し、再試行してください。

-3054：セーブポイント名の重複エラーです。

指定されたセーブポイント名は既に存在します。

-3055：オルタネート コレーティング シーケンスはインデックスに付き 1 つのみです。

任意のインデックスに対して指定できるオルタネート コレーティング シーケンスは 1 つだけです。

-3056：レガシー テーブルでヌル値を許可する列は追加できません。

真のヌル列はレガシー テーブル内で作成できません。

-3057：照合順序が矛盾しています。

列の照合順序の属性に列定義と矛盾するものがあります。

-3058：最後の列は削除できません。

テーブルの最後の列は削除できません。テーブルには最低 1 つの列が含まれている必要があります。

-3059：データベースは辞書ファイルを見つけることができませんでした。

指定されたデータベースの辞書ファイルが見つかりませんでした。辞書ファイルが適切なディレクトリ内にあることを確認してください。

-3060：制約は既に存在します。

指定された制約名は既に存在します。

-3061：制約名が不正です。

作成中の列制約名が長すぎるか、ヌルであるか、または無効な文字を含んでいます。

-3062：データベースにはセキュリティが設定されていません。

セキュリティの設定されていないデータベースに対してセキュリティ権限を設定しようとしてしました。まず、データベースのセキュリティを有効にしてください。

-3063：データベースには既にセキュリティが設定されています。

セキュリティの設定されているデータベースに対してセキュリティは設定できません。

-3064：レガシー テーブルは変更できません。

レガシー テーブルに対してテーブルの変更は実行できません。

-3065：不正なログインです。

無効なユーザー名が使用されたか、パスワードが正しくありません。正しいログイン情報を使用しているかどうか確認してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-3066：グループが見つかりません。

指定されたグループ名を持つグループが存在しません。有効なグループ名を指定してください。問題が解決されない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

-3067：グループが空ではありません。

グループ内に有効なユーザーがいる場合、そのグループは削除できません。ユーザー名を削除してから、グループを削除してください。

-3068：Public のシノニムを定義することはできません。

Public はデフォルトのグループであり、Public グループのシノニムを変更または追加することはできません。

-3069：Public を削除することはできません。

Public はデフォルトのグループであり、グループのリストから削除できません。

-3070：管理者を削除することはできません。

管理者はデフォルトのユーザーであり、ユーザーのリストから削除できません。

-3071：シノニム権限を取り消すことはできません。

シノニムに対する権限を取り消すことはできません。代わりに、シノニムが参照するグループに対する権限を取り消す必要があります。

-3072：シノニム権限を付与することはできません。

シノニムに対する権限は許可できません。代わりに、シノニムが参照するグループに対する権限を許可する必要があります。

-3073：管理者の権限を取り消すことはできません。

管理者はデフォルトのユーザーであり、管理者であるユーザー名から権限を取り消すことはできません。

-3075：変換時の名前変更エラーです。

データベースの変換中に、ファイルの名前を変更できませんでした。

-3076 : 変換時の削除エラーです。

データベースの変換中に、ファイルを削除できませんでした。

-3077 : インデックス名が不正です。

インデックス名が長すぎるか、ヌルです。

-3078 : 列名が不正です。

列名が長すぎるか、ヌルです。

-3079 : テーブル名が不正です。

テーブル名が長すぎるか、ヌルです。

-3080 : データはバインドされていません。

既にバインドされているデータベースはバインドできません。データベースは1度だけバインドできます。

-3081 : DDF バインド情報が間違っています。

バインド情報がデータ辞書ファイルで指定された情報と一致しません。

-3082 : DDF は既にバインドされています。

既にバインドされているデータ辞書ファイルはバインドできません。

-3083 : DDF はバインドされていません。

バインドされていないデータ辞書ファイルはアンバインドできません。

-3084 : 共有 DDF です。

共有データ辞書ファイルを使用するデータベースはバインドできません。

-3085 : 共有データ ファイルです。

共有データ ファイルを使用するデータベースはバインドできません。

-3086 : インデックスは主キーによって使用されています。

主キーによって参照されているため、そのインデックスは削除できません。

-3087 : 主キーは既に存在します。

テーブルには主キーが定義されています。既存の主キーを削除し、新しい主キーを作成し直す必要があります。

-3088 : 互換性のないファイル バージョンです。

指定されたファイルは v6.x 以前のデータ ファイル形式を使用しているため、現バージョンのデータ ファイル形式に移行してから使用する必要があります。Rebuild ユーティリティを使用して、ファイル バージョンを移行してください。

-3089 : 複数パスが矛盾しています。

外部キーはそれ自体を含むテーブルを参照できません。

-3090 : 連鎖削除サイクル。

外部キーの定義中に外部キー削除規則違反がありました。

-3091 : 自己参照の削除規則がカスケードではありません。

PSQL v11 SP3 以降、このコードは使用されなくなりました。自己参照テーブルに対する制約には、カスケードまたは制限のいずれかが可能です。

自己参照削除を実行するには、外部キー内でカスケードの削除を定義する必要があります。

-3092 : RI が同期していません。

データ辞書ファイル内のバインド情報とデータ ファイル内のバインド情報が一致しません。

-3093 : トリガー RI 競合です。

Delete トリガーがテーブル上に存在する場合、外部キー内でカスケードの削除を定義することはできません。

-3094 : 不正な削除規則です。

名前削除の規則または属性が不正です。

-3095 : 不正な更新規則です。

名前更新の規則または属性が不正です。

-3096 : オブジェクトは使用中です。

使用中のストアド プロシージャ、トリガーまたはビューを削除することはできません。

-3097 : 照合順序が不正です。

照合順序の名前が間違っている、使用できない、または破損している可能性があります。

-3098 : 数値が範囲外です。

指定された数値の範囲が不正です。指定したオプションの範囲を確認し、正しい数値を入力してください。

-3099 : 外部キーのデータベース名が不正です。

外部キーの作成中、長すぎるまたはヌルのデータベース名が指定されました。

-3348 : 指定された場所にある既存の DDF とメタデータ バージョンが一致しないため、DDF を作成できません

「[7049 : 指定された場所にある既存の DDF とメタデータ バージョンが一致しないため、DDF を作成できません](#)」を参照してください。

-3358 : データベースのアンバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。

「[2342 : データベースのアンバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。](#)」を参照してください。

-3359 : データベースのバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。

「2341 : データベースのバインドとデータのロケーションの変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3360 : データ辞書ファイルの作成とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。

「2340 : データ辞書ファイルの作成とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3362 : 辞書のロケーションの変更とデータ辞書ファイルの作成を同時に行うことはできません。

「2338 : 辞書のロケーションの変更とデータ辞書ファイルの作成を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3363 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。

「2337 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのアンバインドを同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3364 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのバインドを同時に行うことはできません。

「2336 : データ辞書のロケーションの変更とデータベースのバインドを同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3365 : データのロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。

「2335 : データのロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3366 : データ辞書ファイルの作成と名前の変更を同時に行うことはできません。

「2334 : データ辞書ファイルの作成と名前の変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3367 : データベースのアンバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。

「2333 : データベースのアンバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3368 : データベースのバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。

「2332 : データベースのバインドと名前の変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3369 : データ辞書のロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。

「2331 : データ辞書のロケーションの変更と名前の変更を同時に行うことはできません。」を参照してください。

-3370 : テーブルのデータ ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。

「2330 : テーブルのデータ ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。」を参照してください。

-3371 : テーブルのデータ ファイルはバインドされていません。

「[2329 : テーブルのデータ ファイルはバインドされていません。](#)」を参照してください。

-3374 : データ辞書ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。

「[2326 : データ辞書ファイルはバインドされていますが、バインドする必要はありません。](#)」を参照してください。

-3375 : データ辞書ファイルは既にバインドされています。

「[2325 : データ辞書ファイルは既にバインドされています。](#)」を参照してください。

-3376 : データ辞書ファイルはバインドされていません。

「[2324 : データ辞書ファイルはバインドされていません。](#)」を参照してください。

-3383 : バウンド データベースの DDF ファイルを作成できません。

「[2316 : バウンド データベースの DDF ファイルを作成できません。](#)」を参照してください。

-3385 : DBNAMES.CFG ファイルを作成できません。

「[2314 : DBNAMES.CFG ファイルを作成できません。](#)」を参照してください。

-3386 : バウンド データベースはデータ辞書ファイルを共有できません。

「[2313 : バウンド データベースはデータ辞書ファイルを共有できません。](#)」を参照してください。

-3387 : バウンド データベースはテーブル データ ファイルを共有できません。

「[2312 : バウンド データベースはテーブル データ ファイルを共有できません。](#)」を参照してください。

-3390 : データベースは使用中です。

「[2309 : データベースは使用中です。](#)」を参照してください。

-3391 : 指定された RI フラグが不正です。

「[2308 : 指定された RI フラグが不正です。](#)」を参照してください。

-3392 : DBNAMES.CFG ファイルを開けません。

「[2307 : DBNAMES.CFG ファイルを開けません。](#)」を参照してください。

-3393 : DBNAMES.CFG を更新できませんでした。

「[2306 : DBNAMES.CFG を更新できませんでした。](#)」を参照してください。

-3394 : データ辞書またはデータ ファイルのロケーションに指定されたパスが不正です。

「[2305 : データ辞書またはデータ ファイルのロケーションに指定されたパスが不正です。](#)」を参照してください。

-3395 : データベース タイプが不正です。

「[2304 : データベース タイプが不正です。](#)」を参照してください。

-3396 : データベース名は一意である必要があります。指定された名前は既に存在します。

「[2303 : データベース名は一意である必要があります。指定された名前は既に存在します。](#)」を参照してください。

-3397 : バッファ長が不正です。

「[2302 : バッファ長が不正です。](#)」を参照してください。

-3398 : データベース名が不正です。

「[2301 : データベース名が不正です。](#)」を参照してください。

-3399 : これ以上データベース名は定義されていません。

「[2300 : これ以上データベース名は定義されていません。](#)」を参照してください。

-3401 : 列レベルの GRANT ステートメントが不正です。

列レベルでサポートされない権限の GRANT ステートメントを実行しようとする、このステータス コードが返されます。列レベルで有効な権限は SELECT、INSERT および UPDATE のみです。

有効な構文については、『*SQL Engine Reference*』の「[GRANT](#)」を参照してください。

-3473 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが、指定されたファイル名を有効なパスに変換できませんでした。

「[3126 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが、指定されたファイル名を有効なパスに変換できませんでした。](#)」を参照してください。

-3475 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのタスク テーブルがいっぱいです。

「[3124 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのタスク テーブルがいっぱいです。](#)」を参照してください。

-3480 : 使用可能な認証コンテキストがありません。

「[3119 : 使用可能な認証コンテキストがありません。](#)」を参照してください。

-3484 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで転送エラーが発生しました。

「[3115 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで転送エラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-3485 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのルーティング テーブルがいっぱいです。

「[3114 : Zen ネットワーク サービス レイヤーのルーティング テーブルがいっぱいです。](#)」を参照してください。

-3487 : ターゲット サーバーからの受信中にエラーが発生しました。

「[3112 : ターゲット サーバーからの受信中にエラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-3488 : ターゲット サーバーへの送信中にエラーが発生しました。

「[3111 : ターゲット サーバーへの送信中にエラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-3489 : ネットワーク レイヤーが接続されていません。

「[3110 : ネットワーク レイヤーが接続されていません。](#)」を参照してください。

-3491 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが不正なセッションを検出しました。

「3108 : Zen ネットワーク サービス レイヤーが不正なセッションを検出しました。」を参照してください。

-3492 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでメモリ不足になりました。

「3107 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでメモリ不足になりました。」を参照してください。

-3493 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで接続エラーが発生しました。

「3106 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで接続エラーが発生しました。」を参照してください。

-3494 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで利用可能な転送プロトコルがありません。

「3105 : Zen ネットワーク サービス レイヤーで利用可能な転送プロトコルがありません。」を参照してください。

-3495 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでアクセス権のエラーが発生しました。

「3104 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでアクセス権のエラーが発生しました。」を参照してください。

-3496 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでサーバー名が見つかりませんでした。

「3103 : Zen ネットワーク サービス レイヤーでサーバー名が見つかりませんでした。」を参照してください。

-3777 : 指定されたデータ バッファ長はデータ パケットとしては長すぎるため、MicroKernel ルーターがリモート エンジンにリクエストを送信できませんでした。

「3022 : 指定されたデータ バッファ長はデータ パケットとしては長すぎるため、MicroKernel ルーターがリモート エンジンにリクエストを送信できませんでした。」を参照してください。

-3778 : MicroKernel ルーターが不正にフォーマットされたデータ パケットを受信しました。

「3021 : MicroKernel ルーターが不正にフォーマットされたデータ パケットを受信しました。」を参照してください。

-3779 : MicroKernel のロード中にエラーが発生しました。

「3020 : MicroKernel のロード中にエラーが発生しました。」を参照してください。

-3780 : MicroKernel ルーターでセマフォ エラーが発生しました。

「3019 : MicroKernel ルーターでセマフォ エラーが発生しました。」を参照してください。

-3781 : ファイルは既に閉じています。

「3018 : ファイルは既に閉じています。」を参照してください。

-3782 : ローカル エンジンのデータ バッファが小さすぎます。

「3017 : ローカル エンジンのデータ バッファが小さすぎます。」を参照してください。

-3783 : MicroKernel ルーターで内部エラーが発生しました。

「3016 : MicroKernel ルーターで内部エラーが発生しました。」を参照してください。

-3784 : MicroKernel ルーターで初期化エラーが発生しました。

「[3015 : MicroKernel ルーターで初期化エラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-3785 : MicroKernel ルーターがエンジンを見つけられません。

「[3014 : MicroKernel ルーターがエンジンを見つけられません。](#)」を参照してください。

-3786 : ネットワーク コンポーネントがロードされていないため、MicroKernel ルーターはリモート エンジンにアクセスできません。

「[3013 : ネットワーク コンポーネントがロードされていないため、MicroKernel ルーターはリモート エンジンにアクセスできません。](#)」を参照してください。

-3787 : MicroKernel ルーターがローカル エンジンにアクセスできません。

「[3012 : MicroKernel ルーターがローカル エンジンにアクセスできません。](#)」を参照してください。

-3790 : NETInterface.DLL がロードされていません。

「[3009 : NETInterface.DLL がロードされていません。](#)」を参照してください。

-3791 : MicroKernel ルーターに対して無効な設定です。

「[3008 : MicroKernel ルーターに対して無効な設定です。](#)」を参照してください。

-3793 : MicroKernel ルーターが不正なセッションを検出しました。

「[3006 : MicroKernel ルーターが不正なセッションを検出しました。](#)」を参照してください。

-3794 : MicroKernel ルーターでオペレーティング システム エラーが発生しました。

「[3005 : MicroKernel ルーターでオペレーティング システム エラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-3795 : MicroKernel が MicroKernel ルーターに応答していません。

「[3004 : MicroKernel が MicroKernel ルーターに応答していません。](#)」を参照してください。

-3796 : MicroKernel ルーターが互換性のないネットワーク コンポーネントを検出しました。

「[3003 : MicroKernel ルーターが互換性のないネットワーク コンポーネントを検出しました。](#)」を参照してください。

-3797 : MicroKernel ルーターのリソース DLL が使用できません。

「[3002 : MicroKernel ルーターのリソース DLL が使用できません。](#)」を参照してください。

-3798 : MicroKernel ルーターへのローカル アクセスはできません。

「[3001 : MicroKernel ルーターへのローカル アクセスはできません。](#)」を参照してください。

-3799 : MicroKernel ルーターでメモリ割り当てエラーが発生しました。

「[3000 : MicroKernel ルーターでメモリ割り当てエラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-4001：指定されたプッシュダウン フィルターに比較演算子が記述されていません。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。テーブルには、そのテーブルと関連付けられた論理式を含むことができます。そのようなテーブル フィルターを「プッシュダウン フィルター」と呼びます。

プッシュダウン フィルターを指定する場合は、フィルターに比較演算子（等しい、より大きい、より小さい、など）も指定する必要があります。

-4002：指定されたプッシュダウン フィルターのフィールドがテーブルに見つかりません。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。テーブルには、そのテーブルと関連付けられた論理式を含むことができます。そのようなテーブル フィルターを「プッシュダウン フィルター」と呼びます。

列にプッシュダウン フィルターを指定する場合は、その列はフィルターを関連付けるテーブル内になければなりません。

-4003：指定されたプッシュダウン フィルターに不正な比較演算子が含まれています。

OCCURS、部分的 REDEFINES、または可変レコード レイアウトを含んでいる COBOL アプリケーションは、Cobolschemaexec ユーティリティを使用することによって、Btrieve データ ファイルへ SQL アクセスできるようになります（このユーティリティは、アプリケーションによるデータの解釈をリレーショナル エンジンに伝えます）。テーブルには、そのテーブルと関連付けられた論理式を含むことができます。そのようなテーブル フィルターを「プッシュダウン フィルター」と呼びます。

プッシュダウン フィルターを指定する場合は、フィルターに有効な比較演算子も指定する必要があります。有効な演算子には、より小さい、より大きい、等しい、以下、以上、等しくない、があります。

-4837：クライアント テーブルがいっぱいです。

「[162：クライアント テーブルがいっぱいです。](#)」を参照してください。

-4838：キーがユーザー数、セッション数、使用データの最大制限に達したか、もしくはキーの状態が " 期限切れ " または " 無効 " に変更されました。

「[161：キーがユーザー数、セッション数、使用データの最大制限に達したか、もしくはキーの状態が " 期限切れ " または " 無効 " に変更されました。](#)」を参照してください。

-4850：SQL トリガー

「[149：SQL トリガー](#)」を参照してください。

-4851：ロール フォワード エラーが発生しました。

「[148：ロール フォワード エラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-4852：ログ セグメントが見つかりません。

「[147：ログ セグメントが見つかりません。](#)」を参照してください。

-4853：重複システム キー。

「[146：重複システム キー。](#)」を参照してください。

-4856 : MicroKernel は、セキュリティ設定された MicroKernel データベース内のファイルに権限なしでアクセスすることを許可しません。

「143 : MicroKernel は、セキュリティ設定された MicroKernel データベース内のファイルに権限なしでアクセスすることを許可しません。」を参照してください。

-4860 : MicroKernel が、キー番号で受け付けられない値を検出しました。

「139 : MicroKernel が、キー番号で受け付けられない値を検出しました。」を参照してください。

-4861 : ヌル インジケータの位置が不正です。

「138 : ヌル インジケータの位置が不正です。」を参照してください。

-4863 : MicroKernel は指定されたオルタネート コレーティング シーケンスをファイル内に見つけられません。

「136 : MicroKernel は指定されたオルタネート コレーティング シーケンスをファイル内に見つけられません。」を参照してください。

-4864 : 指定されたインターナショナル ソート規則 (ISR) テーブルは破損しているか、または不正です。

「135 : 指定されたインターナショナル ソート規則 (ISR) テーブルは破損しているか、または不正です。」を参照してください。

-4865 : MicroKernel がインターナショナル ソート規則 (ISR) を読み取れません。

「134 : MicroKernel がインターナショナル ソート規則 (ISR) を読み取れません。」を参照してください。

-4866 : 同じデータ ファイルに 6 人以上のユーザーが同時にアクセスしようとしました。

「133 : 同じデータ ファイルに 6 人以上のユーザーが同時にアクセスしようとしました。」を参照してください。

-4867 : ファイルがサイズの制限に達しました。

「132 : ファイルがサイズの制限に達しました。」を参照してください。

-4869 : 使用可能なシステム ロックがありません。

「130 : 使用可能なシステム ロックがありません。」を参照してください。

-4884 : このファイルは、ゲートウェイとして機能している別の MicroKernel エンジンが所有しています。

「116 : このファイルは、ゲートウェイとして機能している別の MicroKernel エンジンが所有しています。」を参照してください。

-4885 : アーカイブ ログ ダンプ ファイルにアクセスできません。

「115 : アーカイブ ログ ダンプ ファイルにアクセスできません。」を参照してください。

-4886 : 指定されたファイルのアーカイブ ログが不正です。

「114 : 指定されたファイルのアーカイブ ログが不正です。」を参照してください。

-4887 : MicroKernel は、指定されたファイルのアーカイブ ログ ファイルを見つけられません。

「113 : MicroKernel は、指定されたファイルのアーカイブ ログ ファイルを開けません。」を参照してください。

-4888 : 指定されたファイルはほかのクライアントが使用しています。

「112 : 指定されたファイルはほかのクライアントが使用しています。」を参照してください。

-4889 : 指定されたファイル名は、アーカイブ ログ設定ファイル内に見つかりませんでした。

「111 : 指定されたファイル名は、アーカイブ ログ設定ファイル内に見つかりませんでした。」を参照してください。

-4890 : アーカイブ ログ設定ファイルにアクセスできません。

「110 : アーカイブ ログ設定ファイルにアクセスできません。」を参照してください。

-4891 : セマフォの作成時またはアクセス時に不明なエラーが発生しました。

「109 : セマフォの作成時またはアクセス時に不明なエラーが発生しました。」を参照してください。

-4892 : アプリケーションが、v6.0 より前のファイルで Chunk オペレーションを実行しようとしてしました。

「107 : アプリケーションが、v6.0 より前のファイルで Chunk オペレーションを実行しようとしてしました。」を参照してください。

-4893 : MicroKernel は Get Next Chunk オペレーションを実行できません。

「106 : MicroKernel は Get Next Chunk オペレーションを実行できません。」を参照してください。

-4894 : このファイルは、可変長部割り当てテーブル(VAT)付きで作成することはできません。

「105 : このファイルは、可変長部割り当てテーブル (VAT) 付きで作成することはできません。」を参照してください。

-4895 : MicroKernel がロケールを認識しません。

「104 : MicroKernel がロケールを認識しません。」を参照してください。

-4896 : チャンク オフセットが大きすぎます。

「103 : チャンク オフセットが大きすぎます。」を参照してください。

-4897 : スタック領域が不十分です。

「102 : スタック領域が不十分です。」を参照してください。

-4898 : オペレーティング システムのメモリが不十分です。

「101 : オペレーティング システムのメモリが不十分です。」を参照してください。

-4899 : 使用可能なキャッシュ バッファがありません。

「100 : 使用可能なキャッシュ バッファがありません。」を参照してください。

-4902 : データ バッファが小さすぎます。

「97 : データ バッファが小さすぎます。」を参照してください。

-4903 : 通信環境エラーが発生しました。

「96 : 通信環境エラーが発生しました。」を参照してください。

-4904 : セッションは既に無効になっています。

「95 : セッションは既に無効になっています。」を参照してください。

-4905 : アプリケーションでアクセス権のエラーが発生しました。

「94 : アプリケーションでアクセス権のエラーが発生しました。」を参照してください。

-4906 : レコードのロック タイプが一致していません。

「93 : レコードのロック タイプが一致していません。」を参照してください。

-4907 : トランザクション テーブルがいっぱいです。

「92 : トランザクション テーブルがいっぱいです。」を参照してください。

-4908 : アプリケーションでサーバー エラーが発生しました。

「91 : アプリケーションでサーバー エラーが発生しました。」を参照してください。

-4909 : リダイレクト デバイス テーブルがいっぱいです。

「90 : リダイレクト デバイス テーブルがいっぱいです。」を参照してください。

-4910 : 名前エラーが発生しました。

「89 : 名前エラーが発生しました。」を参照してください。

-4911 : アプリケーションでモードの不一致エラーが発生しました。

「88 : アプリケーションでモードの不一致エラーが発生しました。」を参照してください。

-4912 : ハンドル テーブルがいっぱいです。

「87 : ハンドル テーブルがいっぱいです。」を参照してください。

-4913 : ファイル テーブルがいっぱいです。

「86 : ファイル テーブルがいっぱいです。」を参照してください。

-4914 : ファイルはロックされています。

「85 : ファイルはロックされています。」を参照してください。

-4915 : レコードはロックされています。

「84 : レコードまたはページはロックされています。」を参照してください。

-4916 : MicroKernel は、トランザクション外で読み込まれたレコードを更新または削除しようとした。

「83 : MicroKernel は、トランザクション外で読み込まれたレコードを更新または削除しようとした。」を参照してください。

-4917 : MicroKernel がポジショニングを失いました。

「82 : MicroKernel がポジショニングを失いました。」を参照してください。

-4918 : MicroKernel でロック エラーが発生しました。

「81 : MicroKernel でロック エラーが発生しました。」を参照してください。

-4919 : MicroKernel でレコード レベルの矛盾が発生しました。

「80 : MicroKernel でレコード レベルの矛盾が発生しました。」を参照してください。

-4920 : プログラミング エラーが発生しました。

「79 : プログラミング エラーが発生しました。」を参照してください。

-4921 : MicroKernel がデッドロック状態を検出しました。

「78 : MicroKernel がデッドロック状態を検出しました。」を参照してください。

-4922 : アプリケーションでウェイト エラーが発生しました。

「77 : アプリケーションでウェイト エラーが発生しました。」を参照してください。

-4923 : 参照ファイルに矛盾があります。

「76 : 参照ファイルに矛盾があります。」を参照してください。

-4926 : RI 定義は同期が取れていません。

「73 : RI 定義は同期が取れていません。」を参照してください。

-4927 : MicroKernel は、RI 参照ファイルを開けません。

「72 : MicroKernel は、RI 参照ファイルを開けません。」を参照してください。

-4928 : RI 定義に違反があります。

「71 : RI 定義に違反があります。」を参照してください。

-4930 : Delete オペレーションが、破損したファイルに対して指定されました。

「69 : Delete オペレーションが、破損したファイルに対して指定されました。」を参照してください。

-4931 : MicroKernel は、RI のカスケード削除オペレーションを実行できません。

「68 : MicroKernel は、RI のカスケード削除オペレーションを実行できません。」を参照してください。

-4932 : MicroKernel が、SQL データ辞書ファイルを開けません。

「67 : MicroKernel が、SQL データ辞書ファイルを開けません。」を参照してください。

-4933 : オープンできるデータベースの最大数を超過しました。

「66 : オープンできるデータベースの最大数を超過しました。」を参照してください。

-4934 : フィールド オフセットが不正です。

「65 : フィールド オフセットが不正です。」を参照してください。

-4935 : フィルター制限に達しました。

「64 : フィルター制限に達しました。」を参照してください。

-4936 : Insert Extended オペレーションで指定されたデータ バッファ パラメーターが不正です。

「63 : Insert Extended オペレーションで指定されたデータ バッファ パラメーターが不正です。」を参照してください。

-4937 : ディスクリプターが不正です。

「62 : ディスクリプターが不正です。」を参照してください。

-4938 : 作業領域が小さすぎます。

「61 : 作業領域が小さすぎます。」を参照してください。

-4939 : 指定されたリジェクト カウントに達しました。

「60 : 指定されたリジェクト カウントに達しました。」を参照してください。

-4940 : 指定されたファイルは既に存在します。

「59 : 指定されたファイルは既に存在します。」を参照してください。

-4941 : 圧縮バッファ長が短すぎます。

「58 : 圧縮バッファ長が短すぎます。」を参照してください。

-4942 : 拡張メモリ エラーが発生しました。

「57 : 拡張メモリ エラーが発生しました。」を参照してください。

-4943 : インデックスが不完全です。

「56 : インデックスが不完全です。」を参照してください。

-4944 : アプリケーションが AUTOINCREMENT キーに不正な属性を設定しました。

「55 : アプリケーションが AUTOINCREMENT キーに不正な属性を設定しました。」を参照してください。

-4945 : レコードの可変長部分が破損しています。

「54 : レコードの可変長部分が破損しています。」を参照してください。

-4946 : 言語インターフェイスのバージョンが不正です。

「53 : 言語インターフェイスのバージョンが不正です。」を参照してください。

-4947 : キャッシュへの書き込み中にエラーが発生しました。

「[52 : キャッシュへの書き込み中にエラーが発生しました。](#)」を参照してください。

-4948 : オーナー ネームが不正です。

「[51 : オーナー ネームが不正です。](#)」を参照してください。

-4949 : ファイルのオーナーは既に設定されています。

「[50 : ファイルのオーナーは既に設定されています。](#)」を参照してください。

-4950 : 拡張キー タイプが不正です。

「[49 : 拡張キー タイプが不正です。](#)」を参照してください。

-4951 : オルタネート コレーティング シーケンスの定義が不正です。

「[48 : オルタネート コレーティング シーケンスの定義が不正です。](#)」を参照してください。

-4952 : 開いているファイルの数が許可される最大数を超えています。

「[47 : 開いているファイルの数が許可される最大数を超えています。](#)」を参照してください。

-4953 : 要求したファイルへのアクセスは拒否されました。

「[46 : 要求したファイルへのアクセスは拒否されました。](#)」を参照してください。

-4954 : 指定されたキー フラグが不正です。

「[45 : 指定されたキー フラグが不正です。](#)」を参照してください。

-4955 : 指定されたキー パスが不正です。

「[44 : 指定されたキー パスが不正です。](#)」を参照してください。

-4956 : 指定されたレコード アドレスが不正です。

「[43 : 指定されたレコード アドレスが不正です。](#)」を参照してください。

-4957 : 以前にアクセラレイティド モードで開いたファイルが閉じられていませんでした。

「[42 : 以前にアクセラレイティド モードで開いたファイルが閉じられていませんでした。](#)」を参照してください。

-4958 : 実行しようとした操作は MicroKernel では許可されていません。

「[41 : 実行しようとした操作は MicroKernel では許可されていません。](#)」を参照してください。

-4959 : ファイル アクセス要求が許容されるファイルの最大数を超えました。

「[40 : ファイル アクセス要求が許容されるファイルの最大数を超えました。](#)」を参照してください。

-4960 : End Transaction または Abort Transaction オペレーションを実行する前に、Begin Transaction オペレーションを実行する必要があります。

「[39 : End Transaction または Abort Transaction オペレーションを実行する前に、Begin Transaction オペレーションを実行する必要があります。](#)」を参照してください。

- 4961 : MicroKernel で、トランザクション制御ファイルの I/O エラーが発生しました。
「38 : MicroKernel で、トランザクション制御ファイルの I/O エラーが発生しました。」を参照してください。
- 4962 : 別のトランザクションが実行中です。
「37 : 別のトランザクションが実行中です。」を参照してください。
- 4964 : アプリケーションでディレクトリ エラーが発生しました。
「35 : アプリケーションでディレクトリ エラーが発生しました。」を参照してください。
- 4965 : 指定された拡張名が不正です。
「34 : 指定された拡張名が不正です。」を参照してください。
- 4966 : MicroKernel をアンロードできません。
「33 : MicroKernel をアンロードできません。」を参照してください。
- 4967 : ファイルを拡張できません。
「32 : ファイルを拡張できません。」を参照してください。
- 4968 : ファイルは既に拡張されています。
「31 : ファイルは既に拡張されています。」を参照してください。
- 4969 : 指定されたファイルは MicroKernel ファイルではありません。
「30 : 指定されたファイルは MicroKernel ファイルではありません。」を参照してください。
- 4970 : キー長が不正です。
「29 : キー長が不正です。」を参照してください。
- 4971 : レコード長が不正です。
「28 : レコード長が不正です。」を参照してください。
- 4972 : キー ポジションが不正です。
「27 : キー ポジションが不正です。」を参照してください。
- 4973 : 指定されたキーの数が不正です。
「26 : 指定されたキーの数が不正です。」を参照してください。
- 4974 : アプリケーションが指定されたファイルを作成できません。
「25 : アプリケーションが指定されたファイルを作成できません。」を参照してください。
- 4975 : ページ サイズまたはデータ バッファー サイズが不正です。
「24 : ページ サイズまたはデータ バッファー サイズが不正です。」を参照してください。

- 4976 : ポジション ブロック パラメーターの長さが 128 バイトではありません。
「23 : ポジション ブロック パラメーターの長さが 128 バイトではありません。」を参照してください。
- 4977 : データ バッファー パラメーターが短すぎます。
「22 : データ バッファー パラメーターが短すぎます。」を参照してください。
- 4978 : キー バッファー パラメーターが短すぎます。
「21 : キー バッファー パラメーターが短すぎます。」を参照してください。
- 4979 : MicroKernel または Btrieve リクエスターが非アクティブです。
「20 : MicroKernel または Btrieve リクエスターが非アクティブです。」を参照してください。
- 4980 : アプリケーションで修復不能なエラーが発生しました。
「19 : アプリケーションで修復不能なエラーが発生しました。」を参照してください。
- 4981 : ディスクがいっぱいです。
「18 : ディスクがいっぱいです。」を参照してください。
- 4983 : アプリケーションで拡張エラーが発生しました。
「16 : アプリケーションで拡張エラーが発生しました。」を参照してください。
- 4984 : アプリケーションで、プリイメージ中に I/O エラーが発生しました。
「15 : アプリケーションで、プリイメージ中に I/O エラーが発生しました。」を参照してください。
- 4985 : MicroKernel はプリイメージ ファイルを作成できないか、または開けません。
「14 : MicroKernel はプリイメージ ファイルを作成できないか、または開けません。」を参照してください。
- 4986 : MicroKernel は拡張ファイルのエクステンション ファイルを開けませんでした。
「13 : MicroKernel は拡張ファイルのエクステンション ファイルを開けませんでした。」を参照してください。
- 4987 : MicroKernel は指定されたファイルを見つけられません。
「12 : MicroKernel は指定されたファイルを見つけられません。」を参照してください。
- 4988 : 指定されたファイル名は不正です。
「11 : 指定されたファイル名は不正です。」を参照してください。
- 4989 : キー フィールドは変更できません。
「10 : キー フィールドは変更できません。」を参照してください。
- 4990 : オペレーションが EOF (end-of-file) を検出しました。
「9 : オペレーションが EOF (end-of-file) を検出しました。」を参照してください。

-4991 : 現在のポジションが不正です。

「8 : 現在のポジションが不正です。」を参照してください。

-4992 : キー番号が変更されました。

「7 : キー番号が変更されました。」を参照してください。

-4993 : キー番号パラメーターが不正です。

「6 : キー番号パラメーターが不正です。」を参照してください。

-4994 : レコードのキー フィールドに重複するキー値があります。

既に存在するストアド プロシージャと同じ名前のストアド プロシージャを作成しようとしてしました。次の手順に従って回復してください。

- 1 ストアド プロシージャの名前を変更します。
- 2 操作を再実行してください。
- 3 SELECT * from X\$proc# ステートメントを実行して、定義済みのストアド プロシージャのリストを取得します。このリストで、プロシージャが実際に作成されたかどうかを確認することができます。

「5 : レコードのキー フィールドに重複するキー値があります。」も参照してください。

-4995 : アプリケーションがキー値を見つけられません。

「4 : アプリケーションがキー値を見つけられません。」を参照してください。

-4996 : ファイルが開いていません。

「3 : ファイルが開いていません。」を参照してください。

-4997 : アプリケーションで I/O エラーが発生しました。

「2 : アプリケーションで I/O エラーが発生しました。」を参照してください。

-4998 : オペレーション パラメーターが不正です。

「1 : オペレーション パラメーターが不正です。」を参照してください。

-5022 : 選択リストと RETURNS 句で列が一致しません。

選択リストに指定した列の数とデータ型は、RETURNS 句の列の数とデータ型に一致していなければなりません。たとえば、次のコードでは、RETURNS 句が 1 つの列を指定しているのに対し、SELECT リストには 2 つの列があるため、エラー -5022 が返されます。

```
CREATE PROCEDURE p1 () RETURNS (c INTEGER) AS SELECT c1, c2 FROM t1;  
CALL p1()
```

-5025 : ユーザー定義関数では、IN パラメーター タイプのみ使用できます。

ユーザー定義関数 (UDF) は IN パラメーターの使用のみを許可しています。OUT および INOUT タイプのパラメーターは使用できません。たとえば、次のコードはパラメーター "a" が "out" として指定されているため、エラーが返されます。

```
CREATE FUNCTION myfunc(OUT :a INTEGER)  
RETURNS INTEGER  
AS
```

```
BEGIN
    RETURN 1;
END;
```

-5027：構文が不正です。関数の最後のステートメントは return ステートメントでなければなりません。

ユーザー定義関数 (UDF) は、関数定義の最後のステートメントとして RETURN ステートメントを含んでいる必要があります。

-5031：デフォルト値が、作成される UDF と同じ UDF 名を持つことはできません。

ユーザー定義関数 (UDF) のデフォルト パラメーターの名前を、UDF 自体の名前と同じにすることはできません。たとえば、次のコードでは UDF 名とパラメーター名のどちらも "myfunc" なので、これは正しくありません。

```
CREATE FUNCTION myfunc(:a INT DEFAULT myfunc(1)) RETURNS INTEGER
AS
BEGIN
    RETURN :a;
END;
```

-5032：UDF の RETURN ステートメントには引数が 1 つなければなりません。

ユーザー定義関数 (UDF) は常に値を返すため、UDF 内の RETURN ステートメントには引数を指定する必要があります。

-5099：ストアド プロシージャに関連するエラー状況

ストアド プロシージャから次のエラー状況のいずれかが返されました。

エラー状況	説明
テーブル名をデータベース名で限定できません。	新しいテーブルも既存のテーブルもコンテキストが現在のデータベースです。
ビュー名をデータベース名で限定できません。	新しいビューも既存のビューもコンテキストが現在のデータベースです。
プロシージャ名をデータベース名で限定できません。	新しいプロシージャも既存のプロシージャもコンテキストが現在のデータベースです。
関数名をデータベース名で限定できません。	新しい関数も既存の関数もコンテキストが現在のデータベースです。
インデックス名を変更するには、テーブル名の修飾子が必要です。	インデックスの名前を変更する場合は、そのインデックスが属しているテーブルを指定しなければなりません。
トリガー名を変更するには、テーブル名の修飾子が必要です。	トリガーの名前を変更する場合は、そのトリガーが属しているテーブルを指定しなければなりません。

エラー状況	説明
列名を変更するには、テーブル名の修飾子が必要です。	列の名前を変更する場合は、その列が属しているテーブルを指定しなければなりません。
オブジェクトの種類が不正です。次のいずれかの種類でなければなりません。列、関数、インデックス、プロシージャ、テーブル、トリガー、またはビュー。	名前の変更が許可されていない種類のオブジェクトの名前を変更しようとしてしました。許可されている種類は、列、関数、インデックス、プロシージャ、テーブル、トリガー、またはビューです。

-5202：レコードはロックされています。

別のユーザーによってロックされているレコードにアクセスしようとしてしました。レコードがアンロックされるまで待ち、その後で再試行してください。

-5204：テーブルが開いていません。

MicroKernel はテーブルを開くことができませんでした。適切なアクセス権とテーブル権限があることを確認してください。

-5208：日付が無効です。

日付の書式が不正です。ODBC の正しい日付書式を確認し、再試行してください。

-5219：トランスレーションは失敗しました。

ODBC ドライバーは、データ ソースとアプリケーション間でのデータの変換に失敗しました。アプリケーションが SQLSetConnectOption を使用してデフォルトのトランスレーター DLL を無効にしていないか確認してください。

-5220：プロシージャ名が不正です。

指定されたプロシージャ名は存在しません。プロシージャの名前をチェックして再試行してください。

-5221：述語名が不正です。

ODBC ドライバーはこの述語をサポートしていません。有効な述語については、『*SQL Engine Reference*』を参照してください。

-5222：コード ページの値が不正です。

ODBC 設定ファイル内のコード ページの値が不正です。有効な設定値については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

-5223：ユーザー定義関数に組み込み関数と同じ名前を付けることはできません。

ユーザー定義関数（UDF）の名前を、あらかじめ定義されているスカラー関数の名前と同じにすることはできません。スカラー関数の説明については、『*SQL Engine Reference*』の「[スカラー関数](#)」を参照してください。

-5225：組み込み関数または集計関数は削除できません。

集計関数やあらかじめ定義されているスカラー関数を削除することはできません。集計関数には、COUNT、AVG、SUM、MAX、MIN および DISTINCT があります。スカラー関数の説明については、『*SQL Engine Reference*』の「[スカラー関数](#)」を参照してください。

-5226 : CALL ステートメントを使ってユーザー定義関数を呼び出すことはできません。

ユーザー定義関数 (UDF) は CALL ステートメントでは呼び出せません。UDF の呼び出しには SELECT ステートメントを使用する必要があります。

-5229 : ユーザー定義関数またはスカラー関数が不正です。

ユーザー定義関数 (UDF) に指定された名前は辞書に登録されていません。既存の UDF 名を指定してから、操作を再試行してください。

-5230 : そのようなストアド プロシージャはありません。

ストアド プロシージャに指定した名前は辞書に登録されていません。既存のストアド プロシージャ名を指定してから、操作を再試行してください。

-5231 : ストアド プロシージャは既に存在します。

ストアド プロシージャに指定した名前は辞書に登録されています。別の名前を指定するか、現在のストアド プロシージャ定義を削除してから、操作を再試行してください。

-5232 : UDF は既に存在します。

ユーザー定義関数 (UDF) に指定された名前は辞書に登録されています。別の名前を指定するか、現在の UDF 定義を削除してから、操作を再試行してください。

-5233 : データベース修飾子のみ許可されます。

テーブル、ビュー、プロシージャ、および関数はデータベースとのみ関連付けることができます。トリガー、インデックス、および列は、データベースおよびテーブルと関連付けることができます。インデックス名はデータベース名とテーブル名を使って修飾できるため、次のステートメントは許可されます。

```
ALTER INDEX RENAME database1:table1:index1 TO index2
```

しかし、次のステートメントでは、ビュー名はデータベース名でしか修飾できないためにエラーが発生します。

```
ALTER VIEW RENAME database1:table1:view1 to view2
```

許可されるステートメントは、ALTER VIEW RENAME database1:view1 to view2 または ALTER VIEW RENAME view1 to view2 です。

-5235 : ドメイン認証に失敗しました。

この全般的なエラーは、使用する認証がドメイン認証の場合に返されることがあります。原因として最も可能性が高いのは、ドメイン ユーザーを認証するとともにドメイン グループへのユーザーの割り当てを取得するのに使用される Active Directory サービス インターフェイス (ADSI) 呼び出しの失敗です。

-5236 : ドメインのユーザー名またはパスワードが正しくありません。

このエラーが返される可能性があるのは、使用する認証がドメイン認証の場合に、ドメイン ユーザーが見つからなかったり、パスワードが正しくなかったりするときです。

-5237 : ドメイン ユーザーはどの Zen データベース グループにも関連付けられていません。

このエラーが返される可能性があるのは、使用する認証がドメイン認証の場合に、ドメイン ユーザーがデータベース内の Zen グループに関連付けられていないときです。ドメイン ユーザーは、アクセスしようとしているデータベース内の Zen グループに関連付けられた AD グループに所属している必要があります。

-5238 : ドメイン ユーザーは複数の Zen データベース グループに関連付けられています。

このエラーが返される可能性があるのは、使用する認証がドメイン認証の場合に、ドメイン ユーザーがデータベース内の複数の Zen グループに所属しているときです。ドメイン ユーザーは、アクセスしようとしているデータベース内のただ 1 つの Zen グループに関連付けられた AD グループに所属している必要があります。

-5239 : ドメイン認証は Windows プラットフォームでのみ有効です

Windows 以外のプラットフォームで認証としてドメイン認証を使用しようとすると、このエラーが返されることがあります。

-5240 : RPC サーバーは、ユーザー名とパスワードの確認に利用できません。ログインをやり直してください。

このエラーが返される可能性があるのは、使用する認証がドメイン認証の場合に、RPC サーバーを利用できない (Windows エラー 1722) のときです。このエラーは、Zen が AD ドメインをクエリする場合に発生することがあります。ログインをやり直してください。

-5241 : ドメイン サーバーに接続するときにセッションの資格情報の競合エラーが発生しました

このエラーが返される可能性があるのは、使用する認証がドメイン認証の場合にドメイン サーバーが呼び出されたときに、セッションの資格情報が競合している (Windows エラー 1219) ことによるものです。1 人のユーザーが複数のユーザー名を使ってサーバーまたは共有リソースに複数の接続を行うことは許可されていません。サーバーまたは共有リソースへの既存の接続をすべて切断し、やり直してください。

-5243 : 指定された列番号は有効ではありません。

ALTER TABLE で使用する PSQL_MOVE キーワードには、ゼロより大きく、列の総数よりも小さい値で列の位置を指定する必要があります。たとえば、テーブル t1 には col1 と col2 の 2 つの列だけがあるとします。次のステートメントはどちらもエラーを返します。

```
ALTER TABLE t1 PSQL_MOVE col1 to 0
ALTER TABLE t1 PSQL_MOVE col1 to 3
```

最初のステートメントは列を位置 0 へ移動しようとしています。2 番目のステートメントは列を位置 3 へ移動しようしていますが、これは列の総数である 2 よりも大きい数値です。

-5245 : このメタデータ バージョンでは、プロシージャ / ビューの権限はサポートされていません。

ビューおよびストアド プロシージャ上の権限は、V2 メタデータを使用するデータベース上のみで許可されます。

-5247 : この機能は、現メタデータ バージョンではサポートされていません。

信頼されたビューおよびストアド プロシージャ、信頼されないビューおよびストアド プロシージャのような機能は、V2 メタデータを使用するデータベース上のみで許可されます。

-5248 : 部分列が不正です。

部分インデックスの最後 (または唯一) の列が CHAR データ型または VARCHAR データ型ではありません。

-100 ~ -199

情報ステータス コード

このセクションでは、MicroKernel から返される可能性のある情報ステータス コードについて説明します。これらのステータス コードは負の値として返されます。

-101 : SET ステートメントが完了しました。

次の各ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

表 2 SET ステートメント

SET SECURITY	SET OWNER	SET VARIABLE	SET TRUENULLCREATE
SET ROWCOUNT	SET TIME ZONE	SET DECIMALSEPARATORCOMMA	

MicroKernel は要求された変更を行いました。ただし、トランザクション中に SET OWNER ステートメントを発行した場合、新しいトランザクションを開始するまでその変更は有効になりません。

-102 : INSERT ステートメントが完了しました。

MicroKernel は指定された行をテーブルに追加しました。

-103 : UPDATE ステートメントが完了しました。

MicroKernel はテーブルに対して指定の変更を行いました。

-104 : DELETE ステートメントが完了しました。

MicroKernel は指定された行をテーブルから削除しました。

-105 : CREATE ステートメントが完了しました。

次の各ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

表 3 CREATE ステートメント

CREATE PROCEDURE	CREATE TABLE
CREATE GROUP	CREATE TRIGGER
CREATE INDEX	CREATE VIEW

MicroKernel によって、グループ、インデックス、ストアド プロシージャ、テーブル、トリガー、またはビューがデータ辞書に正常に追加されました。

-106 : ALTER TABLE ステートメントが完了しました。

MicroKernel はテーブルの辞書定義に対して要求された変更を行いました。IN DICTIONARY キーワードを指定せずに列（主キーまたは外部キーを含みます）を変更した場合、データ ファイルも変更されました。

-107 : DROP ステートメントが完了しました。

次の各ステートメントは、実行を完了すると、このステータスコードを返します。

表 4 DROP ステートメント

DROP PROCEDURE	DROP TABLE
DROP GROUP	DROP TRIGGER
DROP INDEX	DROP VIEW

MicroKernel によって、グループ、インデックス、ストアド プロシージャ、テーブル、トリガー、またはビューがデータ辞書から正常に削除されました（テーブルを削除すると、そのテーブルのデータ ファイルも削除されます）。

-108 : ステートメント内に置換されない代替変数があるため実行できません。

現在の SQL ステートメントには代替変数が含まれています。したがって、各変数の値を指定しなければそのステートメントを実行することはできません。代替変数を許可するアプリケーションを使用している場合は、そのアプリケーションに付属しているマニュアルを参照して、代替変数をどのように使用するかを確認してください。

-109 : ビューにはこれ以上レコードがありません。

ビューの先頭または末尾に達しました。

-110 : GRANT ステートメントが完了しました。

MicroKernel は、指定された権限をユーザーまたはグループに割り当てました。

-111 : REVOKE ステートメントが完了しました。

MicroKernel は、指定された権限をユーザーまたはグループから削除しました。

-112 : START TRANSACTION ステートメントが完了しました。

MicroKernel がトランザクションを開始しました。その後に発行されるすべてのステートメントは、COMMIT WORK または ROLLBACK WORK ステートメントが発行されるまで、このトランザクションの一部になります。セーブポイントについては、SAVEPOINT ラベルを明示的に解除するかそのラベルまでロールバックするまで、あるいは内部でセーブポイントがネストされている外側のトランザクションすべてが末尾に達するまで、SAVEPOINT ラベルは有効なまま残ります。

-113 : COMMIT WORK ステートメントが完了しました。

MicroKernel はトランザクションが行ったデータ テーブルの変更をコミットしました。ROLLBACK WORK ステートメントを使用しても、変更を元に戻すことはできません。RELEASE SAVEPOINT ステートメントの場合、セーブポイントの宣言以降に行われた変更は個別にロールバックできなくなります。これらの変更は、外側のトランザクションの一部としてコミットまたはロールバックするしかありません。

-114 : ROLLBACK WORK ステートメントが完了しました。

MicroKernel はトランザクション中に行われた変更を元に戻しました。ただし、トランザクション処理の影響を受けないオペレーションによって行われた変更は例外です。トランザクションで次のいずれかのオペレーションを実行した場合、MicroKernel はそのオペレーションを完了しますが、結果はロールバックできません。

- 辞書定義の作成または変更を行うオペレーション。したがって、ALTER TABLE、CREATE GROUP、CREATE INDEX、CREATE PROCEDURE、CREATE TABLE、CREATE TRIGGER、および CREATE VIEW の各ステートメントの結果はロールバックできません。
- 辞書定義を削除するオペレーション。したがって、DROP GROUP、DROP INDEX、DROP PROCEDURE、DROP TABLE、DROP TRIGGER および DROP VIEW の各ステートメントの結果はロールバックできません。
- セキュリティ権の割り当てまたは削除を行うオペレーション。したがって、GRANT ステートメントおよび REVOKE ステートメントの結果をロールバックすることはできません。

ROLLBACK TO SAVEPOINT ステートメントの場合、セーブポイントの宣言以降に行われたすべての変更がロールバックされます。

-115 : MicroKernel はストアド SQL ステートメントのリコールに成功しました。

このステータス コードは、MicroKernel v4.0 で使用されなくなりました。ただし、v3.01 互換モードを使用している場合を除きます。

-116 : MicroKernel はストアド SQL ステートメントを正常に実行しました。

このステータス コードは、MicroKernel v4.0 で使用されなくなりました。ただし、v3.01 互換モードを使用している場合を除きます。v4.0 以降の MicroKernel では、ストアド ステートメントの代わりにストアド プロシージャが使用されます。

MicroKernel は、実行に送信されたストアド ステートメントを実行しました。

-118 : DECLARE ステートメントが完了しました。

次の各ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

表 5 DECLARE ステートメント

DECLARE CURSOR	DECLARE VARIABLE
DECLARE CONDITION	

DECLARE ステートメントを発行した場合、MicroKernel はユーザーが定義したカーソル、変数、または条件の作成を完了しました。

-119 : SET 代入ステートメントが完了しました。

SET 変数=式ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

-120 : OPEN ステートメントが完了しました。

OPEN CURSOR ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

-121 : CLOSE ステートメントが完了しました。

CLOSE CURSOR ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

-122 : FETCH ステートメントが完了しました。

FETCH ステートメントは、実行を完了すると、このステータス コードを返します。

-123 : 位置付け UPDATE ステートメントが完了しました。

UPDATE [テーブル参照] SET set 句 WHERE CURRENT OF ステートメントは、実行を完了するとこのステータス コードを返します。

-124 : 位置付け DELETE ステートメントが完了しました。

DELETE [FROM テーブル参照] WHERE CURRENT OF カーソル名 ステートメントは、実行を完了するとこのステータスコードを返します。

-125 : ストアド プロシージャの CALL ステートメントが完了しました。

CALL ステートメントは、正常に終了するとこのステータスコードを返します。このステータスコードは、ストアド プロシージャが正常に終了したことを示しています。

Zen メッセージのリファレンス

Zen ではユーザーに対してさまざまなメッセージを返す可能性があります。ここでは、メッセージはカテゴリ別にアルファベット順で記載されています。記載されているメッセージの中には、Zen 製品以外のユーティリティによって生成されるものもあります。

メッセージはステータス コード（「[ステータス コード](#)」を参照）とは異なります。メッセージはユーティリティまたは特定のコンポーネントによりエンド ユーザーに返され、通常はプレフィックスと番号で始まります。たとえば、次のようになります。「[MKDE-16 : MicroKernel エンジン](#)をロードするにはメモリが不十分です。」

次の例のように、メッセージの中にはステータス コードを参照するものもあります。

INDEX.DDF アクセス エラー。ステータス = *nn*

ステータス コードは特定のコンポーネントと関連しており、エラーの性質と其原因により異なります。*nn* または *xx* の値は、ソフトウェアから返される番号を示しており（たとえば、ステータス コード、オペレーション コード、またはレコード数）、*xxxx* はソフトウェアから返される名前を示しています（たとえば、ファイル名、データ型、キー タイプ、またはコマンド）。

メッセージは、生成元のコンポーネントに従って配列されています。以下の表で、メッセージの各タイプに対応するプレフィックスの一覧を示します。

表 6 メッセージ グループ

プレフィックス	コードのタイプ
(なし)	「一般的なメッセージ」
BREQUTIL	「 リクエスター ユーティリティ のメッセージ」
BUTIL	「 Maintenance ユーティリティ のメッセージ」
MKDE	「 MicroKernel エンジン メッセージ」
REBUILD	「 Rebuild ユーティリティ のメッセージ」
VSS	「 VSS Writer 」

(プレフィックスなし)

一般的なメッセージ

次のメッセージは 2 つ以上のユーティリティまたはコンポーネントにより返されることがあります。これらのメッセージには先頭にコンポーネント プレフィックスと番号が付きません。

Bfloat および Float フィールドは 4 または 8 バイトである必要があります。

FLOAT または BFLOAT 列を 4 バイトまたは 8 バイト以外のサイズで定義しました。列のサイズを 4 バイトまたは 8 バイトに変更してください。

ビューでは、列レベルの権限は許可されません。

ビューの個々の列に対する権限はサポートされません。ビュー全体に対して権限を GRANT または REVOKE することができます。

1 回目と 2 回目のパスワード入力的一致しません。再入力してください。

2 回目に入力したパスワードが最初に指定したパスワードと異なります。再度パスワードを指定して確認してください。

パラメーターが不適切です。

DOS クライアント マシンでクライアント リクエスターをロードしているときにエラーが発生すると、このメッセージが返されます。無効な環境設定オプションが指定されました。設定プロパティの詳細および環境設定オプションの指定方法は、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

メモリが不十分です。

DOS クライアント マシンでクライアント リクエスターをロードしているときにエラーが発生すると、このメッセージが返されます。リクエスターは指定された環境設定オプションに十分なメモリを割り当てることができません。実行するプログラムをすべてロードするための十分なメモリがクライアントにあることを確認してください。

ロード ファイルの形式が不正。レコード終端のマーカが見つかりません。

Maintenance ユーティリティ (BUTIL) はシーケンシャル ロード ファイルの中で無効なレコード区切り文字を見つけました。ロード ファイルの各レコードの末尾はキャリッジ リターン / ライン フィードでなければなりません。通常このエラーはシーケンシャル レコードの先頭に指定された長さに誤りがあるときに発生します。

ローカル エンジンには既にロードされています。

DOS クライアント マシンでクライアント リクエスターをロードしているときにエラーが発生すると、このメッセージが返されます。ローカル エンジン (XQL v2.11 以前) がロードされています。古いローカル エンジンと新しいリクエスターを同時にロードすることはできません。

DOS 3.1 以上が必要です。

DOS クライアント マシンでクライアント リクエスターをロードしているときにエラーが発生すると、このメッセージが返されます。これらのリクエスターには、DOS v 3.1 以降が必要です。

Execute As 句では、Master のユーザー名のみが指定できます。

信頼されたビューまたはストアド プロシージャの作成で使用する "WITH EXECUTE AS 'Master'" 句では、ユーザー名として "Master" のみが指定できます。その他のユーザー名は許可されません。

リダイレクト リストのサイズが不十分です。

DOS クライアント マシンで SQL リクエスターをロードしているときにエラーが発生すると、このメッセージが返されます。リクエスターはすべてのリダイレクト デバイスをその内部転送リストに格納できません。/R 環境設定オプションの値を大きくしてください。

EXECUTE 権限はテーブルに指定不可

テーブル権限には EXECUTE は含まれません。

REFERENCES または EXECUTE 権限はビューに指定不可

ビュー権限には REFERENCES および EXECUTE は含まれません。

プロシージャに SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE または REFERENCES 権限は指定不可

ストアド プロシージャの権限には SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE および REFERENCES は含まれません。

SQL リクエスターは既にロードされています。

DOS クライアントに既に SQL リクエスターがロードされている状態でリクエスターをロードしようとする、このメッセージが返されます。

BREQUTIL

リクエスター ユーティリティのメッセージ

このセクションでは、クライアント リクエスター ユーティリティが生成するメッセージの一覧を示します。

BREQUTIL-8 : MicroKernel または MKDE リクエスターがロードされていません。

MKDE オペレーションを実行するには、MicroKernel または MKDE リクエスターを先にロードしておく必要があります。

BREQUTIL-9 : MKDE オペレーション *nn* は失敗しました。該当する MKDE ステータス コードは *nn* です。

ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。この *nn* は、ステータス コードの番号です。

BREQUTIL-16 : MicroKernel または MKDE リクエスターは MKDE がロードされている間メモリから削除できません。

MicroKernel または MKDE リクエスターをアンロードする場合は、先に MKDE をアンロードします。

BUTIL

Maintenance ユーティリティのメッセージ

次のメッセージは Maintenance ユーティリティに固有のものです。

BUTIL-1：メッセージ ファイルの初期化に失敗しました。

このメッセージは DOS の BUTIL.EXE から返されます。このユーティリティで使用するメッセージが含まれた BUTILDOS.MSG ファイルを見つけることができませんでした。

BUTIL-2：メッセージ ファイルの初期化に失敗しました。BUTIL は BTIUTILD.MSG にアクセスできませんでした。

このメッセージは DOS の BUTIL.EXE から返されます。このユーティリティで使用するメッセージが含まれる BTIUTILD.MSG ファイルを見つけることができませんでした。Btrieve for DOS のトランザクショナル エンジンが正しくインストールされていることを確認してください。

BUTIL-6：BUTIL コマンドが不正です。

入力したコマンド構文は正しくありません。コマンドを再入力する前に構文を確認してください。

BUTIL-8：コマンドは完了しましたが、いくつかエラーが発生しています。

多数の MicroKernel オペレーションを行うコマンドを実行したときにエラーが発生しました。これらのコマンドには COPY、LOAD、CLONE が含まれます。このメッセージと共に、問題の原因を特定するために役立つ追加のメッセージが表示されます。

BUTIL-9：修復不可能なエラーのため、コマンドを完了できませんでした。

コマンドを再入力する前に、入力した構文が正しいかどうかを確認してください。このメッセージと共に、問題の原因を特定するために役立つ追加のメッセージが表示されます。

BUTIL-10：コマンド ラインに構文エラーがあります。

入力したコマンド構文は正しくありません。コマンドを再入力する前に構文を確認してください。

BUTIL-11：コマンド ラインにインデックス ファイルの指定が必要です。

Maintenance ユーティリティに BUTIL -INDEX または -SAVE コマンド (Y パラメーターを設定) を指定した場合、外部インデックス ファイルのフルパス名を指定する必要があります。

BUTIL-12：コマンド ラインにキー番号の指定が必要です。

Maintenance ユーティリティに DROP コマンドまたは SAVE コマンド (N パラメーターを設定) を指定した場合、削除したいキーの番号、またはデータ ファイルの保存に使用するキーの番号を指定する必要があります。

BUTIL-13：キー タイプ xxxx のキー サイズが不正です。

ディスクリプション ファイルで、特定のキーのキー長に指定した値が正しくありません。キー長のそれぞれの値が、対応するキー タイプ要素に適切であることを確認してください。

BUTIL-14：エラーが発生したファイルは <ファイル名> です。

これはエラーの原因となったファイルを示す情報メッセージです。

BUTIL-15 : ディスクリプション ファイルのキー セグメント ディスクリプター xxx でエラーが発生しました。

Maintenance ユーティリティがディスクリプション ファイルのキー セグメント ディスクリプター部分を読み込もうとしたときにエラーが発生しました。指定されたキー セグメントを記述する要素が有効であることを確認してください。

BUTIL-16 : BUTIL はディスクリプション ファイルを開けませんでした。

CREATE、INDEX、または SINDEK コマンドを再入力する前に、ファイルが存在するか、また正しいフル パス名が指定されているかを確認してください。

BUTIL-18 : シーケンシャル ファイルのアクセス中にエラーが発生しました。

ソース ファイルが有効であることを確認してください。

BUTIL-19 : BUTIL はオルタネート コレーティング シーケンス (ACS) ファイルを開けませんでした。

ディスクリプション ファイルでオルタネート コレーティング シーケンス (ACS) ファイル名の要素に有効なパス名が割り当てられていることを確認してください。

BUTIL-20 : オルタネート コレーティング シーケンス ファイルのアクセス中にエラーが発生しました。

オルタネート コレーティング シーケンス ファイルの情報が正しい形式で記述されていることを確認してください。

BUTIL-21 : ファイル バージョンが 6.0 より前です。

RECOVER コマンドは Btrieve v5.x ファイルのデータを回復できません。

BUTIL-23 : リクエスターに指定された /D パラメーターが小さすぎるので、BUTIL はレコード全体を取得できません。BUTIL は nn バイトのみを書き込んでいます。

Maintenance ユーティリティは /D オプションで指定されているバイト数のみを書き込んでいます。ユーティリティがレコードに含まれているすべてのバイトを書き込むようにするには、少なくとも対象となるレコードと同じ長さを /D オプションの値に指定します。

BUTIL-25 : BUTIL に指定された /D パラメーターの値が小さすぎるので、BUTIL はレコードを取得できません。

リクエスターの /D オプションで不正な値を指定しました。設定プロパティを開いて、指定値を大きくします。

BUTIL-26 : データ バッファが小さすぎるので、レコードを格納できません。

データ バッファが小さすぎてデータを保持できないため、MicroKernel はデータ バッファ内のデータを返すことができません。設定プロパティを開いて、最大レコード サイズ環境設定オプションの設定値を大きくします。

BUTIL-27 : 可変ページのアクセス中にエラーが発生しました。BUTIL は可変ページの取得可能な部分を書き込んでいます。

可変長レコードを含むファイルの回復中にエラーが発生しました。ファイルは破損しています。

BUTIL-30 : キー ポジションはレコード長を超えることはできません。

指定されたキー ポジションの範囲が不正です。MicroKernel エンジン の呼び出しで指定するキー ポジションはレコード長の範囲内である必要があります。たとえば、100 バイトの長さのレコードであれば 50 というキー ポジションは正しい範囲内にあります。しかし、キー ポジションが 150 だと正しい範囲内ではありません。

BUTIL-31 : キー ポジションとキー長の合計がレコード長を超えることはできません。

指定されたキー ポジションの範囲が不正です。あるキーのキー ポジションとその長さの合計がレコード長を超えることはできません。キーのポジションとその長さの合計がレコード長を超えないようにキーが定義されていることを確認してください。

BUTIL-32 : キー タイプ xxxx のキー長は偶数でなければなりません。

キー タイプに不正なキー長が指定されました。キー タイプによっては偶数のバイト数が必要な場合があります。有効なキー長の要素を指定してください。

BUTIL-36: ページ サイズは 512 から 4,096 までの数値で、512 の倍数でなければなりません。

指定されたページ サイズが不正です。次の表で示すように、ファイルのバージョンに基づいてページ サイズを指定してください。

ページ サイズ (バイト数)	ファイル バージョン			
	9.0 より前	9.0	9.5	13.0
512	X	X		
1024	X	X	X	
1536	X	X		
2048	X	X	X	
2560	X	X		
3072	X	X		
3584	X	X		
4096	X	X	X	X
8192		X	X	X
16384			X	X

BUTIL-37 : レコード長はページ サイズを超えることはできません。

指定したレコード長が不正です。ディスクリプション ファイルで、レコード長要素に指定したレコード長が、ページ サイズ要素に指定したページ サイズを超えています。ページ サイズより小さいレコード長を指定するか、ページ サイズを大きくしてください。

BUTIL-38 : レコード長は 4 以上、4,096 以下でなければなりません。

次の表で示すように、4 から最大値の間でレコード長を指定してください。

ファイル バージョン	最大レコード長 (バイト)
5.x	4096
6.x または 7.x	4088
8.x	4086
9.0	8182
9.5	16372
13.0	16364

ページ データ用の内部オーバーヘッド (バイト単位) は次のとおりです。

- 8.x より前のファイル形式 = 8
- 8.x ファイル形式 = 10 (4096 - 10 = 4086)
- 9.0 ファイル形式 = 10 (8192 - 10 = 8182)
- 9.5 ファイル形式 = 12 (16384 - 12 = 16372)
- 13.0 ファイル形式 = 20 (16384 - 20 = 16364)

オーバーヘッドの量は今後のアップグレードによるファイル形式で増える可能性があるため、ある程度の余白を持たせ、利用可能なバイトすべてを使用しないようにすることをお勧めします。詳細については、『*Zen Programmer's Guide*』の「[レコード長](#)」を参照してください。

BUTIL-41 : オルタネート コレーティング シーケンス (ACS) が見つかりません。

Maintenance ユーティリティは定義ファイルで指定されたオルタネート コレーティング シーケンス (ACS) を見つけることができません。オルタネート コレーティング シーケンス (ACS) ファイルが存在するか、また定義ファイルで指定されている名前が正しいかどうかを確認してください。

BUTIL-43 : ファイルは存在しますが、Replace オプションが指定されていませんでした。

ファイルが既に存在するため、Maintenance ユーティリティは BUTIL -CREATE コマンドが指定されてもファイルを作成しませんでした。このファイルを再作成するには、ディスクリプション ファイル内の既存ファイル置き換え要素を Y に指定します。

BUTIL-44 : filename でファイル アクセス エラー nn が発生しました。

Continuous オペレーションの開始時または終了時にファイル アクセス エラーが発生すると、適切なステータスコードとエラーの原因となったファイルのファイル名が Maintenance ユーティリティから返されます。対処方法は受信したステータスコードによって異なります。ステータスコード nn についての説明は、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

BUTIL-45 : 重複可能キーの数は 1 から 119 までの範囲でなければなりません。

ディスクリプション ファイルの重複可能キー要素で指定されている値をチェックしてください。

BUTIL-47 : BUTIL はコマンド ファイルを開けません。

コマンド ファイルが存在するか、またコマンド ファイルの場所およびファイル名が正しく指定されているかを確認してください。

BUTIL-48 : コマンド ファイルが空です。

コマンド ファイルを再度使用する前に、実行するコマンドをコマンド ファイルで指定します。さらに、正しいコマンド ファイル名が指定されたことを確認してください。

BUTIL-49 : コマンド ファイルが 1,000 バイトを超えています。

コマンド ファイルは 1,000 バイトを超えることはできません。コマンド ファイルがこの条件に合っているかどうかを確認してください。

BUTIL-50 : 内部エラーが発生したため、BUTIL は終了しました。

Maintenance ユーティリティは終了の原因となった内部診断エラーを検出しました。

BUTIL-52 : SQL のロード中は MKDE を中止できません。

MicroKernel をアンロードする前に MKDE をアンロードします。

BUTIL-53 : MKDE エラー *nn* が、ファイルまたはコマンド *xxxx* に対して発生しました。

特定のファイルまたはコマンドに関連したステータス コードが Maintenance ユーティリティから返されます。対処方法は受信したステータス コードによって異なります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

BUTIL-60 : キー セグメント ディスクリプター *nn* のキーワード *xxxx* が見つかりませんでした。

ディスクリプション ファイルの構文をチェックしてください。

BUTIL-61 : キーワード *xxxx* が見つかりませんでした。

ディスクリプション ファイルの構文をチェックしてください。

BUTIL-62 : キー セグメント ディスクリプター *nn* にはキーワード *xxxx* が必要です。

ディスクリプション ファイルの構文をチェックしてください。

BUTIL-63 : キーワード *xxxx* が必要です。

ディスクリプション ファイルの構文をチェックしてください。

BUTIL-65 : BUTIL はレコードを 1 件も読み込んでいません。

コマンドを正しく指定したか、また入力ファイルが正しい形式であるかを確認してください。

BUTIL-66 : BUTIL は、これまでに *nn* レコードを読み込みました。

ユーティリティは、BUTIL -LOAD コマンドを発行してから現時点までに、提示されたレコード数を読み込んでいます。このメッセージを受け取ったとき、コマンドはまだ実行中です。

BUTIL-70 : ファイルを閉じている際に MKDE エラー *nn* が発生しました。

ファイルを閉じている際に Maintenance ユーティリティからこのステータス コードが返されます。対処方法は受信したステータス コードによって異なります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

BUTIL-74 : Stop コマンドに対して MKDE エラー *nn* が返されました。

このメッセージは DOS 環境でのみ適用されます。BUTIL -STOP コマンドが発行された後で Maintenance ユーティリティからこのステータス コードが返されます。対処方法は受信したステータス コードによって異なります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

BUTIL-76 : BUTIL がページ アロケーション テーブル (PAT) を *nn* ページに書き込んだときにエラーが発生しました。

破損したファイルの修復中またはハードウェアのエラーが発生したときに Maintenance ユーティリティからこのメッセージが返されます。

BUTIL-77 : BUTIL がページ アロケーション テーブル (PAT) のミラー コピーを *nn* ページに書き込んだときにエラーが発生しました。

破損したファイルの修復中またはハードウェアのエラーが発生したときに Maintenance ユーティリティからこのメッセージが返されます。

BUTIL-82 : ディスクリプション ファイルのファイル スペックでエラーが発生しました。

Maintenance ユーティリティがディスクリプション ファイルのファイル仕様を読み込もうとしたときにエラーが発生しました。ファイル仕様を記述する要素が有効であることを確認してください。

BUTIL-84 : BUTIL の内部エラーです。

Maintenance ユーティリティは不正なポインターなどの内部エラーを検出しました。Maintenance ユーティリティを再実行してください。

BUTIL-90 : BUTIL は十分なメモリの割り当てができませんでした。

使用していないアプリケーションをアンロードして、サーバーで使用可能なメモリを増やしてください。

BUTIL-91 : BUTIL はファイルのサイズを特定できませんでした。

BUTIL -RECOVER コマンドを使用してファイルを回復してください。

BUTIL-100 : 内部ステータス コード *nn*

値 *nn* は、見つけることができなかった文字列リソースのステータス コードの ID を示します。そのステータス コードに関する情報がこのマニュアルに記載されていない場合は、弊社のテクニカル サポートまでご連絡ください。

BUTIL-101 : 処理されなかったファイルのリストです : *list*

ロール フォワードできないファイルを検出すると、ROLLFWD オペレーション中に Maintenance ユーティリティからこのエラーが返されます。ロール フォワードは中止され、処理されなかったファイルの一覧が表示されます。

このメッセージが Maintenance ユーティリティ メッセージ 103 と共に返された場合は、見つからないログ セグメントと、それ以降でログ ディレクトリに作成されたすべてのログ セグメントを元に戻してください。見つからなかったログ セグメントをすべて元に戻せない場合は、できるだけ多くのログ セグメントを元に戻してください。次に、ROLLFWD オペレーションを実行し、元に戻すことのできた最も古いログ セグメントのセグメント番号パラメーターを指定します。

BUTIL-102 : ロール フォワード エラーが発生しました。

MicroKernel がファイルをロール フォワードしている間に内部エラーが発生しました。

BUTIL-103 : ログ セグメント番号 *nn* が見つかりません。

セグメント番号パラメーターが指定されていない状態で、MicroKernel が検出できないログ セグメント番号を示す Restore Segment Number がロール フォワードされるファイルのいずれかに含まれる場合、ROLLFWD オペレーションの実行中に Maintenance ユーティリティからこのエラーが返されます。

BUTIL-131 : BUTIL はシーケンシャル ファイルを作成またはオープンできませんでした。

指定されたファイルを作成またはオープンできなかった場合、Maintenance ユーティリティからこのメッセージが返されます。シーケンシャル ファイルが存在するか、また読み取り専用属性が設定されているかを確認してください。

BUTIL-132 : ディスク ボリュームがいっぱいです。

データ ファイルを作成したり大きくしたりするには、より多くのディスク容量が必要です。

BUTIL-134 : BUTIL は新規ファイルを作成またはオープンできませんでした。

BUTIL -SAVE または -RECOVER コマンドに指定されたファイルを確認してください。ファイルは既に存在する可能性があります。

BUTIL-136 : BUTIL は新しいバックアップ ファイルに書き込めませんでした。

バックアップ ファイルの正しいパスとファイル名を指定したかどうかを確認してください。ファイルを書き込むだけの十分なディスク容量があることも確認してください。

BUTIL-141 : ファイル *xx* の拡張子は不正です。この拡張子は、未フォーマットの拡張ファイルのために予約されています。

有効な拡張子を指定してください。詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

BUTIL-142 : ファイル *xx* は存在します。

拡張ファイルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

BUTIL-143 : ファイル *xx* は存在します。このファイルはファイル *yy* の拡張部分です。このディレクトリから、このファイルとほかのエクステンション ファイルを削除してください。

拡張ファイルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

BUTIL-144 : ファイル *xx* が最大サイズに達したので、ユーティリティがエクステンション ファイルを作成しました。最後のエクステンション ファイルは *yy* です。

拡張ファイルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

BUTIL-145 : ユーティリティがファイル *xx* を見つけました。ファイル *yy* からデータをロードする前にこのファイルを削除してください。

拡張ファイルの詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

BUTIL-146 : ソース ファイルと出力ファイルを同一ファイルにすることはできません。

ソース ファイルと出力ファイルには別々のファイルを指定してください。

BUTIL-147 : ユーティリティは、MicroKernel エラー yy のためレコード番号 xx を読み込みません。ユーティリティは残りのレコードを逆順で読むことを試行します。

この問題を解決するには、その特定のステータス コードの説明を参照してください。

BUTIL-148 : プログラムがユーザーによって中止されました。

ユーティリティはユーザーによって停止されました。

BUTIL-149 : ユーティリティは STAT コマンドを処理するための一時ファイルを現在のディレクトリに作成できません。

現在のディレクトリへの書き込み権限を取得してください。

BUTIL-152 : ファイル filename を開く際にエラーがありました。

データ ファイル属性、パス、およびファイル名を確認してください。

BUTIL-155 : BUTIL はファイル filename を開けません。

パス、ファイル名、およびファイル属性を確認してください。

BUTIL-156 : データベースへのログインに失敗しました。MicroKernel ステータス xx が返されます。

この問題を解決するには、その特定のステータス コードの説明を参照してください。

BUTIL-157 : データベースからのログアウトに失敗しました。MicroKernel ステータス xx が返されます。

この問題を解決するには、その特定のステータス コードの説明を参照してください。

BUTIL-158 : レベル値が無効です。レベルは 0、1、2、または 3 である必要があります。

butil -setowner の説明を参照して、レベル値を有効なエントリに変更してください。

MKDE

MicroKernel エンジン メッセージ

MicroKernel によって生成されるメッセージを以下に示します。これらのメッセージには、MicroKernel Database エンジン用であることを示すため、先頭に "MKDE" を付けています。

MKDE-12 : <オプション名> オプションに指定された値が不正です。

Zen Control Center で、設定プロパティに正しい値を入力してください。PSQL 9 より前のバージョンの場合は、正しい値を `bstart.ncf`、`bti.ini`、または `bti.cfg` ファイルに入力してください。このエンジン設定は Windows プラットフォームでは Microsoft レジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-13 : 指定されたオプションは有効なオプションではありません。

不正なオプションを `bstart.ncf`、`bti.ini`、または `bti.cfg` ファイルから削除してください。MicroKernel エンジンの設定は Windows プラットフォームではレジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-16 : MicroKernel エンジンをロードするにはメモリが不十分です。

設定にしたがって MicroKernel をロードするにはシステムのメモリが不十分です。設定プロパティを使用してメモリの使用量が少なくなるように MicroKernel を再設定するか、不要なアプリケーションをアンロードしてください。

MKDE-20 : ログ ファイル filename への書き込みを行えません。十分なディスク容量があるか確認してください。

ディスク容量がいっぱいの場合、不必要なファイルを削除してスペースを解放してください。トランザクションログ ファイルへの書き込み中にエラーが発生すると、MicroKernel はシステム データを含むデータ ファイルが更新されるたびにトランザクション ログを再開しようとします。したがって、エラーの原因となっている条件が修正されたときに（たとえば、使用可能なディスク容量が増えた場合など）、MicroKernel は自動的にトランザクション ログを再開します。

MKDE-25 : ファイル filename はロール バック中です。

ロール バックとは、システムがクラッシュした後で MicroKernel がファイルの一貫性を保持するために使用する手続きのことです。この手続きによって、一番最近ファイルに加えられた変更（最後に行ったシステム トランザクションで加えられた変更）が元に戻されます。

MKDE-51 : プログラムは初期化に失敗したので、ロードされませんでした。

これは、エラーが発生したために MicroKernel がロードできない場合に MicroKernel から返される情報メッセージです。別のメッセージがこのメッセージと共に表示され、エラーの原因に関する詳細情報が提供されます。

MKDE-57 : ファイル filename をログ セグメント ディレクトリ xxxx に作成できません。

MicroKernel は、指定されたトランザクション ログ セグメント ディレクトリを初期化中に見つけることができなかったため、結果的にロードしませんでした。ディレクトリが存在するか、また MicroKernel がそのディレクトリに対してアクセス権があるかを確認してください。設定プロパティを使用してトランザクション ログ ディレクトリを指定します。

MKDE-58 : ファイル filename をログ セグメント ディレクトリ xxxx で開けません。

MicroKernel は、トランザクション ログ セグメント ディレクトリに含まれる指定されたファイルを初期化中に開けなかったため、結果的にロードしませんでした。ディレクトリとファイルが存在するか、また MicroKernel がそのディレクトリに対してアクセス権があるかを確認してください。ほかのユーザーが排他ロックでファイルを開いている可能性もあります。Monitor ユーティリティを使用して別のユーザーがファイルをロックしているかどうか確認してください。

MKDE-59 : ログ セグメント ファイル filename を作成できません。

MicroKernel は指定されたトランザクション ログ セグメント ファイルを作成できませんでした。十分なディスク容量があるか、また MicroKernel がファイルに対するアクセス権を持っているかを確認してください。ほかのユーザーが排他ロックでファイルを開いている可能性もあります。Monitor ユーティリティを使用して別のユーザーがファイルをロックしているかどうか確認してください。

このエラーは MicroKernel のロード中、またはロードが終了した後の通常のオペレーション実行中に発生します。MicroKernel のロード中にこのエラーが発生した場合、ロードは失敗し、問題が解決するまでオペレーションを実行することはできません。ロードが終了した後で通常のオペレーションを実行中にこのエラーが発生した場合、別の原因を考慮する必要があります。

トランザクション ログ ファイルの作成でエラーが発生したときに MicroKernel が既にロードされていた場合、トランザクションのログは停止します。しかし、MicroKernel はシステム データを含むデータ ファイルが更新されるたびに、トランザクション ログを再開しようとします。したがって、エラーの原因となっている条件が修正されたときに（たとえば、使用可能なディスク容量が増えた場合など）、MicroKernel は自動的にトランザクション ログを再開します。

MKDE-75 : ログ ファイルのフォーマットが不正です。

ログ セグメント ファイルの形式に互換性がない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ロールフォワードを行なっている MicroKernel のバージョンと、ログ ファイルを作成した MicroKernel のバージョンが同じであることを確認してください。

MKDE-76 : "xxxx" の Open オペレーションに失敗しました。MKDE エラー nn が返されました。

ロールフォワード オペレーション中にエンジンのエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード nn についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-77 : 予期せぬ MKDE エラー nn が、"xxxx" への INSERT で発生しました。

ロールフォワード オペレーション中に Insert エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード nn についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-78 : 予期せぬ MKDE エラー nn が、"xxxx" の UPDATE で発生しました。

ロールフォワード オペレーション中に Update エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード nn についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-79 : 予期せぬ MKDE エラー nn が、"xxxx" からの DELETE で発生しました。

ロールフォワード オペレーション中に Delete エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード nn についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-80 : システムのメモリが不足しています。

サーバーのメモリが不十分でプログラムが動作しない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。必要ないアプリケーションをアンロードして、ロール フォワード オペレーションを再試行してください。

MKDE-81 : 内部エラー *nn* が発生しました。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。オペレーションを再試行してください。

MKDE-82 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" の GET EQUAL で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Get Equal エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-83 : ログ ファイルが破損しています。

ログ セグメント ファイルが破損していて読み取り不可能な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ログ セグメント マネージャーはこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-84 : ログ ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。

エラーが発生してログ セグメント ファイルを読み取れない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。MicroKernel はこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-85 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CREATE INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CREATE INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-86 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の DROP INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの DROP INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-87 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-88: 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-89：予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-90：予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CLOSE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CLOSE オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-91：予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の GET POSITION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの GET POSITION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-92：予期せぬ MKDE エラー *nn* が BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-93：予期せぬ MKDE エラー *nn* が END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-94：予期せぬ MKDE エラー *nn* が ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-98：ログ セグメント ファイル SYS:SYSTEM/MKDE/LOG/0000XXX.LOG を作成できません。コンソール上または zen.log 内にエラーがありました。

MicroKernel は指定されたトランザクション ログ セグメント ファイルを作成できませんでした。十分なディスク容量があるか、また MicroKernel がファイルに対するアクセス権を持っているかを確認してくださいほかのユーザーが排他ロックでファイルを開いている可能性もあります。Monitor ユーティリティを使用して別のユーザーがファイルをロックしているかどうか確認してください。

このエラーは MicroKernel のロード中、またはロードが終了した後の通常のオペレーション実行中に発生します。MicroKernel のロード中にこのエラーが発生した場合、ロードは失敗し、問題が解決するまでオペレーションを実行することはできません。ロードが終了した後で通常のオペレーションを実行中にこのエラーが発生した場合、別の原因を考慮する必要があります。

トランザクション ログ ファイルの作成でエラーが発生したときに MicroKernel が既にロードされていた場合、トランザクションのログは停止します。しかし、MicroKernel はシステム データを含むデータ ファイルが更新されるたびに、トランザクション ログを再開しようとします。したがって、エラーの原因となっている条件が修正されたときに（たとえば、使用可能なディスク容量が増えた場合など）、MicroKernel は自動的にトランザクション ログを再開します。

MKDE-103 : システム エラー

システム エラーが発生すると、MicroKernel エンジンからこのメッセージが返されます。詳細については、「[MKDE-2039 : システム エラー : mn.nn.nn](#)」を参照してください。

MKDE-1001 : [キャッシュ割り当て] に指定された値が不正です。

有効な値を指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1002 : [最大圧縮レコード サイズ] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1003 : [拡張オペレーション バッファ サイズ] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1004 : [オープン ファイル数] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1005 : [オペレーション バンドル制限] に指定された値が不正です。

有効な値を指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1007 : [ハンドル数] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1008 : [I/O スレッド数] に指定された値が不正です。

有効な値を指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1009 : [ソート バッファ サイズ] に指定された値が不正です。

有効な値を指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1010 : [テンポラリ ソート ファイル] に指定されたパスが不正です。

有効なパスを指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1011 : 情報 : ハンドル数はオープン ファイル数より少なく設定することはできません。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1015 : [最大レコード サイズ] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。

MKDE-1017 : [システム トランザクションの実行制限] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。

MKDE-1019 : [アクティブ クライアント数] に指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-1020 : [ワーカ スレッド] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。ワーカ スレッド数はエンジンが動的に管理します。このメッセージを受け取った場合は、弊社のテクニカル サポートまでご連絡ください。

MKDE-1021 : [スレッド 優先デルタ] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1022 : [起動時間制限] に指定された値が不正です。

有効な値を指定してください。有効な値の詳細については、『*Advanced Operations Guide*』を参照してください。

MKDE-1023 : [ディスク I/O ウェイト リミット] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1024 : [グループ書き込み最大ページ数] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1025 : [Auto-Terminate Delay] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1026 : [Number of Lines Allocated] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1027 : [Message Log File Limit] に指定された値が不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1028 : [ホーム ディレクトリ] に指定されたパスが不正です。

Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

MKDE-1030 : [option_name] オプションに指定された値が不正です。

[option_name] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel エンジンからこのメッセージが返されます。有効な値を指定してください。

MKDE-1032 : 指定されたオプションは有効なオプションではありません。

指定されたオプションが不正な場合、MicroKernel エンジンからこのメッセージが返されます。有効な環境設定オプションを指定してください。

MKDE-1152 : MKDE はオペレーションを完了するための十分なメモリを得ることができません。

設定に従って MicroKernel をロードするにはコンピューターのメモリが不十分です。メモリの使用量が少なくなるように MicroKernel の構成を変更するか、不要なアプリケーションをアンロードしてください。

MKDE-1156 : ログ ファイル *filename* への書き込みを行えません。十分なディスク容量があるか確認してください。

トランザクション ログ ファイル *filename* に対して書き込みを行えません。十分なディスク容量があるか確認してください。ディスク容量がいっぱいの場合、不要なファイルを削除してスペースを解放してください。トランザクション ログ ファイルへの書き込み中にエラーが発生すると、MicroKernel はシステム データを含むデータ ファイルが更新されるたびにトランザクション ログを再開しようとします。したがって、エラーの原因となっている条件が修正されたときに（たとえば、使用可能なディスク容量が増えた場合など）、MicroKernel は自動的にトランザクション ログを再開します。

MKDE-1157 : システム エラー : *nn.nn.nn*

システム エラーが発生すると、MicroKernel エンジンからこのメッセージが返されます。詳細については、「[MKDE-2039 : システム エラー : *nn.nn.nn*](#)」を参照してください。

MKDE-1161 : ファイル *filename* はロール バック中です。

ロール バックとは、システムがクラッシュした後で MicroKernel がファイルの一貫性を保持するために使用する手続きのことです。この手続きによって、一番最近ファイルに加えられた変更（最後に行ったシステム トランザクションで加えられた変更）が元に戻されます。

MKDE-1164 : セマフォの作成中またはアクセス中にエラーが発生しました。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MKDE-1165 : 実行スレッドの作成中にエラーが発生しました。

[I/O スレッド数] 設定オプションの値を減らしてください。

このタスクを実行するには、ZenCC を起動し、構成するデータベース エンジンをクリックして [プロパティ] を選択します。[パフォーマンス チューニング] をクリックして、[I/O スレッド数] に適切な値を設定します。

MKDE-1166 : Zen イベント ログ ファイルを開けませんでした。このファイルはホーム ディレクトリに作成されます。ディレクトリが存在するか、また十分なディスク容量があるかを確認してください。

指定されたディレクトリにイベント ログ *zen.log* を作成できない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。コンピューターのディスクがいっぱいでないことを確認してください。

MKDE-1167 : IPC キューを作成できませんでした。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MKDE-1168 : クライアントがアクティブです。シャットダウンしますか。

少なくとも 1 つのアプリケーションが Workgroup エンジンを使用しているときに、そのエンジンをシャットダウンしようとする、このメッセージが返されます。それでも無理にシャットダウンすると、データが失われる可能性があります。

MKDE-1169 : BTI.INI をオープンできませんでした。

BTI.INI ファイルを開くことができない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。このファイルがホーム ディレクトリにあることを確認してください。このエンジン設定は Windows プラットフォームではレジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-1171 : BTI.INI ファイルは読み取り専用です。現在の設定を保存するために、一時的にこの属性を上書きすることができます。続行しますか。

BTI.INI ファイルに読み取り専用のフラグが設定されている状態で、BTI.INI の環境設定を変更しようとする、MicroKernel からこのメッセージが返されます。続行を選択すると MicroKernel は BTI.INI ファイルを更新しますが、読み取り専用のステータスはそのままだります。続行を選択しないと、MicroKernel は BTI.INI ファイルを更新しません。なお、環境設定は変更できますが、変更が有効なのは現在のセッションの間だけです。このエンジン設定は Windows プラットフォームではレジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-1172 : BTI.INI の書き込みエラーです。

システムのディスクがいっぱいでないか、またファイルに対して適切な権限があるかを確認してください。このエンジン設定は Windows プラットフォームではレジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-1175 : I/O エラー - *filename*

ファイルの読み取り中または書き込み中に I/O エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。通常、このメッセージと共にステータス コード 2 が返されます。

MKDE-1176 : 可変ページ エラー - *filename*

可変ページでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。通常、このメッセージと共にステータス コード 2 が返されます。

MKDE-1177 : ヘルプを使用できません。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000 で使用されなくなりました。

ヘルプ ファイル (btrieve.hlp) が見つからない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。このファイルがホーム ディレクトリにあることを確認してください。

MKDE-1178 : リソースを割り当てました。

これは MicroKernel エンジンからの情報メッセージです。特に何らかの対処を行う必要はありません。

MKDE-1179 : リソースを解放しました。

これは MicroKernel エンジンからの情報メッセージです。特に何らかの対処を行う必要はありません。

MKDE-1180 : システム エラー : *nn.nn.nn*

システム エラーが発生すると、MicroKernel エンジンからこのメッセージが返されます。詳細については、「[MKDE-2039 : システム エラー : *nn.nn.nn*](#)」を参照してください。

MKDE-1183 : オペレーションを完了するのに十分な使用可能キャッシュがありません。

MicroKernel の構成を変更してキャッシュ メモリの使用量を増やすか、ファイル ページ サイズを小さくします。

MKDE-1184 : ファイル ハンドル数を要求された値に設定できません。オープン ファイルの最大数は *nn* に減りました。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MicroKernel はオープン ファイル数を指定された値に設定できませんでした。メッセージに示された値が、代わりに使用されます。このメッセージが表示されないようにするには、同時に実行するアプリケーションの数を減らします。

MKDE-1192 : 設定は NOVDB.INI から読み取られます。BTL.INI に変更するには、現在の設定を保存してください。

MicroKernel をロードしたときに BTL.INI ファイルがあるはずの場所で NOVDB.INI ファイルが見つかり、このメッセージが返されます。BTL.INI ファイルを使用するには、設定プロパティを開き、現在の設定を保存します。このメッセージは旧バージョンの製品に関連するもので、新しいバージョンには適用されません。また、MicroKernel エンジンの設定は Windows プラットフォームではレジストリに、Linux プラットフォームでは Zen レジストリにあるので注意してください。

MKDE-1193 : MKDE は、デフォルトの設定を使用しています。

環境設定オプションの値が通常格納されている場所（Linux では Zen レジストリ、Windows ではレジストリ）に見つからないと、MicroKernel からこのメッセージが返されます。このメッセージは、内部デフォルト値が使用されており、それらはデフォルトの場所とは別の場所に保存されていることを示します。Zen Control Center を使用して環境設定オプションを更新します。『*Advanced Operations Guide*』の「[設定リファレンス](#)」を参照してください。

MKDE-1194 : 追加ワーカ スレッドに切り替わりました。

[ワーカ スレッド数] 環境設定オプションにより指定された数を超えるワーカ スレッドを作成しなければならない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。このメッセージが表示されないようにするには、[ワーカ スレッド数] オプションの値を大きくします。

MKDE-1207 : ログ ファイルのフォーマットが不正です。

ログ セグメント ファイルの形式に互換性がない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ロールフォワードを行なっている MicroKernel のバージョンと、ログ ファイルを作成した MicroKernel のバージョンが同じであることを確認してください。

MKDE-1208 : "xxxx" の Open オペレーションに失敗しました。MKDE エラー *nn* が返されました。

ロール フォワード オペレーション中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1209 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" への INSERT で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Insert エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1210 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" の UPDATE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Update エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1211 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" からの DELETE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Delete エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1212 : システムのメモリが不足しています。

サーバーのメモリが不十分でプログラムが動作しない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。必要ないアプリケーションをアンロードして、ロール フォワード オペレーションを再試行してください。

MKDE-1213 : 内部エラー *nn* が発生しました。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。オペレーションを再試行してください。

MKDE-1214 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" の GET EQUAL で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Get Equal エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1215 : ログ ファイルが破損しています。

ログ セグメント ファイルが破損していて読み取り不可能な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。MicroKernel はこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-1216 : ログ ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。

エラーが発生してログ セグメント ファイルを読み取れない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。MicroKernel はこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-1217 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CREATE INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CREATE INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1218 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の DROP INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの DROP INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1219 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1220 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1221 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1222 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CLOSE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CLOSE オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1223 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の GET POSITION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの GET POSITION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1224 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1225 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-1226 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2001 : [キャッシュ割当サイズ] オプションに指定された値が不正です。

[キャッシュ割当サイズ] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。Pervasive.SQL 8 からは、MicroKernel がこの値を動的に管理します。

MKDE-2002 : [最大圧縮レコード サイズ] オプションに指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。

[最大圧縮レコード サイズ] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2004 : [オープン ファイル数] オプションに指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

[オープン ファイル数] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2005 : [オペレーション バンドル制限] オプションに指定された値が不正です。

[オペレーション バンドル制限] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2007 : [ハンドル数] オプションに指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

[ハンドル数] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2008 : [I/O スレッド数] オプションに指定された値が不正です。

[I/O スレッド数] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel から、このメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2009 : [アクティブ クライアント数] オプションに指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

[アクティブ クライアント数] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2010 : [ソート バッファ サイズ] オプションに指定された値が不正です。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

[ソート バッファ サイズ] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、このオプションに有効な値を指定してください。

MKDE-2011 : [作業ディレクトリ] オプションに指定されたパスが不正です。

[作業ディレクトリ] オプションに指定された値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、有効なパスを指定してください。

MKDE-2012 : オプションに指定された値が不正です。

オプションの値が不正な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティに戻って、正しい値を入力してください。

MKDE-2013 : 指定されたオプションは有効なオプションではありません。

指定されたオプションが有効でない場合、MicroKernel エンジン からこのメッセージが返されます。設定プロパティに戻って、無効なオプションを削除してください。

MKDE-2015 : MKDE はオペレーションを完了するための十分なメモリを得ることができません。

設定に従って MicroKernel をロードするためのメモリがサーバーに十分ない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。設定プロパティを使用して、メモリの使用量が少なくなるように MicroKernel を再設定するか ([キャッシュ割当サイズ] 属性)、不要なアプリケーションをアンロードしてください。

MKDE-2019 : ログ ファイル filename への書き込みを行えません。十分なディスク容量があるか確認してください。

ログ ファイル *filename* への書き込みが行えないと、MicroKernel からこのメッセージが返されます。十分なディスク容量があるか確認してください。ディスク容量がいっぱいの場合、不必要なファイルを削除してスペースを

解放してください。トランザクション ログ ファイルへの書き込み中にエラーが発生すると、MicroKernel はシステム データを含むデータ ファイルが更新されるたびにトランザクション ログを再開しようとします。したがって、エラーの原因となっている条件が修正されたときに（たとえば、使用可能なディスク容量が増えた場合など）、MicroKernel は自動的にトランザクション ログを再開します。

MKDE-2024 : ファイル filename はロール バック中です。

filename ファイルがロール バックすると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ロール バックとは、システムがクラッシュした後で MicroKernel がファイルの一貫性を保持するために使用する手続きのことです。この手続きによって、一番最近ファイルに加えられた変更（最後に行ったシステム トランザクションで加えられた変更）が元に戻されます。

MKDE-2027 : セマフォの作成中またはアクセス中にエラーが発生しました。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MKDE-2028 : 実行スレッドの作成中にエラーが発生しました。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。この設定はエンジンが動的に管理します。

MKDE-2029 : イベント ログ ファイルを開けませんでした。

Zen イベント ログ (*zen.log* ファイル) を作成できない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ホーム ディレクトリがあるか、またコンピューターのディスクがいっぱいでないかを確認してください。さらに、MicroKernel がホーム ディレクトリとイベント ログ ファイルに対するアクセス権があることを確認してください。

MKDE-2039 : システム エラー : *nn.nn.nn*

システム エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MicroKernel エンジンではシステム エラー メッセージを使用して、このエンジンがオペレーティング システムの呼び出しを行った結果生じた予期せぬエラーを記録します。たとえば、このエンジンがオペレーティング システムにファイルの I/O 呼び出しを行ったときにエラーが返された場合、そのエラーはシステム エラーとして *zen.log* に記録されます。

システム エラーの形式は *id.op.rc* です。それぞれの要素は次のとおりです。

表 7 システム エラーの説明

id	一意なシステム エラー識別子
op	そのとき実行されていた Btrieve オペレーション
rc	オペレーティング システムからの予期せぬリターン コード

id は、オペレーティング システム呼び出しを行った MKDE 内のコードのセクションに対応しています。使用しているエンジンに応じて *id* の範囲は異なります。

表 8 システム エラー コードの範囲

100-299	共通のソース ベース
600-699	Windows 32 ビット プラットフォーム

共通のコード ベースには、ファイルの I/O 要求、変数の割り当て、キャッシングなどが含まれます。プラットフォーム固有の範囲には、それ以外の、ファイルを開く、閉じる、読み取る、ロックする要求が含まれます。こ

これらのコードによって、システム エラーが発生したときに実行していたエンジン コードの部分にたどり着くことができます。たとえば、110 ～ 124 の ID 範囲は、ディスク I/O 呼び出しを行う MicroKernel の I/O サブシステムに対応しており、これらの ID に関するシステム エラーは通常、ファイルの破損問題に対応しています。ID の一覧については、具体的なエンジンとコードの情報がなければいって重要ではないので、公開されていません。

システム エラーの 2 番目の部分はオペレーション コードです。これは、エラーが発生したときに処理されていた Btrieve リクエストに対応しています。たとえば、5 ならば GetEqual オペレーションです。Btrieve オペレーション コードの詳細については、『*Btrieve API Guide*』を参照してください。MicroKernel エンジンが Btrieve オペレーションとは特に関係のないタスクを実行している間にシステム エラーが発生した場合は、op は -1 に設定されます。

システム エラーの 3 番目の部分は OS のリターン コードです。ここに報告される値の意味は、実行した OS 呼び出しと発生したエラーの種類に応じて変わります。リターン コード値 0 は、ID ごとにそれぞれ異なる意味を持つように思われますが、いずれの場合でも OS は実際のエラー コードを返しませんでした。OS のリターン コードがゼロであるときのシステム エラーの一例を挙げると、OS 呼び出しは成功した旨を返すが、呼び出しによって返されたデータは期待したものではないという場合です。多くの場合、特定の場合に現れるシステム エラーは問題を示していません。実行されていた操作はエラーなしで再試行され、普通に処理が継続されるようです。

正常な操作を中断させる問題がある場合、システム エラーは、アプリケーションに返される Zen ステータス コードに対応したものとなります。たとえば、物理的に壊れているファイルにアクセスしようとする、116.5.0 のようなシステム エラーが生成され、アプリケーションはステータス コード 2 を受け取ります。

特定のシステム エラーが繰り返し発生すると同時にアプリケーションが異常な動作をする場合、そのエラーに関する記述がナレッジ ベースに見つからないときは、システム エラーとアプリケーションでのエラー症状の記述をご用意の上、弊社テクニカル サポートまでご連絡ください。当該のシステム エラーに関する詳細をご提供いたします。

また、Microsoft の Web サイトで Win32 エラー コードの一覧を確認することができます。

MKDE-2053 : 追加ワーカ スレッドに切り替わりました。

このメッセージは Pervasive.SQL 2000i で使用されなくなりました。ワーカ スレッドはエンジンが動的に管理します。

これは、[ワーカ スレッド数] 環境設定オプションで指定された数を超えるワーカ スレッドを作成しなければならない場合、MicroKernel から返される情報メッセージです。このメッセージが表示されないようにするには、[ワーカ スレッド数] オプションの値を大きくします。

MKDE-2055 : 名前付きパイプの作成エラーです。

パイプ マネージャー スレッドに名前付きパイプを作成できない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MKDE-2060 : レジストリの読み取りエラーです。エラー コード : nn

あらかじめ定義された設定がレジストリで見つからない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。次に MicroKernel を起動するときは -REGINSTALL 起動パラメーターを使用してください。このパラメーターにより、MicroKernel は各環境設定オプションのデフォルト値を使って、レジストリにセクションを再作成します。

MKDE-2061 : レジストリの書き込みエラーです。エラー コード : nn

レジストリへの書き込み中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。次に MicroKernel を起動するときは -REGINSTALL 起動パラメーターを使用してください。このパラメーターにより、MicroKernel は各環境設定オプションのデフォルト値を使って、レジストリにセクションを再作成します。

MKDE-2065 : Service Control ディスパッチャーの呼び出しエラーです。

サービスの初期化中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。

MKDE-2067 : このコンピューターには使用できる適切なプロトコルがありません。

サポートされているプロトコルがコンピューターにインストールされていない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。通信サーバーを初期化できません。

MKDE-2068 : 通信サーバーは使用できません。

通信サーバーのロード中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。このバージョンの MicroKernel に付属する通信サーバーのディレクトリが、システム パスに含まれていることを確認してください。

MKDE-2075 : トランザクション ログ ファイル LAST_SEG.LOG を開けません。

ログ ファイル形式が不正であるか、トランザクション ログ ディレクトリが存在しない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。メッセージを返した MicroKernel のバージョンと、ログ ファイルを作成した MicroKernel のバージョンが同じであることを確認してください。

MKDE-2076 : "xxxx" の Open オペレーションに失敗しました。MKDE エラー *nn* が返されました。

ロール フォワード オペレーション中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2077 : ログ ファイルのフォーマットが不正です。

ログ セグメント ファイルの形式に互換性がない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ロール フォワードを行なっている MicroKernel のバージョンと、ログ ファイルを作成した MicroKernel のバージョンが同じであることを確認してください。

MKDE-2078 : "xxxx" の Open オペレーションに失敗しました。MKDE エラー *nn* が返されました。

ロール フォワード オペレーション中にエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2079 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" への INSERT で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Insert エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2080 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" の UPDATE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Update エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2081 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" からの DELETE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Delete エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2082 : システムのメモリが不足しています。

サーバーのメモリが不十分でプログラムが動作しない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。必要ないアプリケーションをアンロードして、ロール フォワード オペレーションを再試行してください。

MKDE-2083 : 内部エラー *nn* が発生しました。

内部エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。オペレーションを再試行してください。

MKDE-2084 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、"xxxx" の GET EQUAL で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に Get Equal エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。同時に、指定されたファイルに対応するステータス コードも、MicroKernel から返されます。ステータス コード *nn* についての説明は、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2085 : ログ ファイルが破損しています。

指定したログ セグメント ファイルが破損していて読み取り不可能な場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。MicroKernel はこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-2086 : ログ ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。

エラーが発生してログ セグメント ファイルを読み取れない場合、MicroKernel からこのメッセージが返されます。MicroKernel はこのログ セグメントを使用してロール フォワード オペレーションを実行できません。

MKDE-2087 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CREATE INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CREATE INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2088 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の DROP INDEX で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの DROP INDEX オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2089 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2090 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータス コード *nn* の詳細については、「[ステータス コード](#)」を参照してください。

MKDE-2091 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2092 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の CLOSE で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの CLOSE オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2093 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が、*filename* の GET POSITION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に指定されたファイルの GET POSITION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2094 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が BEGIN TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に BEGIN TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2095 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が END TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に END TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2096 : 予期せぬ MKDE エラー *nn* が ABORT TRANSACTION で発生しました。

ロール フォワード オペレーション中に ABORT TRANSACTION オペレーションでエラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。ファイルが破損しているか、ログ ファイルが破損している可能性があります。ステータスコード *nn* の詳細については、「[ステータスコード](#)」を参照してください。

MKDE-2109 : ページ サーバーは、キャッシュ エンジン *IP address* が無効なページを *n* 秒間要求していないことを検出しました。

キャッシュ エンジンは、無効なページの要求を定期的にページ サーバーに送信します。MicroKernel は、指定された IP アドレスのキャッシュ エンジンが、予想以上に長い時間要求を行わなかった場合に、このメッセージを返します。これは問題があることを示している可能性があります。

MKDE-2111 : システム エラー : *nn.nn.nn* ファイル : *filename*

システム エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。これは、ファイル名を含んでいることを除けば、MKDE-2039 とまったく同じです。

MKDE-2130 : 文字 *nn* の周辺で JSON フィルターの解析エラーが発生しました。

クエリの解析に失敗すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。この問題を解決するには、クエリを書き直してください。

MKDE-2131 : JSON フィルター クエリ エラー : *nn*

クエリ エラーが発生すると、MicroKernel からこのメッセージが返されます。この問題を解決するには、クエリを書き直してください。

MKDE-2140 : Zen VSS Writer は正常に起動しました

このメッセージは単なる情報です。

MKDE-2141 : Zen VSS Writer を起動できませんでした - リソースに問題があります

名前付きリソースにおけるエラーのため、Zen VSS Writer を起動できませんでした。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2142:Zen VSS Writer を起動できませんでした - Windows ライブラリのエラーです : *library*

Windows の名前付きライブラリにおけるエラーのため、Zen VSS Writer を起動できませんでした。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2143 : Zen VSS Writer - Windows ライブラリのエラーです : *library*

Zen VSS Writer で Windows の名前付きライブラリによるエラーが発生しました。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2144 : Zen VSS Writer - 無効なイベント シーケンスが *state* 状態で検出されました

無効なイベント シーケンスが、名前付きの状態によって検出されました。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2145 : Zen VSS Writer はサポートされていない VSS 要求を受け取りました : *request*

受け取った要求は Zen VSS Writer ではサポートされません。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2146 : Zen VSS Writer - *state* 状態での例外です

Zen VSS Writer で、名前付きの状態時に例外が発生しました。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2147 : Zen VSS Writer は *state* 状態の間に ABORT イベントを受け取りました

名前付きの状態時に Zen VSS Writer で ABORT コマンドが発生しました。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2148 : Zen VSS Writer の状態 : *state*

このメッセージは単なる情報です。Zen VSS Writer は名前付きの状態にあります。

MKDE-2149 : Zen VSS Writer は MicroKernel Database エンジンを実行できません

ステージの凍結中に操作を完了できませんでした。弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

MKDE-2150:Zen VSS Writer は Windows XP をサポートしません。代わりに Backup Agent を使用してください。

このメッセージは単なる情報です。

MKDE-2151 : Zen VSS Writer は 32 ビット WOW64 プロセスをサポートしません。代わりに Backup Agent を使用してください。

このメッセージは単なる情報です。

MKDE-2154:Zen VSS Writer ウォッチドッグは長期間 [nn 秒] フリーズしたエンジンを検出しました。

長く静止し過ぎたため、Zen VSS Writer は中止されました。

MKDE-2160:プロセス ワーキング セットのサイズを最小 nn%d MB と最大 nn%d MB に設定できません。

MicroKernel が Windows オペレーティング システムに対してメモリを予約するよう要求したが、ハードウェアにおけるリソース要求によってそのメモリ予約が拒否されたときに、MicroKernel がこのメッセージを返します。この警告があっても、ほとんどの場合、MicroKernel は実行し続けます。この警告が発生する原因と、これに対処できる可能性があるパフォーマンス チューニングについては、『*Advanced Operations Guide*』の「[MicroKernel の最大メモリ使用量](#)」を参照してください。

MKDE-2161 : プロセス ワーキング セットのサイズを取得できません。

Windows オペレーティング システムにプロセス ワーキング セットのサイズを問い合わせたとき、MicroKernel に十分な許可やアクセス権がないために、その問い合わせが拒否された場合は MicroKernel がこのメッセージを返します。この警告があっても、ほとんどの場合、MicroKernel は実行し続けます。

MKDE-2162 : キャッシュ エンジンは (標準 | SQL Notify) NSL セッションを開けませんでした (PID %d、サーバー %s)。エラー コード : %d

リモート エンジンへのキャッシュ エンジンの接続を確立できなかった場合、MicroKernel はこのメッセージを報告します。アプリケーションはファイルを開けないようになります。この状況を解決するには、ネットワーク接続を再確立し、さらに、アプリケーションまたはローカル エンジンを再起動する必要があるかもしれません。

MKDE-2163 : キャッシュ エンジンは (標準 | SQL Notify) NSL セッションを閉じられませんでした (サーバー %s、PID %d)。エラー コード : %d

リモート エンジンへのキャッシュ エンジンの接続をシャットダウンしているときにエラーが発生した場合、Microkernel はこのメッセージを報告します。アプリケーションは、おそらくデータ操作を完了しました。この状況を解決するには、ネットワーク接続を再確立し、さらに、ローカル エンジンを再起動する必要があるかもしれません。

MKDE-2164 : キャッシュ エンジンは、SQL リスナーによるサーバー %s のリスンに失敗しました。エラー コード : %d

リモート エンジンへのキャッシュ エンジンの接続が中断された場合、Microkernel はこのメッセージを報告します。これにより、アプリケーションのデータ操作が中断されます。この状況を解決するには、アプリケーションまたはローカル エンジンを再起動する必要があるかもしれません。

MKDE-2165 : サーバー %s のキャッシュ エンジン SQL リスナーを起動できませんでした。

キャッシュ エンジンが SQL Notify リスナーを起動することができない場合、Microkernel はこのメッセージを報告します。これにより、このホストからの SQL ODBC ステートメントによる変更の後で、古いレコードが読み取られる可能性があります。この状況を解決するには、ローカル エンジンを再起動する必要があります。これは異常イベントです。弊社テクニカル サポートまでご報告ください。

MKDE-2166 : サーバー %s のキャッシュ エンジン SQL リスナーを停止できませんでした。

キャッシュ エンジンが SQL Notify リスナーを停止することができない場合、Microkernel はこのメッセージを報告します。これにより、このホストからの SQL ODBC ステートメントによる変更の後で、古いレコードが読み取られる可能性があります。この状況を解決するには、ローカル エンジン再起動する必要があります。これは異常イベントです。弊社テクニカル サポートまでご報告ください。

MKDE-2167 : サーバー %s で複数のキャッシュ エンジン SQL リスナーが検出されました。

複数の SQL Notify リスナーを実行していることを、キャッシュ エンジンが検出した場合、Microkernel はこのメッセージを報告します。これにより、このホストからの SQL ODBC ステートメントによる変更の後で、古いレコードが読み取られる可能性があります。この状況を解決するには、ローカル エンジン再起動する必要があります。これは異常イベントです。弊社テクニカル サポートまでご報告ください。

MKDE-2172 : ファイル : *filename* の最適化でエラー *nn* が発生しました。

最適化の検証が失敗したため、最適化は停止しました。ファイルに変更は加えられておらず、システムの操作も変化していません。データベースのパフォーマンスが懸念される場合は、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

REBUILD

Rebuild ユーティリティのメッセージ

このセクションでは、Rebuild がユーティリティが生成するメッセージの一覧を示します。

REBUILD-2 : メモリを割り当てられませんでした。

使用可能なメモリ量をチェックし、不要なアプリケーションやプロセスを終了してメモリを追加してください。

REBUILD-3 : *file_name* から *file_name* へ名前を変更できませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

ステータス コードの意味を確認し、ファイルの名前を変更できなかった原因の特定に役立ててください。

REBUILD-4 : MicroKernel Database エンジンのバージョン情報を取得できませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

データベース エンジンが実行されていること、およびステータス コードの意味を確認後、リビルドを再試行してください。

REBUILD-5 : *file_name* を削除できませんでした。

ファイルおよびディレクトリのアクセス許可を確認し、ファイルを削除できなかった理由を特定してください。

REBUILD-7 : *file_name* を開けませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

ステータス コードの意味を確認し、ファイルを開くことができなかった原因を特定してください。

REBUILD-8 : *file_name* をアクセラレイティド モードで開けませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

ステータス コードの意味を確認し、ファイルを開くことができなかった原因を特定してください。

REBUILD-9 : MicroKernel Database エンジン 6.x のアドバンスド機能を持つファイルを新規作成できませんでした。

正しいバージョンのデータベース エンジンがロードされているか、またファイル形式が 6.0 より前のバージョンではないか確認してください。

REBUILD-10 : 無効なパラメーターまたは値が指定されたか、コマンド ラインが不正でした。

ユーティリティに渡したパラメータと値を確認してください。

REBUILD-14 : 次の理由により、*file_name* をリビルドしませんでした :

提供された原因に基づいて適切に対処し、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-15 : 次のファイル进行操作しているとき、MicroKernel Database エンジンからステータス *code_number* が返りました : *file_name*

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-16 : *file_name* ファイルは既に 6.x フォーマットです。

リビルドされるファイルは既に 6.x フォーマットです。別のフォーマットを選択してください。

REBUILD-17 : *file_name* ファイルは有効な MicroKernel データ ファイルではありません。
Rebuild ユーティリティではこのファイルをリビルドできません。

リビルドされるファイルが有効な MicroKernel データ ファイルかどうかを確認して、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-18 : *file_name* の特性を取得できませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-19 : 指定された出力ディレクトリにアクセスできませんでした。*directory_name* は存在しないか、または書き込みアクセスが許可されていません。

ディレクトリが存在しているか、および Rebuild ユーティリティを実行するユーザーがそのディレクトリに対して読み取り / 書き込み権限を持っているか確認してください。

REBUILD-20 : *file_name* の処理中です。

リビルドが成功した場合は、" ファイルは正常にリビルドされました。" と報告されます。

REBUILD-24 : *file_name* のアクセスでエラーが発生しました。有効なファイル名が指定されているか確認してください。

ファイル名が正しいことを確認してからリビルド操作を再試行してください。

REBUILD-25 : 空のターゲット ファイルのオーナー ネームを設定しています。

リビルドされるファイルおよびターゲット ファイルに間違いがないか確認してください。

REBUILD-26 : 空のターゲット ファイルのインデックスを削除しています。

リビルド処理では以下の情報を出力してその操作のステータスを提供します。

古いファイルの先頭レコードを読み取っています。

新しいファイルにレコードを挿入しています。

古いファイルからレコードを読み取っています。

インデックスを新しいファイルへ戻しています。

REBUILD-27 : 変換中に、テンポラリ ファイルを出力ディレクトリに作成できませんでした。

ディレクトリを確認し、また Rebuild ユーティリティを実行するユーザーがそのディレクトリに対して読み取り / 書き込み権限を持っているか確認してください。

REBUILD-31 : *file_name* を作成できませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

また、Rebuild ユーティリティは以下の情報も出力するので、リビルド操作のトラブルシュー트에役立ててください。

合計 *number* レコードをコピーしました。

リビルド操作の開始時刻は *time* です。

REBUILD-34 : キー番号 *code_number* は不正です。

リビルドされるファイルに含まれるキーが有効かどうか確認してください。

**REBUILD-35 : ページ サイズ *page_size* は不正です。ページ サイズを *page_size* に変更します。
リビルド処理は終了しました。**

希望の形式に対して不正なページ サイズが検出されたので、そのページは有効なサイズに変更されます。

REBUILD-38 : リビルドはユーザーにより強制終了されました。

Rebuild ユーティリティは停止しました。

REBUILD-39 : ユーティリティはアンロードされないかもしれません。Ctrl+C を使ってユーティリティを停止してください。

Rebuild ユーティリティを停止しようとしたますが、これは推奨しません。Ctrl+C を使ってユーティリティを停止してください。

REBUILD-44 : *file_name* のクローンを作成できませんでした。MicroKernel Database エンジンのステータス コードは *code_number* です。

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-45: コマンド ファイル *file_name* には <end> または [end] 区切り文字がありません。

コマンド ファイルの各項目には、(ある場合は) ユーティリティ パラメーターと変換するファイルのセットを指定し、その後に <end> または [end] を続けます。

REBUILD-48 : ユーザー インターフェイス ライブラリを初期化できませんでした。

その他のアプリケーションを閉じてメモリを解放してください。

REBUILD-63 : ローカライズされたメッセージ テーブルを初期化できませんでした。

その他のアプリケーションを閉じてメモリを解放してください。

REBUILD-65 : 次の理由により、ファイル *file_name* を開けませんでした :

提供された原因に基づいて適切に対処し、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-66 : 操作は完了しました。結果については、*file_name* を参照してください。

結果に指定された項目を確認してください。

REBUILD-67 : エラーが発生しました。結果については、*file_name* を参照してください。

エラーの結果を確認してください。また、リビルド操作で以下の情報が提供されるのでトラブルシュー트에役立ててください。

ファイル : *file_name* 処理されたレコード数 : *number_processed*

REBUILD-68 : 次のファイルからレコードをコピーしているときにステータス コード *code_number* が返りました : *file_name*

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-69 : 次のファイルからレコードをコピーしているときに内部ステータス `internal_code` が返りました : `file_name`

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。内部ステータス コードが Zen ドキュメントに記載されていない場合は、弊社サポート サービスまでお問い合わせください。

REBUILD-71 : ファイル `file_name` のフォーマットは、現在 MicroKernel Database エンジンに設定されているフォーマット バージョンより新しいものです。

ファイルの作成時、指定したファイルを変換させたいファイル形式バージョンを使用するよう MicroKernel を設定してください。『*Advanced Operations Guide*』の「[作成ファイルのバージョン](#)」を参照してください。

REBUILD-72 : ファイルは `file_format` 以降へのみ変換されます。

ファイルを変換したいファイル形式を確認してください。

REBUILD-73 : MicroKernel Database エンジンは、ソース ファイルと同じフォーマットでファイルを作成するよう環境設定されています。これにより、`file_format` 以降のファイルのみが対象となります。

ファイルの作成時、指定したファイルを変換させたいファイル形式バージョンを使用するよう MicroKernel を設定してください。『*Advanced Operations Guide*』の「[作成ファイルのバージョン](#)」を参照してください。

REBUILD-74 : ソース ファイル `file_name` にはシステム キーが含まれていません。そのため、ユーザーの指定どおりにファイルをリビルドできませんでした。MicroKernel Database エンジンからステータス `code_number` が返りました。

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-75 : `file_format` は有効なファイル フォーマット値ではありません。ファイル フォーマット パラメーターで有効な入力値は 6、7、8、9、95 および 13 です。

有効なファイル フォーマット値を指定してからリビルド操作を再試行してください。

REBUILD-78 : 指定されたログ ファイル `file_name` は有効ではありません。許可される最大パス長を超えています。

ログ ファイルの完全なパス名の長さを短くしてください。

REBUILD-79 : 不正なデータベース名が指定されました。データベース名は `length` バイト以内で指定してください。

データベース名を確認し、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-80 : 指定されたパスワードは最大制限の `length` バイトを超えています。

パスワードを確認し、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-81 : 指定されたユーザー ID は最大制限の `length` バイトを超えています。

ユーザー名を確認し、リビルド操作を再試行してください。

REBUILD-82 : データベースへのログインに失敗しました。MicroKernel ステータス `code_number` が返りました。

ステータス コードの意味を確認し、リビルド操作の結果を特定してください。

REBUILD-85 : 出力ファイルのサイズが利用可能なディスク領域を超えています。

ディスクの容量を確認し、物理記憶域上に空き領域を作成してください。

REBUILD-86 : 長いオーナー ネームは 9.5 より前のファイル形式には設定できません。

オーナー ネームをクリアしてからリビルド操作を再試行してください。

REBUILD-90 : 長いオーナー ネームでは、変換は許可されていません。リビルドを行う前にオーナー名をクリアしてください。

オーナー ネームをクリアしてからリビルド操作を再試行してください。

REBUILD-91 : システム データ v2 でのリビルドは、v13 より古いファイルでは許可されていません。13 以降のファイル フォーマットを指定してください。

システム データ v2 でリビルドを行う前に、ファイルバージョンを 13.0 に変換してください。

VSS Writer

VSS Writer メッセージ

Zen VSS Writer コンポーネントによって生成されたメッセージは、「[MicroKernel エンジン メッセージ](#)」(MKDE メッセージ) のセクションの [MKDE-2140](#) から記載されています。